

大町桂月着



源氏と平民

東京 弘學館發行

明治
42 7 19
内交

序

我國の歴史は、三千年來、赫々たる光を放てり。金甌無缺の國は、世界中、我國を措きて、他に求むべからず。殊に万世一系の皇室を戴けることは、ひとり我國にのみ見る所也。我國には、もと經典なかりき。全く經典なかりしに非ず。儒教の四書五經、佛教の經文、耶穌教のバイブルの如き經典なかりしのみ。歴史が即ち我國の經典也。古來、祖先の勳功を語りつぎ、言ひつぐが、習はしにて、教育自から其間に行はれたり。かくて、三千年の美なる歴史を生ぜり。今後万劫、益美なる歴史を生ずべき也。

明治二十三年に下し賜はりし教育勅語は、實に日本國民の一種の經典也。余ひそかに以爲へらく、この勅語は、國史

の結論也。眞に勅語を解せむには、國史に通せざるべからず。普通教育にも、中等教育にも、國史の課あり。されど、今の歴史教育は、時勢の變遷を明にするに急にして、事件を記し、人物を描くに疎也。云はゞ、歴史の骨ありて、歴史の肉なし。今の少年、歴史に興味なきを以て、浮華放縱なる小説に就き、我國が今日の盛大を致せる所以を解せずして、妄りに外來の新説に雷同す。憂へざるべけむや。

一方を願れば、今の歴史家は、史料の蒐集にのみ力む。これ専門の歴史家としては、至極尤もなる事也。されど、國民は、讀むべき歴史を求む。歴史教育も、骨あると共に、肉ある歴史を得て、始めて効果あるべき也。余や歴史家には非ず、然れども日本國に生れて、筆を以て世に立つ。今の少年の爲めに、讀むべき歴史を草し、今の歴史教育の缺を補はむと

と、必ずしも僭越に非らざるべしと信ず。不才を願みずして、この書ある所以也。この書は、日本歴史の一部なり。なほ時代を限りて、この種の歴史を草し、完結の上、前後連絡して、一部の日本歴史となさむとする也。

余は少年の頃、日本外史を愛讀して、益を受けしこと多かりき。然るに、漢學の教育衰へて、従つて、日本外史を讀むものも次第に減じぬ。今や、日本外史は、普通一般の讀物に非ず。殊に日本外史は、同じ壇浦の戰を記するにしても、源氏の方と平氏の方とに分ちて、ひとまとめに之を記せざるがこれ同書の組立上、自から然らざるを得ざる事なれども、事件を知らむとするには、やゝ不便也。一方には、保元物語、平治物語、源平盛衰記、平家物語などの名文あれども、國文の素養あるものならでは、解し難き處多く、これも一般の讀物に

非ず。余がこの書は、主として、大日本史に據れり。文句も其儘取れる所少なからず。年表も全く大日本史に據れり。日本外史を讀むだけの漢文の素養なく、平家物語などを讀むだけの國文の素養なき人達をして、源平時代の歴史を一種の文學として味はしめむとすること、余の竊に自から期する所也。

明治四十二年七月

大町桂月

源氏と平氏

目次

第一章 源平時代の大観

皇子に姓を賜はる……皇子儲となる……地方に於ける源平二氏……天慶の亂……武權朝廷に無くなる……藤原の門を守る犬……源氏の全盛……院政……平氏、源氏に代る……保元の亂……平治の亂……院政の結果……保元の亂の餘脈……二條天皇と後白河上皇との御確執……清盛は御上の手を囁む犬也……鹿谷の密會……以仁王の令旨……平氏の滅亡……源平滅亡の比較……美福門院の操り人形。

第二章 源平二氏の家系

四大姓……藤原……橘……平……源……平氏の男系……源氏の男系……平氏の女系……源氏の女系……宮女と平氏……遊女と平氏……源平氣風の相違。

第三章 天慶の亂

嵯峨源氏……桓武平氏……源基經……平高直の六子……源光と平良文との格闘……源隆の三子と將門……國香

源氏と平氏 目次

真正良兼と將門……與世王……武藏武芝……貞盛と將門……藤原玄明……鎌倉幕府の前身……將門の和歌……藤原秀郷……將門亡ぶ……將門の前半生……天慶の亂の真相……唐澤山神社……神田神社……純友の亂……經基の功……貞盛を助ぐ……貞盛胎兒を食ふ。

第四章 伊勢平氏

三九

北條氏の祖……貞盛の子十五人……四天王……維衡と致頼……保昌と源氏……保昌と袴垂……保昌と致頼……和泉式部……小式部内侍……維茂と諸任との闘……維茂と鬼女……正度……正衡……平氏伊勢に降伏す。

第五章 藤原氏の爪牙

四八

清仲の墓切り……源氏の寶……源賢……頼光狐を射る……頼光鬼向丸を殺す……頼光の子孫……和歌六篇……頼家、頼賢父子歌に長ず……頼光の四天王……四十車に閉口す……季武と妖怪……貞道無禮を殺す……貞道と袴垂……貞道と綱……頼信、忠常の亂を平ぐ……天慶の亂の餘燼……頼信の安量と信義……頼信關白を殺さむとす……頼信父子を追ふ……源氏、藤原氏に媚ぶ。

第六章 東國と源氏

六三

頼朝、平直方の女を娶る……頼朝、源義朝東の士心を得る……關東と奥羽……安部頼朝、叛す……真正失戀……頼朝父子の大敗……佐伯主従の忠……茂頼の忠……清原武則頼朝に従ふ……貞任殺さる……前九年の役

……武則の射野……後三年の役の原因……義家の風流……義家兵法を學ぶ……義之國房を討つ……義家朝廷に取んぞらる……義家陸奥に赴く……頼光の室……義家近江權を攻む……弟法少二座……鎌倉權五郎の勇氣……鬼武と龜次……秀方の膽力……金澤權陷る……義家弟と闘ふ……義家の弓術は神也……義家弓を射す……義家の逸事……源氏の全盛。

第七章 院政と平氏

八二

道長以後の藤原氏……僧兵の跋扈……院政の三代……幕府は院政の變形也……院の爪牙……源氏衰へて平氏盛なる原因……義光、賢季と田園を争ふ……朝成地に墮つ……義家の子六人……義親亂を爲す……偽て義親……爲義叔父義綱を討つ……平正盛……平忠盛と海賊……諸公卿忠盛を侮る……祇園女御……忠盛の歌……平家の種……平家の花……平家の實。

第八章 保元の亂

九五

白河法皇の御世……武士王法を輕んず……白河法皇の侯佛……堀河天皇の御一生……鳥羽法皇の御一生……皇位の争……關白の争……保元の亂の主因……美福門院……待賢門院……保元の亂の副因……忠通と頼長……忠實と通子……近衛天皇と忠通……崇徳上皇と頼長……近衛天皇の御早世……爲朝の策……爲義の策……義朝の策……白河北殿の戦……爲朝の勇戦……白河北殿陷る……崇徳上皇の配流……頼長の死……清盛叔父を殺す……義朝親を殺す……義朝諸弟を殺す……孤島の爲朝……頼長と通盛。

第九章 平治の乱 一二七

二條天皇……後白河上皇の院政……藤原忠通の退隱……關白基實清盛の攝を奏る……藤原通敏の事案……藤原信賴と通憲……源義朝と通憲……義朝と清盛……信賴天皇上皇を幽す……通憲の死……清盛熊野詣より歸る……源義平の策……信賴の暴悪……硬骨漢の光頼……惟万天皇を擁して六波羅に投ず……伊通の駄西落……源平大に戦ふ……信賴の懐病……義平と重盛の格闘……頼盛の名刀……源氏の大敗……信賴の死……義朝の死……長田忠政の末路……鎌田政家の二子……義經の四天王……義平の死……熊房會に撃たる……頼朝の配流……夜叉御前……常盤御前の三子……美朝の十子……常盤の是非……義朝と頼政との罵合ひ。

第十章 平氏の榮華 一六七

信西入道後白河帝を讓る……院政の三代目……清盛太政大臣となる……清盛天皇の外祖となる……平氏一門の官職領地……二位尼……美福門院と二條帝……二代后……古郡の月……清盛漁夫の利を占む……平氏榮達の原因……六條天皇の御早世……平家の公達と美觀……小倉局……仕丁の風流……女の哭聲……高倉天皇は仁君也

第十一章 鹿谷の會合 一八〇

經宗惟方流るる……重盛宗盛の左右……將……實定殿島に闘つ……平氏と殿島綱……燈籠大臣……妓王……佛御前……實定左大將となる……有子の入水……瓶子倒る……行綱の墓切り……西光の白狀……重盛父を諷む……

成親等流るる……安徳天皇生る……有王俊寛を誅ぬ。

第十二章 以仁王の令旨 二〇三

重盛の病死……重盛の死因……重盛の人物と勳功……重盛の崇佛……清盛法皇を幽す……清盛三十九人の官爵を削る……静寂法印……沖の石の讃岐……頼政の和歌……菅菰の前……頼政短弓射る……頼政附兵をすかす……仲綱の名馬……以仁王……行家……新宮・本宮との戦……長谷部信連……渡邊殿……宇治の戦……頼政の討死……以仁王の御成敗……重衡奈良の伽藍を焼く。

第十三章 清盛の末路 二二五

福原遷都……牟御所……留守中納言……遷都の理由……長方の直言……復京……藤原氏中の快男子……清盛長方を重んず……清盛上皇に御野遊を強ふ……清盛の病死……清盛の遺言……平氏の急轉直下……天災地妖……旋風……飢饉……瘟疫……新和兩部の有様……清盛の人物と事案。

第十四章 頼朝の前半生 二四一

祐親頼朝を殺さむとす……比企周頼朝を扶く……康信頼朝に通信す……頼朝伊豆の目代を殺す……頼朝令旨を濫用す……長能と長親……義忠の討死……頼朝石碓山に敗る……三浦義明の討死……頼朝の再舉……廣常頼朝に風服す……源平の大軍富士河に對陣す……藤原忠清の末路……五万の平軍中の一男子……頼朝鎌倉に據る

……頼朝義經の對面……頼朝佐竹氏を攻む……朝政、義廣を破る……頼朝信濃に出陣す……所親の自殺……祐
清頼朝に従はず。

第十五章 義仲の一生……………二六一

義仲の少時……義仲、茂の大軍を敗る……礪波山の戦……實盛の討死……平氏の西奔……宗清の義……輝正
の琵琶……忠茂、行盛の歌集……後鳥羽天皇立つ……義仲の暴行……義仲、和を平氏に乞ふ……木曾の四天王
二名馬……宇治川の先登……二忠士の諫死……巴御前……義仲の討死

第十六章 平氏の滅亡……………二七六

平氏諸將の歌……一谷の戦……鶴庭の戦……直實と季重……景季の勇闘……知章の討死……知盛の馬……敦盛
の討死……小笠原相局……實衡斬らる……千手姫……瀧口入……横笛……維盛の入水……鎌倉の大本營……頼朝
の軍功……逆轉の争……義經暴風を冒して航海す……義經手紙を奪ふ……扇島の戦……佐藤繼信の討死……興
一扇を射る……美作屋十郎景清と闘ふ……義経弓を捨ふ……壇浦の戦……宗盛の最期……六代丸と文登上人……
……寂光院の建禮門院。

附録 源平時代の年表

目次終

源氏と平氏

文學士 大町桂月 著

第一章 源平時代の大観

皇子に姓を賜はる……皇子簡となる……地方に於ける源平二氏……天慶の亂……武權朝廷になくなる……藤原
の門を守る犬……源氏の全盛……院政……平氏、源氏に代る……保元の亂……平治の亂……院政の結果……保
元の亂の餘脈……二條天皇と後白河上皇との御座執……清盛は飼主の手を噛む犬也……鹿谷の密會……以仁王
の今日……平氏の滅亡……源平滅亡の比較……美福門院の操り人形。

天孫降臨に従ひし功臣の中にも特に有名なる天兒屋根命を祖とせる

藤原氏はその後鎌足に中興し、奈良朝に入りて益榮え、平安朝に至りては、鏡

争者幾んど絶えて、藤原氏の朝廷か、朝廷の藤原氏かといふ有様にたちいたれり。平安朝は太平の世也。されど、太平の美観は、京畿にとゞまりて、皇威は早く地方に衰へたり。莊園益多くなり、土豪跋邑し、盜賊横行し、私闘到處に起る。皇室の用度缺乏し、皇子は多く姓を賜はりて臣下となりしが、後にはそれもなくなりて、多く僧となり給へり。姓を賜はりしこと、前に一二の例ありしのみにて、大に盛になりしことは、實に嵯峨帝に始まる。嵯峨帝の皇子十七人は、みな源姓を賜はれり。平氏は桓武天皇より出でたれど、姓を賜はりしは、この頃也。仁明帝の皇子五人が源姓、文徳帝の皇子七人が源姓、清和帝の皇子四人が源姓を賜はれり。平氏と對立せし源氏は、清和帝より出でたれど、この姓を賜はりたる皇子よりは出でず。皇子貞純親王の子經基に至りて、始めて源姓を賜はりたるもの、これ也。僧となり給ひしは、光仁帝の皇子に一人おはしけるが、平安朝に至りては、平城帝の廢太子、僧となり給へり。その後、光孝帝の皇子十四人、源氏となり、唯一人僧となり給へり。

華山帝皇子二人は僧也。白河帝以後は、皇子に姓を賜ふこと無くなりて、多く僧となり給へり。白河帝皇子は六人が僧、堀河帝の皇子は二人が僧、鳥羽の皇子は五人が僧、後白河帝の皇子は七人まで僧也。

かく皇子が姓を賜はりし間は、皇威なほ地方に及びたりき。僧となるを常とし給ふに至りし時は、地方の豪族が、寧ろ朝廷にそむくも、源氏にそむく莫れと言ひし時なりき。

二

藤原氏は都に榮えたり。されど、その一族とても、都にのみは居られず。地方に下りて、土豪となりたるものも多し。鎮西に於ける少貳、大友、關東に於ける小山、結城、みな藤原氏也。貞盛と共に將門の亂を平げたる秀郷も藤原氏也。その子孫陸奥に榮え、清衡、基衡、秀衡の三代、兪大なる奥羽の山河の主となりて、勢威を擅にせり。源平二氏も、都にとゞまれるものもあり、地方に下りしものも多し。源氏にせよ、平氏にせよ、藤原氏にせよ、都にゐるもの

文弱となり、地方に下りしもの武強となりしは、境遇の自から然らしめし所也。

都にありては、源氏も平氏も藤原氏には遠く及ばず。されど源氏も平氏も皇室の血を傳へたり。藤原氏は傳へず。萬世一系の皇室を戴ける日本國民は、いつの世も、尊王の念あつく、地方にては、源平を重んじて、藤原氏を輕んじたりき。

土豪割據すれば従つて鬭争絶えず。理あるも弱ければ倒れ、非なるも強ければ勝つ。之を朝廷に訴へむとするも、雲路はるか也。強きものは、自から盟主たらしむとし、弱きものは、良き盟主を得むとす。この際皇室より出でて遠からず、而かも將門將を出したる源平二氏が、自然にその盟主と仰がれたるも、亦怪むに足らざる也。

三

地方の私鬭、頗る多かりしなるべけれども、天慶の亂はその私鬭の最も大

にして、顯著なるもの也。この亂は、はじめは嵯峨源氏と桓武平氏との私鬭なりしが、後には平氏の同士討となり、將門終に叛賊の名を蒙りて倒れ、貞盛は秀郷の力をかりて武勳を立て、源經基も亦武名をあらはせり。この時、戦争には間に合はざりしかど、藤原忠文が大將軍となり、經基副將軍となりて下りしは、なほ朝廷にも武力ありし也。されど忠文は大將軍たるを榮とせざりき。藤原氏衰微の端を見るべし。ついで、純友の亂に、小野好古大將軍となり、經基副將軍となりしにても、武權未だ全く朝廷を離れざりしを知るべし。されど、文恬武熙の餘、公卿の眼中、たい朝榮ありて、天下無し。朝廷に於ける異族の争絶えて、藤原氏の同士討始まり、詩歌管絃の末技を以て丈夫の本領と心得、公任の如き、詩と歌と管絃との三舟、いづれにてもよしとて、唯末技の才を誇るやうになり、征討の事、之を源平に一任するに至りては、朝廷は京畿の朝廷となりて、天下の朝廷にあらざるやうになりたり。

南都北嶺、即ち延曆寺にも、興福寺にも、武力あるに、朝廷には無し、藤原氏に

も無し。嗚呼危い哉、兵馬の權無くんば、これ政府なき也。而して、政府を組織せる藤原氏、こゝに力を用ゐず。朝廷と地方とは益隔離し、白日青天、群盜叢殺の下にもあらはるゝに至り、漸く武力の必要がわかりて、藤原氏は先づ源氏を引ききて、その爪牙とせり。頼光、頼信の如き絶代の名將も、藤原氏の門を守る犬なりし也。

關東に於ける忠常の亂や、奥羽に於ける貞任の亂や、その他征討の必要ある毎に、源氏用ゐられて、源氏の武勳天下に赫々たり。頼義は名將也。義家も名將也。而して、父祖四代の武名をうけつぎて、武門としての全盛をさしめたり。

四

後三條天皇と申す賢主出でて、藤原氏は一時屏息せり。白河帝に至りては、朝廷の外に、院政を行ひ給ひ、政令二途に分る。これ藤原氏を抑ふるに便にして、天下を治むるには、大なる損害也。頼朝の鎌倉幕府は、頼義、義家之れ

が基礎をきづき、白河帝の院政之れが備を作り給へる也。九鼎大呂よりも重き宣旨の權が、既に院宣に分れぬ。更に院宣より分れて、王の令旨となり、王の令旨より分れて、幕府の教書となりしは、自から然るべき順序也。白河帝は動かすべからざる大權を動かし給ひし也。

藤原氏に爪牙あり。院にも爪牙なかるべからず。北面の武士、これ也。その武士棟梁の材なかるべからず。白河帝は、始め義家を之に擬し給ひしが、猛烈なる源氏は、宮幃の趣味と合せず。平氏を以て、之に換へ給へり。平氏は、貞盛の後、久しく伊勢に一土豪として存在したりしが、こゝに始めて頭をもたげたり。院政と共に平氏興り、而して源氏衰へたる也。義家死して、源氏に棟梁の材なし。その子はみな、轡軻薄命也。孫の爲義直に義家の後をつぎたるが、威名遠く父祖に及はず。殊に義家の子義親、亂をなして、誅せらる。之を討ちたるものは、平正盛也。其子忠盛は、海賊を鎮めたり。平氏にさばかりの武勳は無けれども、院の爪牙となること、正盛に始まり、忠盛を

經て清盛に至りて、その爪牙益銳利になり、藤原氏爲めに倒れ、院自身もつぶれぬ。後白河法皇は所謂飼犬に手を噛まれ給へる也。

五

保元の亂に至りて、兵馬の塵終に都に及びぬ。崇徳上皇が御弟、後白河帝の皇位を奪ひ、藤原頼長が兄忠通の關白を奪はむとするが、この亂の本體也。源平は唯勅命のまゝに、兩方にわかれたり。天皇を始めまつり、關白よりして武門に至るまで、上下一同に、兄弟父子相闘ふ破倫の悲劇、茲に起る。而して逆は上皇に在り。戦やぶれて、讃岐に流され給へり。

後三年にして起りたる平治の亂は、表面は藤原信賴、源義朝が信西入道の藤原通憲を敵として、兵を挙げたる也。信賴誅せられ、義朝も死して、源氏は茲に一時全滅せり。これより後は、平家の獨舞臺也。

六

平治の亂後、見る／＼平氏が榮え、先代までは地下人と侮られしに、忽ち一

躍して藤原氏の地位を奪ひたるには、いろ／＼原因もあれども、その最も大なる原因は、院政の結果にして、保元の亂の餘脈也。

そを如何にと云ふに、近衛帝崩じて、崇徳上皇の皇子が立ち給ふべきの處、美福門院は崇徳上皇を恨みて、後白河天皇を立て給へり。當時、鳥羽法皇は門院の色に迷ひ給ひ、關白忠通も己れの地位をたもたむとて、門院の意を迎へければ、事みな門院のまゝに運びし也。かくて、保元の亂起りけるが、門院の意は、後白河天皇にあらすして、その皇子の二條天皇に在り。二條天皇は早く御母に死別れて、門院の宮に養はれ給ふ。門院の御實子、近衛天皇崩じ給ひて、今は二條天皇が最も可愛くおぼさるゝは、自然の人情也。されど、嫡流に遠き幼少の御身、殊に寺より出して、直に位に即かしめ給ふべくもあらねば、一時の橋渡しとして、假りにその御父を立てて、世の耳目を欺き給へる也。元より橋渡しに過ぎざれば、後白河帝は、御在位わづかに三年にして、位を二條天皇に譲り給ふ。これみな門院の御計らひ也。二條帝時に御年

わづかに十六。白河法皇院政の例をひらかれたれば上皇は之に倣ひ給はむとす。天皇は獨裁し給はむとす。一は不明淺慮の君、一は頑冥剛果の君、御父子の間、犬と猿も曾ならず。天皇の方には、經宗、惟方といふ才物あり。否、姦物あり。上皇にも之に對する人材なかるべからず。是に於て、清盛を引きて敵を倒し給ひしは、よかりしが、敵倒れて却つて我身が危くなり給ひぬ。後白河帝は院政の身上をどつぶし給ひたる所謂三代目にして、清盛は飼主の手を噛みたる犬也。而して、保元の亂よりこゝに至るまでの諸人物の活動を操る者は、實に美福門院也。

〇七

平氏益勢を振ふにつれて、成親、成經、康賴、俊寛などの不平黨、鹿谷に密會して、事をあげむとせしが、あらはれて失敗せり。ついで、源賴政、以仁王を奉じて兵を擧げしが、また失敗せり。されど、王の令旨功を奏して、源氏諸國に蜂起せり。就中最も大なる者を頼朝となし、次を義仲となす。

この前後に、重盛死して平氏の柱石先づくづれ、清盛死して平家の大厦傾かむとす。知盛の智、教經の勇ありといへども、また如何ともすべからず。旭將軍木曾に起りて、平家を西海に追ふ。旭將軍は頼朝と同士討して倒れ、範賴、義經、今や源氏の軍をつくして來る。一たび一谷に敗れ、二たび屋島に敗れ、終に壇浦にて、平氏は全滅せり。

平氏の榮華、わづかに二十年、興ること何ぞ餘りに速なる。而して亡ぶる事、何ぞ餘りに速なる。さは云へ、平氏を倒したる源氏も、僅々二三十年の間に亡びたり。その滅亡の速なることは、前後符節を合す。平氏の末路に泣くものは、また源氏の末路に泣かざるを得ず。唯平氏は一門生死を共にし、源氏は骨肉相食みて自から倒る。滅亡の様を譬ふれば、平氏は花散る春の庭にして、源氏は木枯すさぶ秋の野也。

第二章 源平二氏の家系

四大姓……藤原……橘……平……源……平氏の男系……源氏の男系……平氏の女系……源氏の女系……宮女と平氏……源氏と平氏……源平系風の相違。

源平藤橘は、我國の四大姓と稱せらる。藤原姓は天孫降臨に従ひし天兒屋根尊（ミヤノネノミコ）に出で鎌足に至りて大に振ひ其後南家北家式家京家に別れ北家の忠通の後近衛藤原九條二條一條の五攝家に別れ公季の後三條西園寺徳大寺姉小路武者小路等の閑院家となり我國開闢より今日に至るまで始終宮延の間に蕃衍して最も勢力ありし一大姓族也。橘姓は敏達天皇の皇子難波王より出で諸兄（シラノイ）奈良磨清友廣相（ヒロノカミ）逸勢（ヒコノセ）など有名なる人にして奈良朝より平安朝へかけて藤原姓と對抗せしが中頃衰へ後世に至りて橘氏の一族世にあらはれたり。平氏は桓武天皇より出で清盛に至りて藤原氏に代りて

政權を握り亡びて北條氏となり後世織田氏となれり。源氏は清和天皇より出で一時平氏と對峙し賴朝に至りて幕府を開き後世新田氏となり足利氏となり更に徳川氏となれり。斯く四姓は國史の大部分を構成せるもの也。而して藤橘は文也源平は武也。

二

なほ少し立入りて源氏と平氏とを調べむに先づ平氏の方は桓武天皇の皇子葛原親王に二王子あり。高棟王となし高見王となす。高棟王平姓を賜はれり。清盛全盛の時に方今平氏にあらざるものは人に非ずと廣言せし時忠は其後裔也。高見王の王子高望王も平姓を賜はれり。六子あり。國香良兼良將良廣良文良茂これ也。良將の子に將門あり。良文の後裔には畠山重忠千葉常胤平廣常などあり。良茂の後裔には三浦義澄和田義盛大庭景親梶原景時長田忠致などあり。國香に二子あり貞盛繁盛これ也。繁盛の子孫には城資盛長茂などあり。貞盛の後が平氏の嫡流なり。貞盛

の子二人、維將、維衡、これ也。維將の子維時は、貞盛養うて子とせり。其子に直方あり。直方六代の孫は、即ち北條時政也。嫡流は維衡より出でたり。維衡の子正度、正度の子正衡、正衡の子正盛、正盛の子忠盛、忠正の子二人、忠盛の子、六男三女あり。六男は、清盛家盛、經盛、教盛、頼盛、忠度、これ也。

平清盛の子、九男九女あり。九男は、重盛、基盛、宗盛、知盛、重衡、維俊、知度、清房、清貞、これ也。重盛の子十一男二女あり。十一男は、維盛、資盛、清經、有盛、師盛、忠房、宗實、重貞、行實、重通、清重、これ也。經盛の子には、經正、經俊、教盛あり。教盛の子には、通盛、教經、業盛あり。基盛の子には、行盛あり。宗盛の子には、清宗、能宗あり。知盛の子には、知章、知忠あり。維盛の子には、六代九あり。資盛の子には、盛綱、親貞あり。親貞は、織田氏の祖とせる所也。

三

次に源氏に移らむに、清和天皇の皇子貞純親王、親王の子經基、經基の子滿仲、滿仲の子頼光、頼親、頼信、源賢の四人、頼信の子孫源氏の正系となり、頼光、頼

親の子孫傍系となる。頼光の子孫には、頼政あり、行綱もあり。正系は、頼信より頼義に傳はる。頼義に義家、義綱、義光の三子あり。義光の後は、佐竹、武田、平賀、小笠原、山本等の諸源となる。義綱の後は、石橋氏の祖となる。義家に義親、義國、義忠、義時あり。義國の長子義重は、新田氏の祖となり、次子義康は、足利氏の祖となる。義親の子爲義、直に義家の後を嗣ぐ。

源爲義は、子福者也。二十三男一女あり。二十三男は、義朝、義賢、義憲、頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲朝、爲仲、行家、爲家、頼定、正親、維義、義俊、經家、義成、仙覺、頼憲、乙若、龜若、鶴若、天王、これ也。義賢の長子仲家は、頼政の養子となる。次子は、木曾義仲也。義朝の子は、十男二女、十男は、義平、朝長、頼朝、義門、希義、範、頼全、成、義圓、義經、知家、これ也。

四

以上は源平二氏の男系也。女系の方は十分には分らず。今、尊卑分脈によりて調べて見むに、平氏の正系は、忠盛に至るまでは、其母は分らず。唯、正

度の母だけは分れり。陸奥の住人長介の女也。忠盛の子の中にて清盛の母は宮女也。經盛の母は陸奥守信維の女也。教盛、賴盛は大宮權太夫家隆の女也。清盛の一族は、中納言顯時の妻となり、他の一族は、左兵衛佐隆效の妻となれり。清盛の子の中にて、重盛の母は、右近衛將監高階基章の女也。宗盛、知盛、重衡の母は、平時子、即ち平時忠の妹也。清盛の女九人。其一是、始め藤原成憲に嫁しけるが、後、花山院左大臣兼雅の妻となる。次は、建禮門院德子、即ち安徳天皇の御生母也。次は、六條攝政基實の妻盛子、准三后、高倉院准母、白川殿と云へり。次は、大納言隆房の妻となる。次は、普賢寺關白の妻となる。次は、修理太夫信隆の妻となる。次は、後白河院の女房となる。次は、常盤御前の生める所にして、花山院左大臣家の女房となる。次は、出家せり。維盛、資盛の母は、藤原成親の妹也。維盛は藤原成親の女を娶りて、六代丸を生めり。

五

次に源氏に移らむに、經基の母は、右大臣源能有の女也。滿仲の母は、橘繁古の女也。一に武藏守藤原敏有の女とあり。賴光の母は、近江守源俊の女也。賴親の母は、佐藤致忠の女也。賴信の母は、大納言藤原元方の女也。賴義の母は、修理命婦也。義家、義綱、義光の母は、平直方の女也。義親の母は、參河守隆長の女也。義朝の母は、淡路守藤原忠清の女也。義賢の母は、六條太夫重俊の女也。仲家の母は、周防守宗季の女、木曾義仲の母は、遊女也。義憲の母は、義賢に同じ。賴賢の母は、源基實の女也。賴仲、爲宗の母は、大夫尉資道の女也。爲成の母は、賀茂神主成宗の女也。爲朝、爲仲の母は、江口の遊女也。仙覺の母は、藤原顯仲の女也。爲義の一粒種の女子は、後鳥羽院に事へ、美万局と稱せらる。その母は、恒宮尼也。義朝の諸子の中にて、義平の母は、橋本の遊女也。朝長の母は、修理大夫範兼の女也。賴朝の母は、熱田大宮司藤原季範の女也。希義の母は、賴朝に同じ。範賴の母は、池田の遊女也。全成、圓成、義經の母は、常盤御前也。賴朝の同母妹は、中納言能保の妻となれり。

頼朝は平時政の女政子を娶りて、頼家實朝を生めり。源氏の傍系なる頼政の母は、勘解由次官藤原友實の女也。頼政の一女は、二條院讃岐局にて、沖の石の讃岐とて、歌にあらはれたる名媛也。なほ諸家系圖纂に據れば、義經の弟にて、義朝の十男なる八田知家の母は、八田局と稱す。宇都宮左衛門尉朝綱の女也。義朝滅亡の際、外曾祖八田權守宗綱、知家を匿しけるが、頼朝の世に至り、知家は用ゐられて、武者所を預けらる。右馬允に任し、左衛門尉に轉じ、兼ねて筑前守に任ず。其七世の孫治久に至り、足利尊氏の元弘の上洛に際し、副將軍となりけるが、この時に始めて源姓に復せり。

六

以上は源平二氏の女系の大要也。然り、大要なり、男系の如くには判然せざる也。余は英雄の子多く豚犬なりといふことを聞けり。又賢人の母は必ず賢母なりといふことを聞けり。又男子は多く母に似、女子は多く父に似るといふことを聞けり。又歴史の裡面には、必ず女子ありといふことを

も聞けり。人の性行の由る所は、單に男系のみを參考すべきにあらず。大に女系をも參考せざるべからず。今源平二氏の女系の大要によりて察するに、先づ驚くは、源爲朝、義平、義仲、範頼など、源氏中にも頭角を露はせる人々の母が、みな遊女なりといふ事也。思ふに、源氏は野にありて、従つて、婚嫁も貴紳と通するに及ばず。源義朝其女を藤原通憲の子に娶はせむとせしに、汝家の女は、我子に嫁すべき柄にあらずとて、斥けしは、半面の眞理あるを覺ゆ。朝にあれば優雅、野にあれば粗野といふことは、自然の勢也。粗野は、源氏の特徴也。これその能く武強なりし所以也。之に反して、平氏は、正盛、忠盛以後、宮幃に出入し、貴紳とも婚嫁を通じ、半文半武といふ家風を帯び來り、多く貴公子を出したり。斯る源平二氏の家風の相違は、女系の如何に關すること多かるべしと信ずる也。

第三章 天慶の亂

嵯峨源氏……桓武平氏……海基經……平高望の六子……源範と平長文との闘……源護の三子と將門……國香、
良正、良兼と將門……興世王……武藏武芝……貞盛と將門……藤原玄明……鎌倉幕府の前身……將門の和歌……
藤原秀郷……將門亡ぶ……將門の前半生……天慶の亂の真相……唐澤山神社……神田神社……純友の亂……經
基の軍功……貞盛盜を討ぐ……貞盛胎兒を食ふ

平氏も源氏も共に皇室より出でたり。皇室より出でて源姓を賜はりしもの、嵯峨源氏あり、清和源氏あり、宇多源氏あり、村上源氏あり、花山源氏あるが、平氏と對立せし源氏は、清和源氏也。嵯峨天皇の時に、多く皇子に姓を賜はれり。これ皇室の用度乏しきに因る也。後世、殊に白河天皇以後、皇子多く僧となり給ひしが、この頃は、臣下となりて、朝官に列せるもあり、諸國に下りて、國司となれるもあり。留まりて都に在るものは、文臣となり、諸國に

下りしもの、武門となりて、大に地方に勢力を振へり。同じ皇室の出なれど、一は公卿となりて柔弱に、一は武門となりて武強なりしは、居る所異なれば也。野にありて猪家に飼はれて豚、桓武平氏と清和源氏とが、野にありしは、幸か、不幸か、野にありしが故に、後世、二大武門となりて、世を動かしたる也。桓武平氏と清和源氏とが、如何なれば、野に在りて、二大武門となりたるかと云ふに、將門よく將種を出したるに因るは、云ふまでも無し。大化の革新に、唐制を真似して、我國を郡縣制度にしたれども、やがて、莊園、諸處に起り、政令ひろく行きわたらず、交通の不便は、朝廷と地方とを隔離し、文弱の餘弊、國司任に赴かざるやうになりて、地方は、群雄割據の有様となり、強は弱を凌ぎ、大は小を併す。日本國民は、由來皇室を尊ぶの念の強き國民也。皇室より出でたる源平二氏が、尊ばれしも、自然の數也。地方の豪傑ども、源氏或は平氏を擁して、自から衛り、自然に主従の關係を生じけるが、亂ある毎に、源平二氏は、征討の役を被りて、武威をかゝやかしけるを以て、人心之に服し、いつし

第三章 天慶の亂

嵯峨源氏……桓武平氏……海基經……平高望の六子……源亮と平其文との闘……源護の三子と將門……國香、良正、良兼と將門……興世王……武藏武芝……良盛と將門……藤原文明……鎌倉幕府の前身……將門の和歌……藤原秀郷……將門亡ぶ……將門の前半生……天慶の亂の真相……唐澤山神社……神田神社……純友の亂……經基の軍功……良盛を防ぐ……良盛胎兒を食ふ

一

平氏も源氏も共に皇室より出でたり。皇室より出でて源姓を賜はりしもの、嵯峨源氏あり、清和源氏あり、宇多源氏あり、村上源氏あり、花山源氏あるが、平氏と對立せし源氏は、清和源氏也。嵯峨天皇の時に、多く皇子に姓を賜はれり。これ皇室の用度乏しきに因る也。後世、殊に白河天皇以後、皇子多く僧となり給ひしが、この頃は、臣下となりて、朝官に列せるもあり、諸國に下りて、國司となれるもあり。留まりて都に在るものは、文臣となり、諸國に

下りしもの、武門となりて、大に地方に勢力を振へり。同じ皇室の出なれど、一は公卿となりて柔弱に、一は武門となりて武強なりしは、居る所異なれば也。野にありて猪家に飼はれて豚、桓武平氏と清和源氏とが、野にありしは、幸か不幸か、野にありしが故に、後世、二大武門となりて、世を動かしたる也。桓武平氏と清和源氏とが、如何なれば、野に在りて、二大武門となりたるかと云ふに、將門よく將種を出したるに因るは、云ふまでも無し。大化の革新に、唐制を真似して、我國を郡縣制度にしたれども、やがて、莊園、諸處に起り、政令ひろく行きわたらず、交通の不便は、朝廷と地方とを隔離し、文弱の餘弊、國司任に赴かざるやうになりて、地方は、群雄割據の有様となり、強は弱を凌ぎ、大は小を併す。日本國民は由來皇室を尊ぶの念の強き國民也。皇室より出でたる源平二氏が尊ばれしも、自然の數也。地方の豪傑ども、源氏或は平氏を擁して、自から衛り、自然に主従の關係を生じけるが、亂ある毎に、源平二氏は、征討の役を被りて、武威をかゝやかしけるを以て、人心之に服し、いつし

か源平は二大武門とは成りける也。

二

平氏にして先づ天下に名を成したるは平將軍と稱せられたる貞盛にして源氏は經基也。二人恰も時を同じうせり。而して有名なる天慶の亂起れり。

經基は貞純親王の長子也。貞純親王は清和天皇第六の皇子なりければ世經基を呼んで六孫王と云へり。經基は源姓を賜はれり。これ清和源氏の祖也。貞純親王は常陸守たり。經基も武藏介となりき。

平氏は清和源氏よりは古く桓武天皇より出でたれば貞盛にいたるまでには多く年所を経たり。桓武天皇の皇子葛原親王其子高見王其子高望王始めて平姓を賜はれり。實に桓武天皇四代の孫也。高望に六子あり。國香、良兼、良將、良廣、良文、良茂これ也。國香の子即ち貞盛也。貞盛と經基と同時代とすれば平氏は清和源氏よりも早く將門として世に立ちたる也。

三

清和源氏の前既に嵯峨源氏ありてその子孫東國に居るものもありたりき。その嵯峨源氏の子孫なる源宛と桓武平氏の平良文とが恨も意趣もなきに一場の戦を始めしことは管に當時の士風を發揮せるのみならず實に日本男子の特色を發揮せるものと云ふべし。良文も宛も共に東國にありてひとしく武名あり。各武を恃む。中傷する者あり。良文に謂つて曰く良文の武到底我に敵すべきにあらずと宛が言ひ居れりと。良文怒つて曰く論より證據宛まことに我と戦はむ勇氣あらば野に出であへと。中傷者之を宛に告ぐ。宛も怒つて曰くさらば野に出で合はむと。かゝる何でも無き事より隙を生じて二將いよ／＼武装して起てり。率ある兵各五六百人互に楯を擁して野に相對す。各兵を出して牒を通はしさていよ／＼楯を徹して相戦はむとす。良文宛に謂つて曰く今日の戦互に兵を率ゐては與なし。唯二人のみにて相戦はむは如何にと。宛快諾して單騎にて出で

来る。良文其兵を戒めて曰く、如何なる事ありとも出で来るべからず。われ若し討たれたらむ場合には、唯靜に我屍骸を引取りて葬れと。兩將今や單騎相對す。兩軍の兵手に冷汗を握りて見物す。良文射れば、宛巧に之を避く。宛射れば、良文巧に之を避く。互に射ることも上手なるに、避くることも上手也。血戰數十合、勝敗は決しさうにも無し。良文、宛に向ひて、君の手並は、わかりたり。固より恨ある仲に非ず。これにて戰をやめむは如何にと云へば、われも、しか思ふ。君の手並も、わかりたり。さらばとて、各引きかへす。兩軍の兵、こゝに始めて胸なで下して喜びあへり。都は歡樂の別天地、榮華の春の夢正に濃かなるに、誰か知らむや、殺氣東國の天にみなざらむとは。宛、良文兩將の武技神に入れりと云ふべき哉。

四

これより幾十年の後なりけむ。東國は兵馬の巷となりぬ。即ち天慶の亂、これ也。この亂を起したるものは、平將門也。良將の子にて、貞盛とは、從

弟同士也。

將門は、古來、逆賊と見做されたり。これ今昔物語以下の書が傳説を採録せるより出でて、後世の史家様によりて胡盧を畫きたるに因る也。然れども、將門が死したる年に、將門記といふ書物出來たり。この書、史家の閑却せしこと久しかりしが、名古屋寶生院に藏せる將門記の原本は、近年國寶となれり。重野博士、田口博士など、この書によりて、將門の叛臣に非ざることを辯ぜり。織田完之氏も將門記傳を著はして、將門記の足らざるを補ひ、將門の爲めに其冤を解くこと、頗る詳か也。

將門記は、初の部分缺けて、將門が源扶等と戰ふより始まれり。常陸の前の大椽に、源護といふものあり。その子三人、曰く扶隆、繁これ也。源田氏は源氏なるも、清和源氏に非ず。嵯峨源氏は、名が必ず一字なるより推すも、こは、嵯峨源氏なるべし。扶等三人は、女事によりて、將門を恨めり。女事の精しきことは、わからず。古人が歴史の裏面には、必ず女子ありと云ひたるが、

とかくに天慶の亂は、もとは女より起りたる也。將門の叔父なる良兼も、良正も従弟なる貞盛も、源護とは女縁あり、その縁にひかされて、扶等を助けて、現在の甥の將門を敵とせり。將門にありては、正當防衛也。扶等來り攻む、起つて戦はざるを得ず。叔父等本來の親儀を忘れ、妻方の家の加勢を爲して、同じく來り攻む。將門が之と戦ふも、亦止むを得ざる也。一戦に、扶等兄弟三人とも討死せり。國香は傷を被りて、これもやがて死せり。將門が殺せりと云へば、殺したるなれど、實は將門の敵を助けたる自然の結果にして、所謂自業自得といふもの也。

貞盛時に京師にありて、左馬允ヒコたりしが、父の死を聞きて、郷に還れり。されど、將門は必ずしも父の讐にあらざるを知り、むしろ之と和して、自家の安全を圖らむとす。然るに、良正は縁家に義理立て、扶等の弔合戦として來り攻む。敗れたり。

良正は援を良兼に乞ひ、良兼をして貞盛に説かしめて、之をも味方にして

來り攻む。また敗れたり。この戦、良兼死地に陥る。されど、わざと、一方を開いて、叔父をして身を全からしめたり。この一事、以て將門の雅量あるを推すべし。

五

以上三回の戦争、みな私闘也。而して、將門は、いつも防禦の地位に立てり。もとより朝廷に對して、何等の意趣あるものに非ず。されど、事、朝廷に聞え、源護、平將門、平貞盛の部將眞樹に對して、問罪使下れり。之に先だちて、將門は京師に上り、事の顛末を上申せり。廷議、將門を是とす。將門は却つて面目を施し、其名京師に轟けり。

然るに、將門郷にかへれば、良兼しふねくも、またく來り攻む。一たび良兼敗れて退きしが、再舉して來りし時には、將門病めり。戦やぶれて、妻子は生捕られたり。將門の遺憾想ふべし。

窮鼠、猫を噛む。將門の勇悍、譬ふれば、虎也。こたびは、積極的に進んで良

兼を攻めしが、天候利あらず、思はしきことも無くして引き退きぬ。

六

茲に將門の爲めに氣の毒なる事起れり。即ち天慶元年十一月五日、平良兼源護、平貞盛、藤原公雅、秦清文等宜しく將門を追捕すべしとの官符出でたる事也。上下隔離し、朝議反覆す。將門の冤想ふべき也。さるに關東の諸國守、將門の強を憚りて、敢て發せず。良兼大に憤慨し、將門の侍童春丸を威しすかし、その爲めに便宜を得て、將門の虚を衝く。將門の兵、わづかに十人されど、勇將の下に弱卒なし。良兼は、終に志を得ざりき。

貞盛は、官の助を得むとて、兵をつれて京に上らむとす。將門聞き知りて、輕騎之に追ひ、信濃の千曲川畔にて之に及びて、戦つて悉く其兵を殺す。貞盛身を以て纒に免れて、京に上り、さまざまに將門を讒言して還れり。

七

こゝに、また將門の爲めに不利益なること起れり。武藏權守興世王、武藏

介源經基と足立郡司判官代の武藏武芝との間に争ひ起れり。興世王の素性は古來不明として、史家に閉却せられたるが、將門記傳に據れば、桓武天皇の皇子中務卿伊豫親王、其子宮内卿繼枝王、其子紀伊守三隈王、其子伊勢介村田王、其子興世王也。將門の義侠、起つて其争を和解せり。武藏の府中にて、仲直りの宴を催す。興世王至る。武芝至る。經基かくれて至る。武芝の兵、經基の兵を恨めることありて、往いて襲撃す。經基の兵大に敗れ、經基驚いて引き退く。將門折角仲裁を試みて、却つて恨を買へり。經基潜行して京に入り、興世王、將門を惡しざまに讒言す。太平の久しきに慣れたる世の事として、京師は上を下へと騒擾せり。

時の首相藤原忠平は、將門の舉動に於ける實否を明確にせよとの敎書を出せり。これに依りて、常陸下總下野上野武藏五箇國の解文上られたるが、みな將門が謀叛の無實なることを證明せり。かゝる程に、良兼は死去せり。良正や源護は如何にかしけむ。今は貞盛のみ將門の敵となりぬ。

武藏には新國司百濟貞連下りて興世王を抑ふ、興世王恨んで來りて身を將門に託す。諸國の解文は、却つて將門の幸となりて、撥亂の功ある者との言、廷議に上るに至りしが、こゝに將門の爲めに最後の危難起れり。常陸國の住人に藤原玄明といふものあり。官物を納めず。國司藤原維幾に追捕せられむとし、家を提げ來りて將門に投ず。窮鳥懷に入れば、獵夫も之を殺さず。將門の義俠、この玄明を容れたり。これによりて、將門は、常陸の國司と戦はざるを得ざるに至れり。玄明は、常陸の住人とあるが、住人とは、土地を有する豪族の事也。住民の意味には非ず。

天慶二年十一月、維幾は常陸の國境まで進軍す。將門も進んで之に對す。先づ人をして言はしめて曰く、玄明を許して舊土に安堵せしめよと。惟幾聽かず。戦つて大に惟幾を破る。將門の兵、勢に乗じて、國府に逼り、惟幾を拘禁し、三百餘の邸宅を焼き、大に國府を荒らせり。こゝに至りて、將門は、終

に朝議を免るゝ能はざる也。一州を取るも、誅せらる、八州を取るも、亦誅せらると、興世王が將門に説きしは、この際の事也。あはれ毒くは、皿、將門の末路は、暗雲慘憺たり。

九

將門、常陸より進んで下野に入れば、國司出でて降る。更に上野に入れば、其國司も印鑑を渡して、京師に逃げ去れり。更に武藏、相模の印鑑をも取れり。八州風靡すといふ有様也。下總の應南を王城に擬し、百官を設くといふの事實は、ありたりとするも、もと自家を衛りて、八州を鎮むるの一方、便に過ぎず。後世、源頼朝が鎌倉に幕府を起したると、異名同實也。朝廷に反抗するものとも思はれず。東國には、幕府なかるべからざることは、この時にも、既に切なりし也。

將門進んで貞盛を求む。貞盛巧に身を隠して、にげまはれり。貞盛の妾と源扶の妻とを生捕れり。部下の兵、之を辱めむとし、貞盛の妾の衣裳を剝

きて裸体にす。將門之を聞いて曰く、女人の流浪、速に本屬に返すは、法式の例也。又巖寡孤獨は優恤を加ふること古來の恒範なりと。衣一襲を與へたり。歌をさへ贈りて曰く、

よそにても風の便りに我は問ふ

枝はなれたる花のやどりを

貞盛の妾の返歌に曰く、

よそにても花のにはひの散りくれば

我身わびしとおもはえぬ哉

源扶の妻も歌を作りて曰く、

花散りし我身もならず吹く風は

こゝろもあはきものにざりける

兵馬の間、この風流を見る。將門は涙ある人と云ふべき哉。されど、兵士をねざらひて散じ去らしめて、自から備ふる所少なかりしは、甚だ不徳也。貞

盛は、藤原秀郷と共に、その不意に乗じて來り襲ふ。其兵四千人、將門の兵は四百人、衆寡敵せず、將門終に戰死せり。時に天慶三年二月十四日也。興世王も、玄茂も、ついで殺されて、天慶の亂、こゝに全く平らぎぬ。藤原忠文、大將軍となり、源經基、副將軍となりて、官軍東下しけるが、途にして戰捷を聞けり。されど、經基は、讒訴幸にも事實となりければ、其功によりて、從五位下に叙せられたり。貞盛は、秀郷の力をたよりたれども、ともかくも實際戰ひたれば、正五位上に叙せられたり。秀郷の功最も大なるを以て、從四位下に叙せられたり。

一〇

以上は、將門記に據り、織田氏の傳を參考して、天慶の亂の大要を記せるもの也。將門記の作者は、わからず。書中、佛語佛説を交へたるを見れば、僧侶の作なること必せり。將門が常陸の國府を襲ひたるのち、藤原忠平に上りし書を載せたるを見るに、或は將門の帷幄にありて、この書を草したる人に

わらざるかとも疑はる。なほ織田氏の傳によりて將門の前半生を記さむに、平良將の子也。良將の父高望王は、始めて平姓を賜はりけるが、これは下總介に終はれり。良將は陸奥鎮守府將軍となり、後武藏守となれり、その兄弟は、いづれも人材と見えて、國香は常陸大掾となり、良兼は下總介となる、良文は武藏大掾となれり。良文死せし時、將門年なほ幼也。國香、良兼、良正に遺言して、下總の豊田、相馬二郡中の莊園田産を管理し、將門の生長を待つて之を還付せむことを託せり。「長安少年無遠圖、一生唯羨執金吾」と詠じけむ。將門は資性雄邁にして、俗達、滿身の覇氣、草深き關東に埋るゝを甘んずべくもあらず。都に上りて、首相藤原忠平に事へたり。其推薦によりて、檢非違使^{けんひ違}たらむ事を求めたれど、其志を得ず。遂に二十七八歳の頃、本國なる相馬の御厨^{ごく}の下司に任せられて、歸り來り、豊田郡に居れり。御厨とは、伊勢の神宮領神饌供御の地也。その下司は、莊園の貢物を掌るものにて、名譽ある職也。然るに、叔父等は預れる田産を返さざるのみならず、將門の新婚に關し

て、縁家に黨して、將門を敵としける也。

將門の死せし年は、三十八歳也。その死せし處は、猿島の北山なるが、田口博士は、今、北山田と稱する地あり、これならむと云へり。將門が歸國して後は、絶えず受け身となりて、正當防禦の手段として戦ひし也。與世王と玄明との事に關して、俠氣を發揮し、止むに止まれず、威を關東に振ひしは、所謂騎虎の勢也。神器を覬覦するなどは、思ひもよらざる所也。云は、天慶の亂は、大なる私闘に、騎虎の勢の加はりたるもの也。而して、勝てば官軍、負ければ賊の實例は、將門に於ても之を見る也。

一一

藤原秀郷は、藤原魚名の子孫にして、下野の押領使たりしが、後に武藏守ともなり、鎮守府將軍ともなれり。下野の唐澤山に唐澤山神社あり。藤原秀郷を祀る。明治の世になりて、別格官幣社となれり。東京にて、日枝神社と對立せる神田神社は、もと平將門を祀りしが、これは明治の世になりて、大巳

貴命に代へられ、將門は下りて、其葬社に祀らる。

將門の亂と時を同じうて、純友亂を西に起せり。されど、毫も將門とは關係あるに非ず。將門が純友と共に叡山に上りて、皇城を見下し、われは王氏なれば天子となるべし。子は藤原氏なれば相となれと語れりと云ふが如き、秀郷の來訪せし時、將門がちたる飯を拾うて食へりと云ふが如き、みな當時の浮説也。

源經基は、天慶の亂後、小野好古よのまに従ひて藤原純友を討ち、好古凱旋の後、ひとり命をうけて、純友の殘黨を平げたり。武藏守ともなり、鎮守府將軍ともなり、位は正五位下まで進めり。

貞盛は將門と戦ひしより外には、軍功なし。武藏守ともなり、丹波守ともなり、陸奥守ともなり、鎮守府將軍ともなり、位は從四位下まで進めり。

當時、武勇は將門が第一なるが、惜むらくは、朝敵と目せられたり。されば、秀郷、貞盛、經基を武將の三幅對と云はむか。經基が周章て、京都に逃げ上

りて、將門與世王を讒訴したるは、褒めた話に非ず。貞盛も秀郷の力に依頼したるは、人の憤身禪にて角力取りたるの觀あるを免れず。されど、平氏は貞盛に興り、源氏は經基に興れる也。

一二

なほ貞盛に関する逸事二つばかり、今昔物語によりて記さむに、貞盛曾て陸奥より京に上りて、かねて知りあへる僧の寺を訪ふ。この僧は家豊かなりけるが、或時其家に怪しきこと起りければ、賀茂の忠行といふ陰陽師に占ひて貰ひしに、某月某日、物忌をかたくせよ、盜人に殺されむとするの兆ありといふ。いよく其日になりて、門を鎖して人を通はせず。貞盛とは親しき仲なれども、拒みて入れず。盜難あらむと聞きては、猶更の事なり。われよく御身の難を防がむといへば、僧も成程と思ひ、貞盛一人を入れ、從兵はみな去らしめり。其夜果して盜賊恐び來る。その數、十人、貞盛一人にて之に當り、其半を殺す、餘は恐れて逃げゆく。そのか蔭にて、僧は安全なるを得た

一三

この逸事だけならば、貞盛の勇氣も知られて、面白き逸事なれども、他に甚だ面白からぬ逸事あり。貞盛丹波守となりて、任地にありける時、身に悪き瘡出来たり。京都より醫師を呼びよせけるに、胎兒を取りて服用せざれば愈えずといふ。貞盛子の維衡（いこう）を呼びて、汝の妻孕めり。その胎兒を我に得させよといふに、維衡陽に之を諾し、醫師の許に至りて、我子の助かる方法は無きやと訴ふ。その方法ありとて、醫師は貞盛にあひ、血縁ある胎兒にては効なしといふ。さらばとて、他の胎兒をとりて服用して、貞盛の病は愈えたり。醫師は厚き報酬を得て去らむとす。貞盛また維衡を呼びよせ、あの醫師が京に還らば、我事を云ひふらすべし。さすれば、わが耻辱此上もなく、實に一家の存亡に關す。汝途に要して、醫師を殺せと命ず。維衡またも陽に之を諾し、醫師には、其實を告げ、山にかゝり給はむ、御身は馬より下りて、徒歩

し判官代をして代りに馬に乘らしめ給へといふ。醫師その言の如くす。維衡要撃して判官代を射殺し、父には馬上なる判官代を醫師と思ひて射殺せりと言ひわけして事すみたり。維衡は、よく恩に酬いたり。さるにも、平將軍と呼ばれたる名將も、心は豺狼なりし哉。

第四章 伊勢平氏

北條氏の祖……貞盛の子十五人……四天王……維衡と致頼……保昌と源氏……保昌と袴垂……保昌と致頼……和泉内式部……小式部内侍……維茂と諸任との關……維茂と鬼女……正度……正衡……平氏伊勢に降伏す。

平貞盛の子の維將は、北條氏の祖となり、維衡は平家の嫡流の祖となれり。貞盛は質子の外に、甥や孫を養ひて子とし、其數十五に及べり。甥の維茂は年最も若くして、第十五番に當りければ、世呼んで餘五將軍と云へり。貞盛の十五子の中にて、勇名の最もあらはれたるものは、維衡と維茂と也。

維衡は源頼信、平致頼、藤原保昌と勇名を齊しうし、四天王と呼ばれたり。四天王の筆頭は頼信也。經基の孫、滿仲の第二子、而して源氏の謫流は、この人より傳はれり。平致頼は、下總介良兼の孫、武藏守公雅の三男也。從五位下、備中椽とまでなりたる人也。維衡は諸國の守となりけるが、後、伊勢に居る。致頼に挑まれて、私闘を起し、喧嘩兩成敗、挑みたる致頼は、遠く隱岐に流され、維衡は、近く淡路に流されたり。かくて、四天中の二王は、兩虎相闘ひて、末路を誤りぬ。致頼の子、左衛門大尉致經は、歌に長じて、其作、詞花集に入れり。弓術にも長ず。大箭を射ければ、世呼んで大箭の左衛門尉と云へり。維衡の子孫は、世々伊勢に居りたり。伊勢平氏と稱せらる。而して、この伊勢平氏が平氏の謫流也。

二

四天王の第一なる頼信は、後に説くべし。今一人の藤原保昌は、藤原氏の南家也。即ち武智磨の子孫也。藤原氏の子孫、殊に文恬武熙の世都に生長

して、勇名を源平二武門と齊しうせるは、雞群の一鶴と云ふべし。されど、保昌は、頼信の叔父との事なれば、源氏との血縁上、自から其感化を受けたるにや。保昌が盜賊の巨魁なる袴垂を威服したることは、今昔物語にも出でて、三尺の童子にも知られたる、有名なる事實也。今之を略記せむに、保昌曾て笛を吹きながら、冬の野を獨り行く。夜既に更け、人跡絶えて、月おぼる也。袴垂之を見付け、其衣を奪ひ取らむとて、之に尾したるが、恐しくて近よれず。二三町尾してゆくに、保昌は一向平氣にて、笛を吹きすます。袴垂わざと、足音を高く立てければ、毫も驚く氣色なく、笛を吹きながら、一寸ふりかへるに、流石の袴垂覺えず、身をふるはす。終に思ひ切つて、刀を抜いて斬りかゝらむとすれば、保昌顧みて一喝す。袴垂氣沮し、力抜けて、地に平伏す。何者ぞと問ふに、實を告ぐれば、汝の名はわれも聞き知れり。凡庸の徒に非ず。われについて來れとて、先に立ちて、笛を吹きつゝ。袴垂言はるゝまゝに、小さくなりて、保昌の家に至る。保昌綿厚き衣を與へて、戒めて曰く、欲しき時

は、また來れ。妄りに人を侮りて害を受くる莫れと。後袴垂捕はれたる時、あの夜ばかり恐しき目にあひたることなしと白狀しけりとぞ。

保昌が丹後に赴任しける途にて、四天王の一人なる平致頼に逢ひしことあり。與謝山を超ゆるに、一老人馬に乗り、笠を戴きたるまゝにて樹下に倚り、國守の來るを屁とも思はぬさま也。從者怒り、之を叱して馬より下らしめむとするを、保昌制して、われ見よ、あの鞍に據りて轡を按ずるさまは、一騎當千の雄也。たゞ人に非すと。少しゆけば、平致經の兵を率ゐて來るに逢ふ。老人に逢ひ給ひつらむ。あれは、我父致頼なり。田舎の翁、禮法を知らず。定めて禮を缺きしならむ。許されよとて、行き過ぐ。從者みな保昌の眼識に驚かざるもの無し。保昌も保昌なれば、致頼も致頼、凡眼に粗野の一人と見えしは、げに、四天王の一人なる平致頼なりし也。

保昌は、武勇すぐれたるのみならず、歌をも善くせり。平安朝には才女多く出でたるが中に、歌にては第一と稱せらるゝ和泉式部は、保昌の妻となり

たる人也。容貌も美なるが、品行は修まらざりき。されど、この時代は一般に品行亂れたりければ、ひとり和泉式部のみを責めむは酷なるべし。和泉式部の歌情を含みて人を動かす。徒に才思を揮へるものに非ず。初め橘道貞に嫁して、小式部内侍を生めり。出でて、上東門院に事へけるが、爲尊親王と通ず。道貞怒りて離縁せり。親王薨じて、親王の弟敦通親王とも通ず。その情交未だ絶えざるに、再び保昌に嫁せり。その娘、小式部内侍も上東門院に事へたるが、これも歌に長ぜり。されど、人みな母が潤色するなるべしと疑へり。嘗て歌合あり。内侍も、その作者也。其期近きに在り。中納言藤原定頼、内侍を冷かして曰く、丹後より便りありしや、さぞ御心配ならむと。内侍立るに咏じて曰く、

大江山いくの、路の遠ければ

まだふみも見ず天の橋立

和泉式部、保昌と共に丹後にありける時の事也。この歌によりて、内侍の

才名頼にあがれり。惜むらくは母に先立ちて、早く死せり。式部歌をつくりて曰く、

親をかきていつれ憐れと思ふらむ

子はまさりけり子やまさるらむ

三

維衡に次いで武勇の譽高かりける維茂は、陸奥にありて藤原諸任と相争へり。諸任は藤原秀郷の孫也。父祖は相助けて將門を亡ぼしけるが、其子と孫とは、忽ち仇敵となりける也。争のものは、土地の事に關す。之を陸奥守藤原實方に訴ふ。どちらにも道理あれば、實方は決する能はず。二將劍を執つて起つ。維茂の兵は三千人、諸任の兵は一千人、衆寡敵せず、戦は止むひとて、諸任は兵を率ゐて、常陸に向つて去る。維茂の兵悉く散じ去る。夜深うして、池の水鳥の驚起する音す。げにや、心がけある物夫は、響の音にも目をさます。維茂以爲へらく、敵の來襲せるなりと。急に其備をなす、され

れど、兵士はわづかに二十人也。その餘のものは、物の役にたつべくもあらず。妻子をして、後の山に逃げゆかしむ。敵大に至る。維茂の館は焼かれ、兵士は更なり、館にありし者、すべて八十人ばかりの屍骸、猛火の中に狼籍たり。諸任の軍は、二三十の死傷ありしのみにて、凱歌を奏す。維茂の首を求むれども得ず。されど、討死せるに相違なしとて、引きあぐ。誰か知らむや、維茂は池の中に入り、頭に藻を載せて、悉く居たらむとは。維茂の兵變を聞き、來り集れるもの、五六十人に及べり。見れば、邸宅は、すべて、焼けたり。一人も活き残れるものなし。流石の武士も、聲を放つて泣く。われ茲に在りと、維茂池中より躍り出づれば、兵士等は喜極まつて、また泣く。維茂は、直に進撃せむといふ。敵は四五百人、味方はわづかに五六十人、後日の事にせられよと云へと、聽かず。命惜しきものは、留まれ、われは一人にても行かむといふに、止むを得ず、みな之に従へり。

斯るべしとは、諸任夢にも知らず、意氣揚々として、大君の家にとちよる。

大君の妹は、諸任の妻也。大君事の顛末を聞いて曰く、維茂は空しく死するものに非ず。こゝに在りては、危し。早くたゞれよと。諸任心に笑ひながら、五六十町ゆきて休息す。大君より酒肴を運び來るに、一同大に喜びて牛飲し、馬食す。終夜の疲勞に安心さへ加はりて、熟酔のあまりに、前後も知らず、ぐつすりと寝入りぬ。

維茂の軍、後より來り加はるものありて、百人ばかりとなり、大君の門を過ぎ、維茂今夜討たれて、殘兵ども落ちゆくなりと言ひ入れて、過ぎゆく。大君答はせず。兵をして櫓に上りて、其軍兵の様を見せしむ。兵報じて曰く、群集の中に、大なる草毛の馬に乗り、紺の襖に、秋冬の衣着たる者の、綾蘭笠を着て、夏毛の行膝したるものが、一隊の主のやうに見ゆと。大君曰く、それが維茂也。諸任は我が言ふことを悔りつれば、必ず備なくして討たるべし。止みなん／＼と歎息す。その言の如く、維茂は諸任の不意を討ち、大に破りて、諸任を殺せり。進んで諸任の家に至る。家にては、今や歸ると、酒食を調へ

て待ちわびたるに、我軍は踏らで、寄するは思ひもかけぬ敵軍、上を下へと周章て騒ぐ。維茂令して、女には手をかくるな、男は討取れとて、手向ひする者は悉く殺し、其家を焼き、諸任の妻と侍女とは扶けて、歸路、之を大君の家に送り届けて凱旋す。この一戦に、餘五將軍の武名、關東に振へり。

維茂曾て觀風の宴を開く。一美女あり、何處よりとも知らず來りて、酌に侍す。その名を問ふ程に、酒杯にうつれる女の顔を見れば、鬼の相なり。維茂劍を抜いて之を斬る。忽ち風に乗じて、去つて行く所を知らずとぞ。平氏亡び、源氏興るの際、世にあらはれたる城長茂は、この維茂の子孫也。

「本家の伊勢平氏は伊勢に在り。維衡の子正度、其子正衡、毫も世にあらはれず。正衡の子正盛に至りて、始めて稍あらはる。これ實に平清盛の祖父也。」

第五章 藤原氏の爪牙

源仲の真切り……源氏の寶刀……源賢……頼光狐を射る……頼光鬼同丸を殺す……頼光の子孫……和歌六黨……頼家、頼賢父子歌に長食……頼光の四天王……四天王車に閉口す……季武と妖怪……貞道無禮者を殺す……貞道と袴垂……貞道と綱……頼信、忠常の亂を平ぐ……天慶の亂の餘燼……頼信の安益と信義……頼信關白を殺さむとす……信頼父子盜を追ふ……源氏、藤原氏に彌ぶ。

一

平家が伊勢に雌伏せし間に、源氏は藤原氏の信任を得朝廷の爪牙となりて世に榮えたり。經基の子満仲、其子頼光、頼信、頼信の子頼義、其子義家、いづれも將材也。所謂將門將を出して、武門として、天下肩をならぶるもの無し。満仲は、村上、冷泉、圓融、華山の四朝に事へ、常陸介となり、武藏、攝津、越前、伊豫、陸奥等の守となり、左馬權頭、治部大輔、鎮守府將軍などに拜せられ、位は正四位下に至り、内昇殿さへ許されたり。

一つ大に満仲を非難せざるべからざるは、安和二年、橘繁延、藤原千晴、僧連

茂等と謀り、爲平親王を奉じて亂を起さむとせしこと也。然るに、繁延と隙を生じたる爲め、裏切りして、陰謀の次第を朝廷に告げ、命をうけて、繁延等を捕へて、褒賞を被りたり。

満仲は、さかぬ氣の豪傑なりしかと、老いては、さすがに心よわりけむ、殺生などする事を悔いけるに、子の源賢僧となりけるが、其師の源信と共に説きす、めければ、こゝに一念發起して、剃髮し、名を滿慶と改めたり。満仲は、極めて剛のものなりしかと、歌をも善くし、勇略一代にすぐれて、朝廷の上下に重んぜられたりき。満仲、曾て以爲へらく、武士鎮護の任にあたるには、利劍なかるべからずと。しばしば、刀鍛冶を召して作らしめ、たれど、一も意になふものなかりしが、筑前より良工を召すに及びて、始めて、天晴れの二名刀を得たり。鬚切、膝丸、これ也。

二

満仲の子の中に、頼光、頼信の二人、最もあらはる。頼光は長男にして、頼

信は三男也。次男の頼親は左衛門尉、敏非遠使、信濃、太和等の守となり、正四位下に叙せられしが、興福寺の僧に襲はれ、其子前加賀守頼房と共に拒ぎ戦へり。この事によりて、僧より朝廷に訴へられ、有罪の身となりて、頼親は土佐に頼房は隠岐に流されたり。のち頼房は本位を復せらる。その子孫世に大和源氏と稱す。第四子の源實は僧也。多田法眼とも稱す。幼名を美女丸といふ。少年の頃、狡悪の上もなかりしが、源信の教に服して、名僧となれり。歌をも善くす。所謂悪に強きものは善にも強き者也。

頼光は人となり、英武、驍勇世に冠たり、射を善くし、將略を以て稱せらる。大日本史は賞美せり。圓融、花山、一條、三條、後一條の五朝に事へ、攝津、伊豫、美濃等の守となり、内藏頭を兼ね、左馬の權頭に還り、内昇殿を許され、位は正四位下に至れり。三條天皇また皇太子におはせし頃、東宮大進たり。一日、皇太子殿上に狐の寝たるを見付け、頼光に弓矢を授けて、射よと命じ給ふ。其弓は弱く、矢は重し。頼光辭す。聽し給はず。止むを得ず之を射殺す。弱

弓重矢にて、斯く命中するを得たるは、流石の頼光も、自から意外に思ひし所也。もし射損じなば、源氏の武名忽ち地に墮ちむ。弓矢取る身のあはれさは、ひとり屋島に於ける那須與一のみならず、けり。世舉つて、頼光の射藝をほむれども、頼光は、自から居らず、全く祖先の冥助なりとへり下りけるは、流石に將門の器也。

頼光曾て、夜、從兵をつれて弟の頼信の邸に至る。頼信正に宴す。喜んで共に飲む。厩に人を縛れるを見て、あれは何者ぞと問ふに、鬼同丸なりと云ひければ、さらばあのやうな縛り方では不可なり。今一層其縛を嚴重にせよといふ。其言の如くす。鬼同丸大に頼光を恨む。頼光大醉して臥す。縛は極めて嚴重なりしかど、鬼同丸の怪力、身を脱して、天井より頼光をうかす。酔臥せる頼光、それと悟りて備ふる所あるに、鬼同丸如何ともする能はず。頼光從者に向ひて、明日は鞍馬山に行かむといふに、さらばとて、鬼同丸先づゆく。市原野に野飼の牛多し。其一を殺し、臈を出して、之を被りて

臥す。頼光至り、野牛を見て、從兵に射さしむ。渡邊綱、伏して牛を射る。忽然、鬼同丸躍り出で、刀を抜いて頼光に斬りかゝる。事急也。されど、頼光は直に刀を抜いて之に應じ、終に之を殺す。頼光の勇名、大にあらはる。頼光は、また勅を奉じて、大江山の酒頭童子といふ巨盜を平けたり。

三

頼光の子孫には、頼政あり、行綱あり、頼家といふ歌人もあり。頼朝の子の頼家と同名異人也。頼家は頼光の子也。歌に長ず。藤原總永、平練仲藤原經衡、源兼長、源頼實と共に、和歌六黨と稱せらる。頼實は頼家の養子也。六黨多く凋落しける時、陸奥にありける橘爲仲、書を頼家に寄せて、天下の歌人、今や君と我とあるのみと言ひけるに、頼家怒りて、爲仲は六黨の比に非ず。安んぞ我に對するを得むやと罵れりとぞ。その歌に於ける自負、想ふべし。頼實も歌に腐心せし人也。嘗て住吉の神に祈り、世を驚かすの名吟を得ば、死すとも辭せずと誓へり。

木葉散る宿は聞きわく事ぞなき

時雨する夜も時雨せぬ夜も

といふ歌を作りて、後、間もなく病に臥す。今は汝の死すべき時なりとの神詫ありて、頼實は自から其死を知れりとぞ。

四

頼光の弟の頼信は、保昌維衡、致頼と共に四天王と云はれけるが、頼光の部下にも四天王ありき。即ち渡邊綱、平貞道、平季武、公時、これ也。今昔物語は、四天王に關する滑稽談を傳ふ。四天王の中、綱のみ缺けたり。貞道、季武、公時の三人、賀茂の祭を見物せむとして、出でたちけるに、馬にのりて行かむは興なし。今日一風かへて、女車に乗りて行かむとて、女車に乗る。三人とも、車にのるは、はじめて也。進行するにつれて、あちらへよた／＼、こちらへころ／＼、頭と頭とぶつ／＼、かりて眼に火花をちらし、腕と腕と闘ひ、膝と膝と闘ふといふ始末に、流石の剛の者も、車に酔ひ、漸く紫野にいたりて、車を出でたる

が歩む勇氣もなく、疲れ弱りたるまゝに、野に臥して、ぐうぐう寝入る。一夢さひれば、はや祭は果てたり。歸らむとするに、再び車にて、憂目を見むは、いやなりとて、車は先へかへし、徒歩して歸る。千軍万馬の間に奔馳して、何とも思はぬ豪傑も、乗りなれぬ車には、大に閉口せりとて、時人ひやかしあへりぞ。

五

頼光、美濃にありける時の事也。一夜、從士ども集まりて、くさくさの物語しけるに、夜、妖怪の出づる渡場あり。産女泣く兒をつれて、これ抱け、くると叫ぶ。人恐れて、通るものなしと物語るものあり。誰か行くものは無きかと言ひ出すものあり。四天王の一人なる平季武、われ行かむといふ。え行かじと、諸人争ふ。さちば、かけをせむとて、物をかけて、行くことに決す。行きたる證據には、向ふの岸に矢を立て、來むと約して、いよく季武は勇んで出づ。三人ばかり、ひそかに尾行す。九月の末の暗夜也。三人は堤にと

りつきて、聞くに、さぶくと音す。季武の渡れるなり。彼方の岸につきて、箭を立てたりけむ、またさぶくと音すと聞く間もなく、腥き風さつと吹き來りて、これ抱けくと女の叫ぶ聲す。それや妖怪が出たりとて、三人恐しきこと限なし。季武の身を思ふに、わが身も半ば死したる心地になりぬ。されど、季武は毫も臆せず。産女の言ふまゝに、その兒を抱き取る。返せといふに、返さず、袖に入れて歸り來る。衆に向ひて、事の顛末を語り、その兒は、こゝにと、袖をさぐるに、兒は無くて、唯木の葉があるのみ也。實地に季武を見届けに行きし、三人も歸り來りて、物凄かりし有様を語るに、行かざりし人もみな半ば死したる心地になれりぞ。

六

これ今昔物語に記せる所なるが、今昔物語は、更にこれも四天王の一人なる平貞道に關する、二つの逸事を傳ふ。頼光曾て客を饗す。頼信も亦至る。貞道、瓶子を持ちて席に出でけるに、頼信之に向ひ、一つ頼みたき事あり。駿

河の國に、われは無禮をするものあり、首とりて得させよと、聲高にいふ。わが主人の弟なれど、わが事ふる所には非ず、殊に場所もあらうに調座の中に、心得ぬ事を言はるゝもの哉とて、はかくしくは答もせざりき。後、貞道東國に行くことありしに、偶然その人にあひて、共に路伴となる。其人貞道に向ひ、君は頼信に頼まれて我を殺さむとするならむといふ。いや、頼まれたことはわりしかど、わが主にあらざれば、之をうけひかざりきと答ふ。さらば安心せりと答へるかと思ひの外、たとひ頼まれたまゝに、我を殺さむと思ふとも、いかでか、われを殺すことを得ひやと、廣言を吐く。げに口は禍の門、騙る者は亡ぶ、季武まことに殺す氣は無かりしかど、この一言に激して、さらば思ひ知れとて、立ろに、之を殺して、其首を京まで持ち上りて、頼信に取りせけりとぞ。

七

彼の藤原保昌に辟易したる巨盜袴垂は、捕はれて獄にありけるが、大赦に

あひて、晴天白日の身となりぬ。されど、着るべき衣服なく、關山にて裸体のまゝ、路に倒れて死したる様を装ふ。行人よりて、たかりて、創も無きに死せることの訝かしさよと、さゝやきあふ。郎等あまたつれたる一士、馬に乗りて來かゝり、先づ郎等をして其様をさぐらしめ、弓取り直し、嚴重に身構へして行き過ぐ。人みな其怯を笑へり。又一騎來る。馬より下りて、うかと死人を見る。袴垂急ぎに飛び起きて、其人を殺し、其衣をはぎ、其馬を奪ひて、馳せ走る。衆人、こゝに始めて目が覺めたる心地して、さきの武士の心掛をほめそやす。さても、何人にやと、さぐり見るに、これ誰あらう、實に四天王の一人なる平貞道也。

平貞道は、平良文の子也。渡邊綱は、源宛の子也。父同士は、さきに東國にありて、勇ましくもまた無邪氣なる戦闘を試みたりき。その子同士は、共に頼光に事へける也。この父にして、この子ありと云ふべきか。綱の子直は、頼義に事へて、陸奥に役にも従へり。

大日本史は、頼光の弟頼信を評して、剛果明決、兵法に練達し、兄と名を齊しうせりと云へり。頼信は、また保昌、維衡、致頼と共に四天王と呼ばる。而して頼信はその稱首たり。一條三條、後一條、後朱雀の四朝に事へ、治部權少輔左馬權頭、伊勢陸奥、甲斐、美濃、河内等諸國の守となり、上野常陸介ともなり、鎮守府將軍に拜せられ、位は從四位にいたれり。長元元年、平忠常、亂を下總を起す。檢非違使平直方、中原成道命を奉じて之を討てども、功を奏せず。朝廷更に甲斐守なる頼信及び坂東諸國の守に命じて之を討たしむ。忠常は忠頼の子にして良文の孫也。直方は、維時の子にて、貞盛の曾孫なるが、維時が貞盛の養子となりければ、名義上、直方は貞盛の孫也。直方の忠常を討つは、勅命に由るが、同姓相戦ふわけ也。頼信平維幹と共に進んで常陸にいたり、人をして之をさとさしむ。忠常曰く、われもとより君の名を聞く。身を麾下に致すべきなれども、われの仇家、君の左右に在り。われ仇人の前に跪

拜するに恐びずと。忠常は、如何なれば、維幹を仇敵とするぞと云ふに、維幹は、貞盛の甥也。忠常は將門の從甥也。貞盛と將門と相戦ひ、將門終に亡びたり。當時、平氏は二黨にわかれ、良兼、良正は、貞盛派にして、良文は將門派なりしが如し。良文の孫の忠常は、從つて將門派にして、貞盛の後の維幹を敵とせる也。忠常の亂は、天慶の亂の餘焰とも云ふべき也。

頼信進んで忠常に逼る。大江あり、舟なし。衆みな迂回せむといへど、急に不意を襲はざるべからずとて聽かず。背て、こゝに淺瀬ある由を聞けり、誰か之を知れる者なきかと問ふに、幸に眞髮高文といふもの之を知り居りければ、之を先導とし、全軍流を亂して渡る。忠常果して備を設けざりければ、惶怖して出で、降る。附近の武士すら知らぬ渡しを、遠方の頼信が如何にして知りけるぞとて、衆みな驚歎せり。忠常をつれて、京に歸らむとしけるに、忠常途中にて病死しければ、その首のみを傳ふ。朝廷大に之を賞せり。

九

頼信上野介となりし時右兵衛尉藤原親孝に従ひゆけり。盜その家に恐
び入る。之を捕へて縛しけるが、のがれ出で、親孝の兒を抱きゆき、刀を其
胸に擬す。盜を捕ふれば、子は殺されむ。子を助けむとせば、盜は捕へられ
ず、げにや、子故に開なる親心、親孝は、近寄るなと家人を戒め、自から往いて泣
いて頼信に訴ふ。頼信笑つて曰く、勇士事に臨みては、妻子を顧みず、一兒の
故に、かくまで、うるたへる事やはあるとて、自から其場にゆく。盜見て、屏息
して仰ぎ見ず。兒をしかと、かゝへ締むるに、親孝は氣も氣ならず。頼信一
喝して曰く、汝、兒を殺さむと欲するか、身を免れむと欲するか、明かに之を言
へと。盜曰く、命が欲しさに、兒を殺す真似をなすまでなりと。さらば、其子
をはなせ、われ汝を殺さずといへば、恐れ入りて之に従ふ。今や、兒は虎口を
のがれたり。而して盜は網中に在り。親孝之を殺さむと乞ふ。頼信許さ
ず、彼れ窮して盜み、命が欲しさに、兒をおびやかす、深く罪するに恐びず。且
約束したれば、食言すべからずとて、糧馬弓矢を與へて去らしめたるは、大將

としての宏量と信義とを見る也。この盜の爲めに一時人質となりし兒は、
長じて僧となれり。明秀阿闍梨これ也。

一〇

頼光と頼信とを比するに、武勇は甲乙なきやう也。されど、頼信は藤原道
兼に事へけるが、嘗て曰く、われ關白道隆を殺し、我が主人をして代らしめむ。
われ劍を抜いて突入せば、誰かよく防ぐを得むやと。頼光靜に戒めて曰く、
妄言すること莫れ。事甚だ難し。よしや關白を殺すとも、一旦事泄れれば、
主人、何んぞ關白なるを得むや。よし又事發露せずして、代つて關白となり
たりとも、世を終るまで、つゝみ隠すことは、甚だむづかしきことなりと。さ
すがに、兄は兄だけの分別も貫目もある也。又、頼信が平忠常の亂を平げし
功を待みて、臣は老いたり。遠く任に赴くに堪へず、願くは丹波守に任ぜら
れよと乞ひたるは、武門としてあるまじき言也。頼信嘗て東國より馬を購
ひしに、馬の到着せし夜、その馬を欲しがりて、尾し來りし盜馬を盗んで去る。

頼信これ必ず東國の人が盗みしなるべしとて、ひとり馬に乗りて之を追ふ。子の頼義もまた然か思ひて、父に一足おくれて之を追ふ。關山にて追ひつ。賊は正に川を渡る。頼信頼義に射よと命ず。射て盗を殺し、馬を取りかへせり。子に射させたるは、射藝子に劣れるなるべし。頼光が弱弓重矢にて狐を射たるが如き藝も、頼信には出来ざるべし。唯頼信は平忠常の亂を平げたる軍功あり。殊に東國に守たること多くして、東國の士心を得たるに、子の頼義孫の義家と、將材相ついで出でければ、その子孫源氏の正系となり、兄の子孫却つて係系となりける也。

天慶以後、諸國に亂起り、京師も盜難多かりければ、藤原氏は當時武門として最も勢力ありし源氏を味方にせざるを得ざるやうになりぬ。滿仲や頼光や、頼信や、甘んじて其爪牙となりぬ。頼光の英雄を以てして、京極第改造の時、一切の器用を進め、精巧をきはめて、道長の欸心を買ふなど、王氏の身自から下りて、藤原氏の御機嫌を取りしも、唯藤原氏によりて、朝榮を貪らむと

の俗情に外ならざる也。

第六章 東國と源氏

頼義、平直方の女を娶る……頼義の毒……頼義關東の士心を得る……關東と奥羽……安部頼時叛す……貞任の失戀……頼義父子の大敗……佐伯主従の忠……茂頼の忠……清原武則頼義に従ふ……貞任殺さる……前九年の役……武則の射藝……後三年の役の原因……義家の風流……義家兵法を學ぶ……義家國房を討つ……義家朝廷に重んぜらる……義家陸奥に越く……義光の室……義家金澤權を攻む……勇怯の二座……鎌倉権五郎の勇氣……鬼武と龜次……秀方の驍力……金澤權陷る……義家弟と闘ふ……義家の弓術は神也……義家弓を献す……義家の逸事……源氏の全盛。

源頼信に五子あり。頼義、頼清、頼季、頼任、義政、これ也。頼義は沈毅にして武略あり。騎射に長じて、薮に工み也。小一條院の判官代となりけるが、院いたく愛して、左右より離し給はず。獵を好みて、獵し給ふ毎に、必ず頼義を從へ給へり。頼義よく弱弓を以て、猛獸を射、百發百中し、矢、羽を没す。平直

方感歎に堪へず、女を以て妻となす。義家、義綱、義光はその女の生める所也。女を源頼朝に嫁せしめたる北條時政は、この直方の六世の孫也。頼義幼時戯に不動の像を中門の壁に描きしに、畫の鑑識ある客あり。之を見て大に驚き、頼信に向ひ、誰が描きしぞと問ふ。我兒なり。畫を好むこと甚し。われその無益なるを愛ふと答ふるに、いなとよ、これは天才なり。常人の能く及ぶ所に非ず。禁じ給ふこと莫れと云ひけりとかや。

頼信が平忠常を討ちし時、頼義も從ひて功あり。關東の將士多く心を寄す。後、相摸守となり、恩威並び行はる。强悍の徒も、奴隸の如くになり、東國の武士、争うて門客となれり。任滿ちて京に歸りけるが、こゝに奥羽の亂起れり。

大和民族は九州に起り、進んで中原に根據地を占めたり。されど、東國と奥羽とは、都に遠くして、文明の光に接せず。その代りに、勇強この上も無し。關東の兵は以て天下を敵とするに足ると云はれたるくらゐ也。日本武尊

の東征に及びて、皇威はじめて東國及び奥羽に光被したるも、その後、反亂常ならず。比羅夫、田村、菅などの諸名將、力をこの方面に注げり。武門起るに及びて、關東には八平氏ありと雖も、其力大ならず。關東は終に源氏の勢力範圍に歸せり。頼義、義家に至りて、その勢力範圍は、奥羽にも及び、頼朝に至りて、全く奥羽をも一掃して、六十六國總追捕使の事業を遂げたり。源平二氏が二大武門とは云へ、眞に武力を發展したるは源氏也、平氏は與らざる也。

二

陸奥に安部頼時といふ豪族あり。威勢を縦にして、朝憲に服せず。永承中、陸奥守藤原登任、陸奥出羽の兵を率ゐて之を討つ。利あらず。廷議、頼義を陸奥守に任じて之を討たしむ。頼義兵を率ゐて至りしに、たゞく大赦の令出でたり。頼時大に喜び、心を傾けて頼義に服事したりき。任終るに及び、頼義鎮守府に至りて事を視る。貞任あつく之を慰勞す。國府に歸らむとて、阿久利川に宿しけるに、夜、頼義の部將藤原光貞の營に斫り入りしむ

のありき。これ頼時の子貞任の所業也。貞任が何故に光貞の營に斫入りしぞといふに、失戀の意趣ばらしに過ぎざる也。頼時は光貞の妹を妻らむと請ふ。光貞許さず。貞任は身のたけ六尺餘、腰圍七尺四寸而して色は白し。まことに魁偉なる男子も、血氣の無分明、前後も考へず、戀の舊怨を光貞の營に報いたる也。

光貞の營を斫られては、光貞のみの屈辱に非ず。大將の屈辱也。頼義黙つては居られず。貞任を罪に問はむとす。頼時叛く氣は無かりしかど、子に迷ひて貞任と一つになり、一族を集めて衣川に據る。前九年の役は、つまり、女が導火線となりたる也。天喜四年七月、朝廷頼義に征討の令を下し給ふ。頼義坂東の兵を集む。その兵、數方に及べり。

藤原經清、平永衡は、頼時の女婿なるが、來りて頼義に附す。されど、永衡は異心あり。頼義之を殺す。經清自から安んぜず、去つて頼時に歸す。頼義は俘囚長、安部富忠を諭して、之を部下にし、頼時と大に戦ふ。頼時、敗死す。

天喜五年七月也。されど、貞任以下の豪傑あり。賊勢却つて、益熾也。

三

天喜五年十一月、貞任を河崎の柵に攻めし時は、頼義、大に敗れたり。將門出で、鳥海に戦ふ。其兵四千人、頼義の兵は千八百人、兵少なき上に、大風雪にさへ惱まされて、頼義の士卒、幾んど盡き、残れるものは、子の義家及び藤原景通、大宅光任、清原貞廣、藤原範季、藤原則明、主従わづかに七騎也。されど、みな一騎當千の雄也。殊に義家よく射る。賊辟易す。斯る處に、景通の子景季、年二十歳なるが、賊陣に突進し、賊將數人を殺して、其身も討死せり。和氣致輔、紀爲清も、力戦して死せり。賊終に退く。かくて、頼義は漸く免るゝことを得たり。

斯くとも知らず、相摸の住人、佐伯經範、將軍の急なるを聞いて馳せ來る。逃げ來れる士卒に問へば、將軍は賊に圍まれて、從騎數人に過ぎざりければ、定めて討死し給ひつらむといふ。われ將軍の恩顧を蒙れること三十年、今

や年六十に及べり。往いて地下に將軍に従はむとて進む。その従兵二三人わが主既に將軍と生死を共にせむとす、われらも主と生死を共にせざるべけむやとて、經範の主従、忠義の屍を奥北の野にならべたり。

藤原茂頼も頼義の恩に感ぜる義人也。將軍既に死せりと聞き、せめてその屍骸を引きとらむ。さるにても、僧にあらざば、敵はよも渡さじとて、髪を剃りて行く途中、思ひがけずも、頼義の歸り來るに逢ひ、喜極まつて、男泣きに泣きしも、さぞやとあはれ也。

四

頼義は官に請へども、新しき兵は來らず、糧食至らず、出羽の守、源兼長は來り援けず、源齊親之に代りたれど、同じく兵を出さず、賊は經清の計に従ひ、白符を用ゐて、官物を調發し、勢益振ふ。頼義苦むこと甚し。かゝる程に任期満ちけるが、また改めて任せらる。その任期も満ちければ、朝廷にては、高階經重をして之に代らせたれど、人心服せざるを以て、止むを得ず、京師に去れり。

五

頼義は前後四度まで、陸奥守となりて、銳意賊を滅せむことを圖る。出羽の俘囚長清原武則を得るに及びて、勢漸く振へり。當時、頼義の兵はわづかに三千人なりしに、武則の部下には、一万人ありき。全軍を分つて七隊となす。武則の子武貞第一陣となり、橘貞頼第二陣となり、吉彦秀武第三陣となり、橘頼貞第四陣となり、頼義自から第五陣となり、吉彦武忠第六陣となり、清原武道第七陣となり、進んで磐井郡にいたり、大に賊軍を破る。康平五年七月也。これより官軍漸く順境に向へり。九月、貞任は頼義の本營には六千五百人しか居らざるを知りて、精兵八千を以て來り襲ふ。大に敗れて退いて、衣川關を保つ。頼義、武則之に逼る。貞任は更に退いて、烏海柵を保つ。之に逼る。また支へずして、厨川柵を保つ。それも終に陥る。疾風迅雷、間髪を容れず。流石の貞任も殺され、經清も殺され、貞任の弟重任も殺さる。

貞任の伯父爲元弟の家任、宗任は降る。是に於て、亂全く平らぎぬ。これを前九年の役といふ。九年とは、年數に因る也。康平六年二月に至りて、賴義捷を京師に奏す。この功により、賴義は正四位に叙せられ、伊豫守に任ぜらる。晩年剃髮す。伊豫入道と稱す。厚く佛教を信じたる人也。

六

清原武則は功に因りて、從五位下に叙せられ。鎮守府將軍に拜せらる。これに於て、清原氏は、安倍氏に代れり。されど、武則は武勇ありて、而かも誠實なる人なり。武則世を終るまでは、何事も起らざりき。武則嘗て、賴義と獵しけるが、一發にて二鳥を射たりければ、さすがの賴義も感歎措かず、その愛馬を贈れりとぞ。

武則の後は、長子の武貞つげり。武貞の後は、長子の眞衡つぐ。武貞に弟あり。武衡といふ。武貞は、藤原經清の妻を納れて、家衡を生めり。經清の遺子、清衡をも養へり。眞衡は、一門の嫡流なるを以て、勢力最も強し。子の

成衡の爲めに、源賴義の女を娶る。その女は、義家の異母妹なるが、賴義が初め陸奥征伐に赴きし時、常陸にて、平致幹の家に宿りて、其女に孕ませたる一塊肉也。賴義の子なれば、清原家に取りては、此上もなき光榮也。眞衡臣族に命じ、飲食金帛をおくりて、新婦を祝はしむ。眞衡の男吉彦、秀武も出羽より遙々來る。されど、眞衡は、基に夢中になり居りて、ろく／＼挨拶もせず。秀武疳癪を起し、齋し來れる金は、郷ち酒饌は從士と分ち食ひて、出羽に歸る。眞衡怒つて之を討つ。こゝに於て、後三年の役は起れり。新に陸奥守となりて來れる義家は、異母妹の故を以て、眞衡の加勢をなす。前九年の役も、女故に起りしが、後三年の役も、亦女故に起りし也。

七

賴義に三男あり。義家、義綱、義光、これ也。義家を八幡太郎といふは、石清水八幡宮の祠前にて、元服させられた也。義綱の賀茂二郎は、賀茂の祠前、義光の新羅三郎は、新羅明神の祠前に元服したるに因る也。前九年の役、義家

は父に従ひて貞任を討ちけるが、義家の功最も多し。亂平ぎて、從五位下に叙せられ、出羽守に拜せらる。衣川の戰、義家は貞任を追ひけるが、

ころものたては綻びにけり

と云ひけるに、貞任は直に

年を経し糸のみだれの苦しさに

と上の句をつければ、射すしてにがしたりといふ事、古今著聞集に出でたるが、これ恐らくは、好事者の假托なるべしと、大日本史は説けり。われ亦疑ふ。されど、たもと勿來の關を過ぎし時、

吹く風をなこそその關と思ひしに

路もせに散る山櫻哉

と咏ぜし歌は、千載集にも載せられて、また疑ふの餘地なき也。

源氏は藤原氏の爪牙となりけるが、頼義義家に至りても、同じく一面には爪牙なりしが、一面には東國の士心を得て、覇者の實ありき。唯頼義義家は

之を利用せざりしのみ。義家曾て關白藤原頼通の家にて、奥羽の軍事を語る。大江匡房座を隔て、之を聞き、將才はあれども、惜むらくは兵法を知らずといふ。從者之を義家に告ぐ。怒ることかと思ひの外、節を折り、恭しく弟子の禮を取りて、兵書を學べり。大將軍の器度あるものと云ふべき哉。

さは云へ、義家は、温良一方の人には非ず。激すれば、驟起す。承暦三年、源國房と源重宗と美濃に私闘す。朝廷、義家に命じて、之を討たしめ給ふ。國房は頼光の孫にして、重宗は頼光の叔父滿政の曾孫也。頼義方に佛事を修む。義家も座に在り。人あり、義家に耳語するに、義家の從兵が嘗て國房の辱を受けたることを以てす。義家直に起つて、館に歸る。頼義怪しみて、人をして之をうかゞはしめけるに、武装せりとの事也。憤る所ありとも、佛事を終へて、然る後發せよ、一兩日おくれたりとて、何のさほりも無かるべしとて、其門を鎖す。義家潜んで出づ。從ふものわづかに三人、ゆく／＼追ひ及ぶもの増したるが、二十五騎に過ぎず。美濃に入り、國房の家を焼く。國房

にげ去る。從騎義家に向ひ、國房の潜める處を知れり。往いて之を殺さむかといへば、いや、これでわが胸が霽れたりとして、引きかへしぬ。さて、いよいよ征討の詔をうけて、再び出征す。重宗恐れて隠る。間もく、重宗は國房と合して、義家を拒ぎしが、義家之を破り、重宗を誅せり。

永保元年、園城寺（まにじょうじ）の僧徒、延曆寺（えんりやくじ）を攻む。義家詔を奉じて之を逮捕せり。その餘燼未だ收まらざるに際し、白河天皇、石清水に行幸あらせられ、特に義家と其弟義綱とに救して、駕に從はしめ給ふ。かくて、義家兄弟は、關白師實の前驅となり、夜に入りては、義家服を改め、弓矢を執りて、御輿の側に立てり。春日神社に行幸あるや、義家其兵を率ゐて、朱雀門を護りしが、特に詔して、武装するを許されたり。白河天皇は儲貳の故にて、輔仁親王と不和なりければ、行幸ある毎に、必ず義家義綱を從へ給へり。當時、義家の一門を除きては、外に武門武士なきの觀ありし也。

八

義家が陸奥守となり、陸奥に下りし時は、眞衡一族の争ありし時也。吉彦秀武は、獨力にては眞衡に當り難きを以て、清衡家衡を説き勸めて、眞衡の本據を襲はしむ。眞衡之を知りて、引きかへす。清衡家衡敵し難きを知りて、これも退き去れり。義家の陸奥に至りしは、恰もこの際なりし也。眞衡は喜びて、義家を鑿し、出で、秀武を討つ。清衡家衡又も虚をつかむとて來りしが、義家の兵ありければ、意を得ずして去れり。義家は同母妹の故を以て、眞衡に加勢し、往いて家衡を沼柵に攻めしが、利あらずして引き退く。家衡の叔父武衡兵を率ゐて沼柵に來り、八幡太郎は天下一の將軍なるに、御身は孤軍を以て之を退けたり。曾に御身の光榮なるのみならず、我等一族の光榮なり。之を力めよ、われ御身と事を共にせむとて、相合して、金澤の柵に據る。かゝる程に、清衡も、秀武も來りて、義家に附す。後三年の役は、いろいろに役者のかはりたる一場の悲劇也。始めは眞衡と秀衡との闘也。而して清衡家衡は、秀武を助く。秀武は主にして、清衡家衡は從也。義家來るに

及びて眞衡を助く。眞衡は主にして、義家は従也。然るに、武衛が家衛の加勢をして義家に抗するに及び、張本人の秀武も、その味方なる清衡も、義家方となり、今は、義家と武衛家衛との争となり、眞衡も、秀武も、清衡も、義家の従となりける也。

義家進んで武衛家衛の籠れる金澤柵を攻む。途に雁行の亂るを見て伏兵あるを察し、探るに、果して伏兵あり、悉く之を殺す。兵書に、伏兵野に在れば、飛雁行を亂すとあるに、因りて、伏兵あるを知れり。われ學ばざれば、敵の術中に陥るべかりしなりといふ。さきに義家が節を折りて、匡房に學びし苦心も、こゝに其果を結びける也。

九

義光は左兵衛尉となりて京都に在り。兄義家の苦戦を聞き、之を援はむと乞へども、許されず。止むを得ず、官を辭して、陸奥に赴く。義光は幼より弓馬を善くし、勇略世にすぐれたるが、一方には、音樂の嗜好あり。笙を豊原

時元に學び、精妙を極めたり。時元死せし時、其子時秋なほ幼なりければ、時元は、秘曲を義光に授けたり。義光陸奥へ下らむとて、近江の鏡驛まで行きしに、時秋追ひ及びて、共に行かむと請ふ。辭す。聽かず。足柄山に至る。義光その意ある所を悟り、悉く秘曲を授けて去らしめたり。かくて、陸奥に至りけるに、義家は、先君に逢へる心地すとて、大に喜べり。

一〇

金澤柵は堅くして、抜けず。八幡太郎の武勇を以てして、なほ抜く能はず。而かも三年の久しきに及ぶ。武衛家衛の強きこと、想ふべき也。義家は兵士を勵まざむとて、日々兵士の勇怯を檢し、座を二分して、一を勇者の座とし、他を怯者の座とす。義光の従士藤原秀方は、戦ふ毎に必ず勇にして、一度も怯者の座に就きしこと無し。軍中、之を策とす。之に反して、季割惟弘といふ者は、戦ふ毎に、必ず怯にして、一度も勇者の座に就きしことなし。或日の戦に、自から奮發して、眞先に進みしが、矢其頸に中りて討死せり。食ひしも

の、その創口より出でたるを見て、衆みな笑ふ。義家聞いて、性怯なる者が奮闘すれば、このやうになるものにて、寧ろ憫れむべしと云へりとかや。

鎌倉權五郎景政は年わずかに十六歳なりけるが、亦勇者の一人也。鳥海彌三郎の射たる矢、その右眼に中る。景政大に怒り、その矢を抜かずに進んで闘ひ、之を殺して歸る。三浦爲嗣その矢を抜かむとするに、抜けず、足を以て其面を踏んで抜かむとす。われ討死すとも、人に面を踏まさむやとて大に怒る。爲嗣謝して跪いて之を抜けり。當時の關東武士の氣風、想ふべき也。今、鎌倉に權五郎の祠あり。

武衡義家の陣に言はしむるやう、久しく戦闘なくして、柵中無事に苦しむ。我に龜次といふ勇士あり。勇士を選びて、之と闘はしめずやと。義家乃ち鬼武といふ者を出して、之に當らしめしに、鬼武勝ちて、龜次を殺す。柵兵耻ぢて出で、大に戦へり。

柵中、糧盡きむとす。武衡義光に就いて降を乞ふ。義家聽かず。再び請

うて曰く、願くは、公、柵中に來れ、われ即ち出で、降らむと。義光行かむとす。義家之を止め、例の第一の勇士藤原秀方をして代り行かしむ。武衡兵を嚴にして之を待つ。毫も恐るゝ色なし。武衡之に金を贈る。斥けて曰く、今わざ／＼受けずとも、いづれ近日自から手に入るものなりと。泰然として歸り來る。げに、その言の如く、柵は終に陥り、武衡も家衡も殺されたり。この戦、三年に亘りしを以て、さきの前九年の役に對して、後三年の役と云ふ。朝廷にては、之を私闘とせられ、義家は賞を得ざりしが、その代りに關東奥羽の士心を待たりし也。

一一

この後、義家は左近衛將監、檢非違使、左衛門尉、左馬權頭、河内、相模、武藏、信濃、下野、伊豫等の守に歴任し、正四位下に叙せられしが、晩年剃髮し、天仁元年、六十八歳にて逝けり。藤原實清と清原則清と河内の田園を争ひける時、義家は弟の義綱と相わかれて、之に黨援し、兄弟同士の私闘を起して、累を朝廷に

及ぼしたることあり。源氏は、とかく、骨肉相食む。八幡太郎といへども、之を免れざりし也。

義家は勇武明決機智神の如く、騎射殊に比倫なく、歌をも善くせり。頼義は、弓の達人也。その頼義が清原武則の射術には驚きしが、武則は更にまた義家の射力に驚けり。嘗て試に鎧を三つ重ね、樹枝に懸けて、之を射む事を請ふ。義家射て之を貫く。武則曰く、神也、人の能く及ぶ所に非ずと。白河法皇御惱わづらあり、療治も、祈禱も効無し、義家勅をうけて、弓を献ず。之を枕上に置き給ふに、忽ち御惱は、やみたりとぞ。

義家出づる毎に、必ず人に見えぬやうにして、家兵を従へたり。一日、左大臣藤原頼宗の家にて、碁を圍む。たゞ小童一人を従へたるのみなり。賊あり、刀を抜いて突入せしが、義家ありと聞き、刀をすて、縛に就く。忽ち兵士數十人、傍舍よりあらはれ出で、義家を擁護して去れり。義家或る時、宗任を従へて、情婦の家に宿る。盜賊數十人、恐び入る。宗任周章て、之を射

る。義家屋中にありて、宗任よ、矢つぎが早きぞと云ふに、盜賊ども、その聲を聞き知り、八幡太郎が居るぞ、恐しくとて、去りゆけり。

宗任は、貞任の弟にて、降参したるものなるが、義家之を愛して、毫も疑はず。或時、宗任、義家に従ひてゆく。平生の恨を報ゆるは、此時と、輿中をうかゞふに、熟睡せるさまの如何にも無邪氣なるに、忽ち心を翻したり。或時、義家は、ひとり宗任のみを従へて、野に獵す。一狐を見て、矢を注ぎけるが、宗任を顧みて、われ之を殺すに恐びずと。言終つて、矢を放つ。その矢、狐の耳と頭との間を通りて、深く地に入る。狐驚る。宗任取り來りて示す。吃驚して、氣絶したるなれば、間もなく、息ふきかへさむといふ。果して蘇生す。之を放ち去らしめたり。宗任、矢を進む。義家後向きて、背に負へる胡籙に入れしむ。見る者、之を危みたれども、宗任は、害を加へざりき。げに、義家は、赤心を人の腹中に推す。宗任は、終に心を傾けて、服事したりき。

源氏は、經基、滿仲、頼光、頼信、頼義と相つぎて、將材出で、武勳を立て、内は朝廷

の干城となり、外は東國の士心を得たるが、義家に至りては、材武比なく、英略世を蓋ひ、士心益傾服して、天下之を軍神と仰ぐ。頼朝が鎌倉に幕府を開くの基は、實に入幡太郎が開ける也。

第七章 院政と平氏

道長以後の藤原氏……僧兵の跋扈……院政の三代……幕府は院政の變形也……院の爪牙……源氏衰へて平氏盛なる原因……義光、顯季と田園を争ふ……朝敵地に墮つ……義家の子六人、義親亂を爲す……母と義親……爲義叔父義綱を討つ……平正盛……平忠盛と海賊……諸公親忠盛を侮る……詛國女御……忠盛の歌……平家の種……平家の花……平家の實。

一

源氏が武名を天下に轟せる間に、平氏は伊勢の一土豪たるに過ぎざりき。平將軍貞盛は六孫王經基と對峙したりしが、其子維衡は四天王の一に數へられたる豪傑なるも、同族の致頼と相闘つて、俱倒れとなり、其子正度、其孫正衡は世にあらはれず。正衡の子正盛に至りて、漸く頭を擡げ、其子忠盛に至

りて、益擡げたり。平氏が斯く頭を擡げたるは、正盛、忠盛の人材なるに因るは、云ふまでもなけれど、院政の起りしことが、僅に一の大なる原因也。知らず、院政とは如何なることぞや。

藤原氏は鎌足に中興し、奈良朝に至りて益盛になり、平安朝に至りては、朝廷の藤原氏か藤原氏の朝廷かといふ有様になり、終に道長に至りて、隆盛の極に達したり。『此世をば我世とぞ思ふ、望月の缺けたる事もあらじと思へば』。然り、道長は自から歌ひし如く、満月也。されど、満月の後は、片破月とならざるを得ず。更に又開の夜とならざるを得ず。果して、後三條天皇と申す英主あらはれ給ひて、朝陽天に輝く。道長の子の頼通や、教通や、晝残れる月に似て、幾んど光を失へり。されど、在位わづかに五年にして崩じ給へり。之が後を嗣ぎ給へる白河天皇も、亦英主たるを失はず。藤原氏は、道長以前の如くに跋扈する能はざりき。天皇の御詞に、天下、朕の如くならざるものは、鴨川の水と、双六の采と、山法師とのみとあり。藤原氏は御意の如くに

なりし也。まして源氏や平氏やはなほ更也。山法師とは叡山の僧徒也。崇佛の風盛なるにつれて、寺の田園多くなり、従つて僧兵を多く養ひ、上下佛に倣するにつけ込みて、横暴を極はめ、やゝもすれば、叡山の僧は日吉の神輿を昇ぎ、奈良の興福寺の僧は春日の神木を昇ぎて、宮闕に逼り、朝廷も之を如何ともし給ふこと能はず。南都北嶺の語あり。南都とは興福寺の事也。東大寺もふくまる。北嶺とは比叡山の延暦寺の事也。なほ、今の三井寺なる園城寺も、多く僧兵を養ひ、上は朝廷を敵とすることわり、下は武門を敵とし、僧兵の同士討をなすことも多かりき。

二

奈良の朝孝謙天皇御讓位の後、なほ政を視給ひしが、政令二途に出づることとは無かりき。院政は、白河法皇に始まり、鳥羽法皇に中し、後白河法皇に終れり。都合三代年數を云へば、白河の院政四十四年、鳥羽の院政二十八年、後白河の院政三十五年、總計百七年也。宣旨、官符は朝廷より出で、院旨、應の

文は院より出で、同一の効力を有す。政權既に院にわかれ、天下院宣を奉ず。後源氏の諸族が以仁王の令旨に動きしも、亦怪むに足らず。更に下りて、武士は護良親王の令旨にも動けり。かく、天皇より上皇、上皇より皇子と政令が出づるやうになりては、皇室の出なる源頼朝より政令が出づるとも、天下は之を怪まざるべき也。頼朝の御教書、下文が天下に効力を有するやうになりたるも、つまりは、院宣、應の下文が効力ありたるに基づく。院政止むと同時に、鎌倉幕府起れり。幕府は、院政の變形也。

朝廷と藤原氏とは、切つても切れぬ腐れ縁の關係あり。院を起して、始めて藤原氏との關係が薄らげれど、それで全く藤原氏の權力が無くなりたるにわらず。皇室の威が増したるにもわらざりき。

白河天皇は在位十四年なりしが、中宮崩じて、一時、御哀傷の餘、位を堀河天皇に譲り給ふ。申さば、一時の御出來心也。御哀傷のほとぼり冷却しては、また政を視むと、おぼし給ふより、別當北面をかきて、茲に院政を始め給へる

也。

三

「盗賊横行し寺にも兵ある世の中、院にも武衛の臣を要す。北面の武士即ちこれ也。その武士にも棟梁の材なかるべからず。源氏は既に藤原氏の爪牙たり。藤原氏の爪牙は、即ち朝廷の爪牙也。残る所は平氏也。さは云へ、當時源氏と平氏とが、保元以後のやうに門戸を張りて、相對峙したるには非ず。源氏とても、義家一門の外に、多くの源氏あり。平氏とても、正盛一門の外に、多くの平氏あり。而して、正盛忠盛の父子が院の信任を得たるは、人物才幹の世にすぐれたるもの無くんばあらざる也。」

源氏の一門は、將軍として、征討に従はしむるには、此上もなければ、猛烈に失して、使ふに面倒也。藤原顯季曾て源義光と田園を争ふ。曲は義光に在り。顯季は必勝を期せり。さるに、いつまで経つても、判決なし。これは、どうした事ぞと怪しみしに、白河法皇、顯季を諭され、汝宜しく義光に與ふべし。

汝の邑は多し。彼の一邑を失ふとも、さばかりの損失には非ず。義光の邑は少なし。彼の一邑を得ると失ふとは、大問題也。朕は、直汝にありて、曲、義光にあるを知る。されど、義光は、釋尊の武夫、彼の邑を失はば、汝に對して、如何なる仇を爲すかも知れず。朕、汝を愛するが故に、わざと之を決せずと。顯季感泣して退き、義光を招きて、争ひし田園を與ふ。義光喜ぶこと限りなし。これより後、顯季出づる毎に、武装せる兵士數人來りて護衛す。これ、義光の兵也。顯季は、ますく帝恩を感ぜりとぞ。この一事を以て、武人の跋扈して、朝權の衰頽せるを知るべし。源氏の一門は、あまりに釋尊也。云はば、豺狼也。豺狼の源氏よりは、犬猫の平氏が愛せらるゝも、人情自然の數也。

源氏は、義家までは、よかりしが、それも、晩年はよからず。その後は、頓挫せり。義家の源氏に於けるは、道長の藤原氏に於けるが如し。義家は、源氏の満月也。その子は、早や片月也。義朝に至りて、終に闇となりぬ。されど、闇

も長くはついかず、頼朝に至りて、また翌月の満月となりける也。

四

義家の子六人、義宗、義親、義國、義忠、義時、義隆、これ也。義宗は早世せり。義親は亂を爲して誅せられたり。義國は朝諱を受けて追はれ、東國に一土豪となりて、新田、足利の祖となれり。義忠は暗殺せられたり。義家の子の多く不仕合なるは、義家が數十度の大戦に多くの人を殺したる應報なりと、當時の耆紳は冷嘲しあへり。義時は陸奥五郎と稱す。左兵衛尉となれり。義隆は、陸奥六郎と稱す。平治の亂、義朝に従ひ、龍華越りゅうわごえに討死せり。その子、頼隆下總にありけるが、頼朝兵を起すに及び、千葉常胤と共に、頼朝に謁す。頼朝其風采を見て、眞に源氏の胤なりとて、常胤の上に坐せしめたりとぞ。

義親は、左兵衛尉となり、對馬守に任ぜられ、從五位下に叙せられたるが、康和年間、九州に横行す。朝廷兵を發して之を討たしめ給ふ。義家も兵を遣して之を召せとも至らず。官使さへ殺しければ、罪を以て、隱岐流いんぎりゅうなる。

されど、謫所には赴かず、出雲にとゞまりて、目代を殺し、横暴を極む。平正盛、勅をうけて之を討ち、その首を獻ぜり。これ天仁元年の事にして、後三年の役をさること十七年目也。義家も此年を以て逝けり。これより後、二十年の間、義親と名乗るもの、幾人となくあらはれたり。殊に一時に二人あらはれたることあり。崇徳天皇の御世、大治四年、義親と稱する者、東國より京に入る。鳥羽法皇、前關白忠實をして之を鴨院に養はしめ給ふ。然るに、翌年、また義親と稱するもの、京に入り、鴨院の義親と闘ひ、其の黨六人は殺され、己れは捕へられたり。檢非違使源光信私怨を以て、鴨院の義親を殺す。これによりて、光信殺されたるが、鴨院の義親が果して眞の義親なりや否や、否定するもあれば、是認するものもありて、當時明かに判決すること能はざりき。大治五年は、義親が誅せられしといふ天仁元年より二十年目也。

五

義家は意を第四男の義忠に屬しけるが、義家が死せし翌年、即ち天仁二年、

從兵鹿島三郎に暗殺せられたり。これ義光の使嗾せる所なるが、廷議義綱子義明の爲せる所とし、檢非違使源重時に命じて義明を討たしめ給ふ。義明戦死す。義綱之を冤として、走つて近江の甲賀山に據る。爲義勅を奉じて之を討つ。義綱髪を剃りて出で、降る。其子義弘、義俊、義仲、義範は自殺す。爲義、義綱を捕へて凱旋す。義綱は死を減じて、佐渡に流されしが、長承三年、再び朝議を蒙りて自殺せり。爲義が義綱を討ちし時は、わづかに十四歳なりき。さきに誅に伏したる親の子也。即ち義家の孫也。功によりて左兵衛尉となり、間もなく左衛門大尉となり、直に義家の後を嗣ぎて、源氏の宗となれり。

永久元年、興福寺の僧徒、延曆寺を攻めむとす。爲義詔を奉じ、從兵十七騎を以て、栗子山に戦つて之を走らせたり。なほ、正盛、光國等と共に叡山の僧兵の京に入らむとするを防ぎしことあり。忠盛と共に山僧の祇園祠に據れるを討ちはらひしことあり。尾張介となり、伊豫、相模、河内等の守となり。

官は檢非違使までになりしが、位は從五位下にとゞまれり。子は二十三人までありて、長壽を保ち、平正盛の晩年、忠盛の一生、清盛の初年へかけて、源氏の長たりし人也。

六

平家の方にて云へば、正盛が義家の晩年より爲義の初年へかけて、平氏の長たりし人也。正盛の義親を誅して還るや、當時、因幡守たりしが、進んで但馬守となり、のち讃岐守にもなり、位は從四位下までのぼれり。これ實に清盛の祖父也。

忠盛は、父正盛にもまさりて榮達し、軍功としては、山陽、南海の海賊を捕ふるぐらゐの事に過ぎざるが、一躍して内昇殿を許されたり。これ當時の武門にしては、實に異數也。殊に白河法皇の寵遇、日にあつかりければ、諸公、卿、嫉視して、之を圖らむと議し、豊明の節會を以て期となす。忠盛之を洩れ聞きて、自から備ふる所あり。いよく其日になりて、忠盛殿に上り、暗室にて、一

寸其刀を抽く。公卿等その光芒を見て、敢て發せず。殊に殿外には、忠盛部下の猛士平家貞來り居たるに、公卿等ますます恐れたり。宴に方りて歌舞盛に起る。忠盛命をうけて舞ひけるに、歌へる人々、拍子をもぢくりて、伊勢の瓶子は酷麿といふ。瓶子は平氏に通じ、酷麿は眇目に通ず。忠盛は眇目なりければ、斯く歌ひて嘲笑しける也。忠盛憤懣して、宴終らざるに先づ退けり。退くに及び、佩びたる刀を主殿司に渡せり。公卿等訴へて曰く、忠盛は勅に由らずして、刀を帯びたり。又兵を以て自から従へたり。請ふ、官籍を削りて、罪に處せむと。法皇驚いて、忠盛を召して問ひ給ふ。忠盛陳謝して曰く、臣の家臣、宮中に臣を圍る者ありと聞き、臣の跡つけて來れり。臣の知る所にはあらず。されど罪は逃るべくもあらず。刀は主殿司に預けたれば、之を検し給へと。檢し給へば、まことの刀にはあらず、木刀に銀を塗りたる也。法皇いたく賞歎し給ひ、良將の心を用ゐること、さもあるべし。兵士が主の難に赴くは、常の事なり、咎むるに足らずとて、却つて、益寵遇し給ふ。

忠盛の機智よく禍を轉じて福となしける也。

— 白河法皇曾て忠盛に向ひ、昔、小一條院は、源賴義を親近して、毎に傍を去らしめざりき。汝も亦朕の身より離るゝこと莫れと。忠盛の武功は、到底賴義義家の比にあらざれども、一躍して、賴義義家の地位を得たり。昇殿を許されたるは、更に一段進んで、賴義義家以上也。

白河法皇の寵姫、祇園女御、祇園祠の傍に居る。法皇しばしば御幸し給ふ。御幸し給ふ毎に、忠盛扈從す。一夜、大雨驟に至る。林中に怪物あり。頭髮針を束ねたるが如く、身に光ありて明滅す。鬼なりとて、見る者みな驚怖す。忠盛命を受けて、之を射むとしけるが、鬼にはあらず、狐狸の妖をなせるならむ、生捕らばやとて、進んで之を捕へたるに、こは如何に、一老僧也。その僧は、神燈を點せむとするものにて、光の明滅せるは、もちゆく火を消さじと折り、吹きたるにて、髪が針のやうに見へたるは、雨を防がむとて、頭にかぶれる麥束の雨を帯びたるに、火の光の映じたるなりと、事がわかりて、衆

はじめて安心し、法皇はその膽勇を稱し給ふ。今の世ならば其者ならずとも、これくらゐの事は出来れど、迷信盛にして、物怪多かりし當時にありては、膽勇たるは失はざる也。

一 忠盛は、歌をもよくせり。播磨より上りし時、

有明の月もあかしの浦風に

浪ばかりこそよるに見えしか

の一吟を献じて、いたく法皇の賞歎を博せり。

忠盛は、播磨、伊勢、備前、但馬等の國守に任じ、官は刑部卿に至り、位は正四位上にのぼれり。豺狼の資を以て、猫をかぶり、法皇の爲めに寺を建つることも多く、恭儉にして驕らず、大に人望を得たり。白河法皇、忠盛に女御を賜へり。その生める子、即ち清盛也。こゝに、平氏興亡を譬ふれば、貞盛は種を蒔き、正盛に至りては大木となり、忠盛に至りては花を開き、清盛に至りては實を結べり。實熟すれば、落ちざるを得ず、宗盛これ也。

第八章 保元の亂

白河法皇の御世……武士王法を輕んず。……白河法皇の倭佛……堀河天皇の御一生……鳥羽法皇の御一生……皇位の争……關白の争……保元の亂の主因……美福門院……待賢門院……保元の亂の副因……忠通と賴長……忠實と泰子……近衛天皇と忠通……崇徳上皇と賴長……近衛天皇の御早世……爲朝の策……爲義の策……爲朝の策……白河北殿の戦……爲朝の勇戦……白河北殿陥る……崇徳上皇の配流……賴長の死……清盛叔父を殺す……義朝親を殺す……義朝諸弟を殺す……孤島の爲朝……賴長と通憲……

白河法皇院政四十四年、之に次いで、鳥羽法皇の院政二十八年、而して、鳥羽法皇の崩御と共に、保元の亂起りぬ。

白河法皇御一生の間、政は親裁に出でたり。堀河天皇の御在位二十一年、鳥羽天皇の御在位十七年、崇徳天皇の御在位の六年の間は、白河法皇の院政時代にて、天下の事すべて、白河法皇に決したり。大日本史に曰く、白河法皇は性嚴にして、温雅頗る後三條帝の風あり。信賞必罰、剛斷果決、而して愛惡

意に任せて、官を授け、職に任ずるに、率ね舊典に違ひ給はずと。主權は法皇にありて、天皇にわらず。相門の藤原氏も手を斂めたり。かくて、宮中にありては、まことに皇室萬歳と申すべき次第なれども、翻つて外を見れば、僧兵益跋扈し、武士益跋扈す。正盛も、爲義も、海賊や逃亡者をかきまひて、王命に抗せしことあり。白河法皇、天下に令して、殺生を禁じ給ひけるが、忠盛の臣に、加藤成家といふ者あり。鷹を放ちて鳥を捕ふ。檢非違使廳に引致して之を責む。對へて曰く、主人忠盛日に鮮鳥を獲ることを命じて、以て女御の膳に充つ。若し獲ざれば罰せらる。その罰も、朝廷にありては、禁獄流罪に過ぎざれども、源平二家にては、斬罪に處す。われは唯死を免るゝの策を講ずるのみ。其他の事を知らずと。法皇これを聞しめして、そのやうな痴漢は放してやれと宣給へりとぞ。終に東國の武士をして、寧ろ朝廷に背くも、源氏に背く莫れと言はしむるに至れり。政權の武門に移るも、亦止むを得ざるの勢也。

法皇が殺生を禁じ給ひたるも、崇佛の餘に出でたることなるが、大日本史は、法皇の御善根を數へて曰く、法皇慶し給ふ所の善佛五千七百七十餘幅、丈六の佛像一百二十七軀、等身の佛像三千一百五十軀、三尺以下の佛像二千九百三十餘軀、七寶塔二十一基、小塔四十四萬六千六百二十餘基と。鳥羽法皇も、佛に倣し給ふこと、白河法皇に譲らず。今、京都にて有名なる三十三間堂、即ち得長壽院は、鳥羽法皇の御願に成りて、平忠盛の造營せる所也。

二

堀河天皇は、白河法皇の皇子也。大權は法皇にありしかど、政に勵み給ひ、法皇に苛察と云はるゝばかりに、神經は敏におはす。嘗て近臣に向ひて、普天の下、みな王民也。然るに遠民何ぞ疎にして、近民何ぞ親なる。一人の耳、周く四海の事を聞くを得ず、これ大患也。卿等聞く所あらば、告げて隠すと莫れと。これ實に時弊に的中して、世にも難有き御詞也。天皇は音律に精しく、笙と笛とに妙を得給ひたるが、後、笙は氣を損ずるとて、唯、笛を吹き給

へりとぞ。惜ひらくは三十歳に満たずして早世し給へり。

三

鳥羽天皇は堀河天皇の皇子也。御父堀河天皇に似て、音律に精通し給へり。なほ典故に通じ、天文にも通じ給ふ。容儀を修むるを好み給ひたれども、奢侈には耽りたまはず。強装束といふもの、實に天皇の時に生まれり。色を好みて、内嬖多く、男寵にも耽り給へり。白河法皇始め待賢門院、即ち大納言公實の女璋子を子養し給ひけるが、之に通じ給ふ。然るに之を鳥羽天皇の中宮とし給ひ、その後もなほ醜聞あり。崇徳天皇はその生み給へる所なるが、鳥羽天皇之を子視し給はず、祖父兒と呼び給へり。寵愛し給へる美福門院、即ち中納言長實の女の得子に皇子生る。その三歳の時、崇徳天皇をして位を譲らしめ給ふ。然るに十七歳にして夭折し給へり。美福門院これ崇徳上皇と藤原頼長との咒詛せるに因るとて、鳥羽天皇に讒言し、天下一般に望を屬せる崇徳上皇の皇子重仁親王をさしかきて、崇徳上皇の所謂文

にもあらず、武にもあらざる崇徳上皇の御實弟を立て給ふ。後白河天皇これ也。後白河天皇立ち給ふと同時に、保元の亂は起りぬ。

四

保元の亂は、崇徳上皇と後白河天皇と御兄弟の皇位の争也。之に藤原忠通と藤原頼長とこれも兄弟同士の關白の争が加れり。源平二氏は、武門相戦へるにはあらず、この二つの争に用ゐられたるまで也。嗚呼保元の亂、上には天皇の御兄弟皇位を争ひ給ひ下には相門の兄弟關白を争ひ、源平二氏をして親子兄弟叔甥相別れて鮮血を瀾がしめ、齏穀の下を修羅の巷に化す。洵に國史上未曾有なる、破倫の最も甚しき一大悲劇也。

保元の亂の近き主因は鳥羽法皇が美福門院の色に迷ひたるに在り。遠き主因は白河法皇が孫嫁に當れる待賢門院と情交をついけ給ひたるに在り。げにや古人も傾國傾城と歎けり。天慶の亂も前九年の役も、後三年の役も、みな女に本づきたるが、保元の亂も亦女に本づきたる也。

五

保元の亂の副因は關白の争なるが、忠通と頼長とを比するに、忠道は太平の好宰相なれど、頼長は餘り切れ過ぎて、宰相としては、少々危険なる人物也。忠通は暖く、頼長は冷し。二人の父忠實は如何なる人ぞといふに、これは關白にまでなりて、藤原氏の正系を嗣ぎたり。忠實は容貌豊美、聲音清朗、音樂を好み、善く箏を彈じて、其奥技をきはめたり。一朝其女、泰子の事に坐じ、法皇の逆鱗に觸れて、宇治に退居せり。初め白河法皇忠實に命じて、其女泰子を鳥羽天皇の宮に入れしめ給ふ。然るに、忠實は之を辭したり。何故に辭したるぞと云ふに、鳥羽天皇は御幼時は、舉止輕躁にして、小弓にて人を射るなど、惡戯甚しかりしかば、忠實は天皇を侮りたる也。されど、天皇長じ給ひては、また吳下の舊阿蒙におはさず。忠實大に後悔したり。天皇も泰子には御未諫ありしと見えて、保安元年、法皇の熊野に御幸ありしを機とし、忠實に命じて、泰子を納れしめ給ふ。待ち設けし處とて、齋院に備れり。法皇

事を聞こし召し、さきに朕の命に背いて、今天皇の命に従ふは何事ぞといたく怒らせ給ひて、泰子の入内を止め、忠實の官を削ぎ給ひける也。されど、鳥羽天皇はなほも御未諫ありて、白河法皇の崩後、とう／＼泰子を納れて皇后とし給ふ。賀陽門院これ也。門院時に御年三十九歳、普通ならば、孫のあるべき年頃也。鳥羽天皇は、かばかり賀陽門院を熱望し給ひたれど、女の色は衰へ易く、男の心は移り易し。後、美福門院を納れ給ひて、三門院といふ異例起り、年最も若き美福門院獨り寵を擅にせり。

白河法皇は、忠實の子忠通を擧げて、關白とし、大に忠實を抑へ給ふ。忠實は凡夫也。朝榮が戀しくてたまらず。白河法皇には憎まれたれど、鳥羽天皇の御氣には入りたり。白河法皇崩御の翌年、正月の拜禮日に、入朝を請ひ、かねて子の忠通の上に坐せむことを請ひて入朝す。公卿未だ席次に就かざるに、忠實は脚疾にて久しく立つ能はずとて、先づ獨り拜謁して出づ。關白以下之を扶け起す。時の人は之を榮としけるが、これ却つて忠實が一統

袴兒に過ぎざるを自白せるに過ぎず。忠實は頼長を愛して忠通を疎し、終に不孝の子なりとて父子の誼を絶ちけるが何ぞ知らむ。忠通は孝心厚き人ならむとは。頼長死して後忠實はじめて忠通の誠心を知りたるも、既にふそし。忠實は到底大人物とは云ふべからざる人也。

六

忠通は忠實の長男也。人となり寛厚、喜怒形れず、詩文を善くして世に推重せらる。和歌をもよくす。その秀逸なるものは、人營の下にわらずと稱せらる。書にも妙にして一家を爲し、法性寺流といふ一派を開けり。されど、藝能一方にはわらず、政治上の典故にも通ぜり。白河法皇泰子の事にて忠實を斥けて忠通をして代らせむとし給ふ。忠通奏して曰く、父罪を獲て廢黜せられたるに、子爲めに請はずして之に代るは、孝に非ず。願くは忠實を宥されて、然る後職に補するを得せしめ給へと。法皇感じて許し給へり。召對する毎に、比例を條擧し、引據明確なるに、法皇常に重んじ給へり。かく

白河法皇は、忠實を斥けて、忠通を重んじ給ひしが、鳥羽法皇に至りては、それがあべこべになれり。關白たることは、もとの如し。忠實は忠通に諭して、内覽の職を秘藏兒の頼長に傳へしむ。忠通従はず。轉じて法皇に忠通の意の在る所を問ひ給はれと請ふ。法皇忠通を召して問ひ給ふ。忠通止むを得ず白して曰く、頼長は資性凶險なり。彼若し幼主を輔けなば、四海必ず其禍を被らむ。されど、之を父に言はば、父必ず大に怒らむ。臣、父に孝ならむとせば、君に忠ならず。故に憚つて言はざりきと。この言は、たしかに頼長の一面に的中せり。然るに、鳥羽法皇は、あさはかにも、之を忠實に告げ給ふ。忠實果して大に怒りて、父子の誼を絶ち、氏の長者を奪つて、之を頼長に授く。忠通は恨むるさまもなく、平氣にて朝參す。頼長その意氣地なきを嘲れり。鳥羽法皇終に頼長を擧げて内覽とし給ふ。頼長權を專にして、關白の忠通は、あれども無きが如し。近衛帝は、いたく頼長を嫌ひ給ふ。法皇これ忠通の讒に因るものと思ひ給ひしが、頼長の驕傲日に甚しきを見て、漸

く之を疎んじ、忠通を信じ給ふに至れり。後白河天皇立ち給ふに至りて、頼長は内覽を止められたり。是に於て、頼長は崇徳上皇と結托せざるを得ず。鳥羽法皇女謁を容れて、後白河天皇を立てひとし給ふや、忠通の意を問ひ給ふ。忠通後白河天皇を以て之に對ふ。忠通とても、後白河天皇の文にもあらず、武にもあらずるを知らざるに非ず。されど、崇徳上皇の皇子を立てなば、頼長わが地位を奪はむ。自家防衛の爲めに、美福門院と結托して、後白河天皇を薦めたる也。保元の亂の主因にも、忠通は鳥羽法皇と其責を分たざるべからず。

七

頼長は忠實の次男也。藤原通憲に學びしが、數年の後には、早や出藍の才をわらはせり。博學多才、意を經世濟民に注ぎて、兄忠通の詩歌に長ずるを末技なりと嘲れり。頼長は容貌美なるが、人となり嚴勵深刻、朝會毎に、諸卿曉れて至るものあるか、議論已れと異なる者あるかすれば、いたく之を摧辱

し、甚しきは、其邸宅を焚くに至る。世呼んで、惡左府と云へり。されど、上下に拘はらず、其說理に合する時は、已れの不敏を謝するだけの雅量はありたり。舊師藤原成佐の博學にして、不遇なるを憐み、切に奏請して、之を推薦するだけの恩義も知りたり。忠通とは絶交したれども、朝廷にて遇へば、恭しく禮を執るだけの禮讓も辨へたり。何事も理窟で押し通す人也。學を待み、氣を負ひ、才氣進りすぎて、徳を缺けり。忠通は徳はあれども、氣力なく、控へ目に過ぎて、手腕なし。一長一短、極端と極端、兄弟の仲は、犬猿も言ならず。忠實はこの二人をつきませたるやうにて、やゝ中庸を得たり。藤原爲隆嘗て評して、忠實をして、關白たらしめ、忠通と源有仁とをして、左右大臣たらしめば、人才相並びて、各其力を竭すを得べしと云ひけりとかや。忠通は、なほ風流の好宰相たるを失はず。頼長は、斷じて宰相の器にあらざる也。

崇徳上皇は、近衛天皇の崩御に及びて、重祚をと思ひ給ひたれど、得られず。せめて、その皇子をと思ひ給ひたれど、それも當がはづれたり。間もなく鳥

羽法皇も崩御し給ふ。上皇其宮に至り給ふに、遺詔なりとて、入れられず。益怒り給へり。頼長は既に鳥羽法皇に疎ぜられ、美福門院には嫌はれ、後白河天皇にも容れられず。終に上皇と相謀りて、茲に兵を擧げたる也。

八

鳥羽法皇豫め事あるを慮りて、万一の場合には、召せとて、源義朝以下十人の名を署し置かせ給ひければ、新帝之を召し給ふ。清盛は洩れたり。蓋し崇徳上皇の皇子重仁親王は忠盛の養君にして、清盛は御傳子なれば也。されど、美福門院の御計らひにて、遺詔にかこつけて、之を召し給へり。當時皇室を始め、公家にては、武家にては、子生るれば、然るべき人の妻を乳母とす。其夫は、之が傳たり。子は乳兄弟也。教育自から其間に行はれ、相互の關係極めて親密なるもの也。忠盛もし世にあらば、清盛以下の子をつれて、上皇の方へ参りしなるべし。

上皇の方にては、武臣を召し給ひたれども、惜むらくは、機先を制せられ給

へり。源爲義は既に老いたり。その長男にして源氏の嫡流なる義朝は、天皇に召され、精兵幾んどみな之に従ひゆけり。上皇爲義を召し給ふ。老を以て辭す。許されず。止むを得ず、頼賢頼仲爲宗爲成爲朝爲仲の六子をつれて参れり。平氏の嫡流天皇に召され、清盛の叔父なる忠正のみ新院に参れり。新院召し給ふ所の武家は、すべて、よりくづ也。されど、奈良の興福寺は、藤原氏の檀那寺にて、頼長はその僧兵の來るを待めり。武家はよりくづとは云へ、中に一騎當千の豪傑あり、鎮西八郎源爲朝これ也。保元の亂の張本人は、崇徳上皇と藤原頼長となるが、文學となりて、あらはれたる保元物語にては、爲朝が唯一の大立物也。

九

爲朝は爲義の第八子也。鎮西八郎と稱す。幼より大膽不敵にして、兄を凌ぎ、傍若無人の舉動多かりければ、爲義之を憂ひ、その十三歳の時、鎮西へ追ひ下せしに、爲朝は豊後に居り、阿曾忠國の婿となり、自から九州總追捕使と稱

し忠國を先導となして、菊池原田の諸族を討ち、大戦二十餘度、城を拔くこと數十箇處、二年の間に、幾んど九州を征服せり。これ祖父義親の二の舞をなせるものにして、而かも成功せるもの也。諸國より朝廷に訴ふることも頻りなれば、爲義に命じて之を召さしめ給ふ。至らず。爲義は、その爲めに檢非違使の官を解かれたり。爲朝之を聞いて、自から京に上りて罪を乞はむとす。孝の兒なる哉。部下みな従はむと乞ふ。衆を擁して京に上るは穩ならずとて、たゞ二十八人の猛士のみをつれて京に上れり。然るに、恰も保元の亂起りければ、爲朝は、その罪を許され、父と共に崇徳上皇の宮に至れり。

爲朝の武名當時、天下に轟けり。頼長召して、謀を問ひたるは、大に好し。

爲朝曰く、臣の實驗する所に據るに、勝を制するは夜討に若くは無し。今夜、高松殿を襲ひ、火を三方に放ち、一方より攻むれば、一舉して勝を制せむこと必せりと。頼長曰く、汝は年少にして、徒に勇を負へり。多く戦ひたりといふとも、小追合こおひあひに過ぎず。今、二帝位を争ひ給ふ。堂々の陣を張らざるべからず。

らす。奈良の僧兵も、明朝来る筈なれば、宜しく其来るを待ちて、然る後に戦ふべしと。爲朝退いて人に謂つて曰く、長袖の徒、安んぞ軍事を知らむや。軍事は、武夫に任せざるべからず。我兄義朝は、軍に長じたる者なれば、今夜來り襲はむすらむ。敗は目前に在り。明朝僧兵の來るを待つ暇あらむやと。

爲義も策を進めて曰く、敵兵多くして我兵少なし。されど、防ぎ守らむことは、必ずしも難からず。皇輿宮を出で、奈良に行幸せられ、宇治橋を斷ちて、機を見て動かるべし。勢もし振はずんば、關東に行幸せられ、關東の兵を合し、大舉して皇輿を京師に還さむこと、これ万全必勝の策なりと。頼長曰く、その策もさることなれど、今や、後白河天皇位を奪ひて、人も神も共に憤る。今、この機を失はば、再舉期し難し。皇輿は宮を出づべからずと。斯く頼長は、爲朝の策をも用ゐず、爲義の策をも用ゐず、而して自から用ゐたり。

新帝の方は如何にぞといふに、内裏は高松殿にありけるが、狭くして便宜悪しとて、俄に東三條殿に移り給ふ。關白忠通以下之に従へり。新帝の方にて、最も重を置けるは義朝なるが、召されて、謀を問はる。答へて曰く、早く勝を制せむには、夜討に如くぬの無し。殊に奈良の僧兵明日來りて敵に加はる由なれば、その來らざるに先だちて、今夜押し寄せむと。頼長の相手は、忠通なるが、その下に、才物あり。少納言藤原通憲これ也。學問と云ひ、才氣と云ひ、徳なきの點と云ひ、頼長と通憲とは、はゞ同型の人也。而して、頼長は武夫の言を用ゐざるに、通憲は曰く、夜討の儀、尤も然るべし。詩歌管絃は臣等の弄ぶ所なれども、それもなほ暗し。況んや武藝の事をや。殊に先んずれば、人を制すと云へり。武士はみなく、罷り向ふべしと。通憲は、頼長に師たることありしが、今武夫に一任するを見るに、矢張り師たりしだけに、頼長に比して、一日の長あるに似たり。

朝廷にては、義朝を勵まし給ふに、凱旋の日、昇殿を許さむことを以てす。

義朝曰く、武士戦に臨むにも、とより生還を期せず、願くは、生前に昇殿するを得むとて、直に進んで殿に上る。通憲は如何にと制したれど、後白河天皇は、たゞ微笑して咎め給はざりき。當時、藤原氏以外の人にして、昇殿の榮を得ることは、雪中に箭を得るよりも難し。義朝心中の喜は、さもあるべく、また生前にとの心掛も、一武士としてなら、聞えたれど、武將としては、輕躁に失す。されど、それよりも、昇殿にて義朝を釣らむとせるが、なほ一層輕躁也。

義朝の兵三百餘騎、清盛の兵六百餘騎、頼政の兵二百餘騎、其他、重成、義康、光信、季實など、都合千七百餘騎にて押寄せ。實に保元元年七月十一日也。

崇徳上皇は白河殿におはしけるが、北殿に移り給ふ。集れる兵は千餘騎也。東南の門は平忠正守り、西南の門は爲義守り、北門は家弘守り、西門は爲朝ひとり二十八騎を以て守る。その案ぜしが如く、新帝の兵、果して夜襲す。さきに策をすゝめたるは、この事なりとて、大に怒る。頼長或はその用を爲さざらむかと氣遣ひて、俄に之を藏人に拜す。爲朝辭して曰く、戦に臨み

て除目などの沙汰に非ず、われは鎮西八郎にて可なりと。

一一

西南方面は先づ敵の衝に當れる處也。爲義の諸子先陣を争ふ。爲朝曰く、われはさきに兄を凌ぎて勢當を受けたる身也。今は兄と争はじ。唯最も守り難き處を守らむと。頼賢先陣となりて門を出づ。敵兵押し寄す。

これ義朝の先陣也。頼賢其二騎を射落し、自からも内兜を射られて引退く。

清盛の軍もつゞいて至り、其先陣爲朝の守れる西門に押し出す。伊藤景綱伊藤五、伊藤六の三人眞先に在り、爲朝之を射る。その矢伊藤六の胴を貫きて伊藤五の袖に立つ。伊藤六は即死せり。伊藤五その矢を持ちて清盛に示す。鐵の大さ鑿の如し。清盛を始め、一軍みな舌を捲いて恐怖す。この門に向ふべき命をうけたるにもあらず、他の門へとて引退く。清盛の長男重盛大に憤慨して、武士勅命を奉じて敵に向ふに、強しとて引退くこと

やはあるとて、驅け出づ。清盛無理にこれを擁して、去つて北門に向ふ。

清盛の部下に、山田伊行といふ剛の者あり。清盛の臆病なるを憤慨し、ひとり留りて爲朝に向ふ。爲朝一矢射させ、二の矢を注ぐ處を射て、馬よりかす。矢は留りて鞍に在り。夜の明けはなれむとする頃、その馬、義朝の陣に入る。鎌田政家、これを義朝に示し、これ八郎殿の射給へる也。世にも恐しき御弓勢かなと云へば、八郎は年わづかに十八九、これ程の力はあるまじ。必ず我軍を威さむ計略なるべし。汝向つて一當めて、見よといふ。政家百騎ばかり率ゐて進み、射て爲朝の被れる半首に中つ。爲朝大に怒りて門を出でて突貫す。二十八騎従ふ。政家大に恐れて退く。爲朝長追ひはせず、に引きかへさむとすれば、義朝軍を率ゐて来る。兄にむかつて矢を引くかとなじれば、御身は父に向つて矢を引かるゝかとなじりかへすに、義朝答はせず。衆を待みて、勢強く討つてかゝる。敵は多し、かけ隔てられてはとて、門に入る。遙に義朝の馬上にあるを見て、矢を注ひけるが、待てしばし、親

子兄弟相別れて戦ふも、勝敗互に相救はむとてなるべしとて、その矢をはづせるはげに涙あはる豪傑と云ふべき哉。かくて相戦ふに敵は多し。如かず、大將に矢風おせて引退かせむにはとて射る。その矢、義朝の兜の星を貫き、寶莊殿院の門に半分まで深く射込む。義朝曰く、汝の射術未だ精妙ならずと。爲朝曰く、わざと射申さるるなり。若し命ぜらるれば、何處なりと射申さむと。深巢清國、義朝の危きを救はむとて、進んで矢面に立つ。見る間に射斃されたり。

義朝の軍は多し。殊に、齋藤別當實盛、大庭景義、同景親、金子家忠、根井大彌太など剛のもの少なからず。爲朝の二十八騎は二十三騎まで討たれて、残るものも多く傷を負ひたるが、門の守はなほ堅くして破れず。義朝終に火攻にせむとて、勅裁を仰ぐ。例の少納言の通憲、其策を可とす。火西に起る。折柄西風烈しかりければ、忽ち殿中にも及ぶ。あゝ、止んぬる哉、上皇の軍、一敗地に塗れぬ。

一一二

白河の北殿陥りて後は、悲劇到る處に演ぜらる。先づ崇徳上皇の御上より申さむに、いたはしい哉、新院は、乗りもなれ給はぬ馬に召されて落ち給ふ。藏人信實、御馬の尻に乗りて抱きまゐらせ、爲義、家弘、光弘など従ひまつる。如意山に入らせ給ふに、山險なれば、御徒歩にならせ給ふ。武士どもは、各別れて何地なりとも落ち行けと強ひさせ給ふに、止むを得ず、泣く泣く別れゆく。後に残るは家弘、光弘の二人のみ也。日暮れて、漸く輿を得て、上皇を載せまゐらせ、阿波局の許へと仰せらるゝまゝ、身ぎ行けば、門とちたり。さらば、左京太夫の許へとてゆくに、家空しうして、人も無し。さらば、少輔内侍の許へとて、往いて門を叩くに、音もせず。万乗の御身、今は容れ給ふに處なし。殊にこの日山中にて、水きこしめしつる外は、何物もきこしめさず、漸くにして、知足院に入り、おも湯を得給ふ。剃髪し給へり。光弘も剃髪せり。かくてあるべきにあらねば、終に仁和寺に至り給ふ。家弘は、これより御暇申し

て去れり。この仁和寺の門主は道慧法親王とて、皇弟におはす。上皇は一人の御弟と戦ひ給ひ、今は他の一人の御弟の墨染の袖に御身を托し給へる也。

十日あまりは、佐渡重成に守護せられて、仁和寺に楚囚の御身となり給ひぬ。

思ひきや身を浮雲となしはて、

あらしの風に任すべしとは

憂き事のもどろむ程は忘られて

覺むれば夢の心地こそすれ

讃岐の國へ流され給ふことに定まりて、七月二十三日、都を出で給ふ。御車に女房三人のみ従へり。かくて、讃岐に到りつきて、はじめの程は、松山といふ處に幽せられ給ふ。昨日の宮殿衣冠は夢と消えて、言問ひ奉る人もなき一字の小堂、遙に都の空を眺めて、如何ばかり腸を断たせ給ひけむ。

濱千鳥あとは都に通へども

身は松山に音をのみぞ啼く。

のちには直島といふ處に移り給へり。後世の御爲とて、五部の大乘經を三年かゝりて寫し給ひ、それを仁和寺へかくり、鳥羽の安樂壽院の御墓に納めたき旨申し入れ給ひしが、後白河天皇許されずして、その經を返し給ふ。上皇御憤一方ならず。魔道に回向して遺恨を散ぜむとて、經に御誓狀かきて海底に沈め、御髪は延ぶるに任かせ、御爪も延ぶるに任かせ、御姿をやつし、惡念に沈み給ひけるが、讃岐におはせしこと九年、御年四十六に崩御せらる。白峰に葬りまつる。仁安年間、西行法師が、その御墓に詣でて、

よしや君昔の玉の床とてり

かゝらむ後は何にかはせむ

と詠みしこと、保元物語に出で、更に精しくは撰集抄に出でて、世に有名也。

上皇の崩後、逆亂相繼ぎ、變災絶間なかりければ、これ御怨靈の祟る所なら

ひとて、その廟を春日河原に立て給ふ。粟田宮これ也。實に壽永三年四月の事也。

一三

頼長も馬に乗りて落ちゆく。博學多才の大臣なれど、馬の乗り方は知らず。少納言成隆、その馬の尻に乗り、落ちぬやうにと頼長を抱く。さるに運の盡き、や、流矢、頼長の頸を貫く。頼長馬より落つ。成隆も落つ。人々走りよりて、矢を引抜き、さまざま介抱したれど、血はとまらず。頼長今は目をひらけるのみにて、物を言ふこと能はず。漸く車にのせて、嵯峨にゆき、荒れたる坊に一夜を明かす。翌日梅津より舟にのせ、賀茂河尻にやどり、その翌日、木津にいたる。頼長の父忠實、奈良興福寺の禪定院に在り。目の見ゆるに、一目なりとも親子の對面をとて、其由申し入れたるに、大臣たらむ程のものにして、兵仗の先にかゝるばかりに不運なるものは、見るにも恐びず見らるゝにも恐びざるべしとて泣く。頼長これを聞いて、自から舌を噛み切り

しが、なほ命あり。その翌日奈良に入りて、終に絶命せり。磐若野ばんじやのに葬る。

二十一日にいたり、實檢とて官使下りて、其墓をわばき、死骸をそのまゝ、道端に棄て、去れり。後、高倉天皇の御世に、太政大臣正一位を贈らる。

頼長の子は、みな流されたり。忠實は疵もつ足の安き心も無かりしが、忠通の哀願、朝廷に容れられて、爲めに無事なることを得たり。かばかり孝心ふかきものを、如何なれば、今迄疎んじけるぞとて、忠實は、いたく後悔しけりとぞ。

一四

白河北殿陥りて後、三條鳥丸の上皇の御所は、焼きはらはれたり。頼長の壬生亭も、焼き拂はれたり。其他、徒黨の邸宅十二所すべて、焼き拂はれたり。これらは、まだしも、陰險なる通憲は、若し降らば、甲某は何の國乙某は何の國と云ひふらしければ、命は助かるものと思ひ、心許して降りしに、武夫はみな殺されたり。公卿は流されたり。中には五位以上の人にして、拷器に責め

られ、息絶えしもありたり。平忠正は子四人つれて、甥の清盛をたよりて降りしに清盛すべて之を六條河原に斬れり。家弘、光弘は大江山にて斬られたり。

爲義はその子等と共に東國へと思ひしが、途既にふさがれりと聞きて、行くに行かれず、殊に生憎病氣にかゝれり。終に叡山に上りて、髮を剃り、さて諸子に向ひ、われはこれより義朝をたよりて都に出でむと思ふ。汝等はいづくになりとも、恐び居て、身を全ふすべし。餘命いくばくもなき身、固より惜くもあらざれども、唯汝等を助けむが爲めに降るなりといふ。爲朝は聞きもあへず、降らば、必ず刑せられ給はむ。關東に下りて再舉を圖り給へと諫めたれど、途塞りたればとて従はず。止むを得ず、親子ちりくになりて、叡山を下る。平忠正と清盛とは仲悪しき仲なりしかど、爲義と義朝とは、仲悪しくはあらず。義朝奏して、己れの功を以て父の罪を購はむことを乞ふ。清盛は既に叔父を殺せり。汝の父は許すべきに非ず。速に誅戮すべし。

若し違背せば、清盛以下の武士に命すべしとて許し給はず。義朝は孝ならむとせば、忠ならず、忠ならむとせば、孝ならずといふ苦境に陥れり。如何にかすべきと、その臣鎌田政家に問ふ。勅命を奉ずるの外なしといふに、さらば、よきやうに計らへとて、政家をして、父を七條朱雀に斬らしめたり。朝廷は、更に義朝に悉くその弟を尋ね出して殺せと命じ給ふ。頼賢、頼仲、爲宗、爲成、爲仲など、戦に加はりしものは、みな捕へられて、斬られたり。

茲に最も物のあはれを留めたるは、乙若、龜若、鶴若、天王の同腹の兄弟也。乙若は十三歳、龜若は十一歳、鶴若は九歳、天王は七歳也。如何に年若きものなりとも、男子はみな殺せとの勅掟いなみ難く、義朝その臣秦野延景をして乙若等の宿所に向はしむ。母は參詣にゆきて留守也。延景いつはりて曰く、御父今は北山の雲林院（いん）にははす。御身達を呼びよせよとの事故、御迎に参りたりと。乙若等、まことと思ひて喜ぶこと甚しく、輿にのりて、舟岡山に至る。輿をかき据うれば、年最も幼き天王、父は何處にとて、輿より飛び出

す。延景泣く／＼實を告ぐ。われら四人を助けかば郎等百騎にもまさ
らむに、兄上は如何なれば殺し給ふぞと、いふは鶴若也。今一度使して、たし
かに聞かばやと、云ふは龜若也。乙若は之を制して、わが家の者は、幼きもの
までも心はたけしと言はれたり。兄上は既に父上を殺せり。いかでか我
等を許すべき。今は生くるを得べき身に非ず。父戀しくば、唯西に向つて、
南無阿彌陀佛と唱ふべしと云へば、三人の弟も覺悟して、みな西に向つて合
掌す。見るもの涙を流さざるは無し。われを最後に斬れと乙若いふ。三
人の弟の首は、既に前に落ちぬ。乙若曰く、命惜しさに、後に斬られむとする
に非ず。弟等をして、聞かしめて、泣かしむるに、恐びずと思へば也。母上、今
朝八幡へ詣でむとし給ふに、皆従はむと乞ふ。つれ行かば、みなつれ行くべ
し、つれ行かすば、一人もつれじとて、我等が寝たる間に出でゆき給へり。そ
の跡にて、父上の御迎へと聞きて、情しさに、何の思ふ事もなく、母上に何の形
見も參らせざりき。これを形見に參らせよとて、三人の弟の髪を切り、わが

髪をも切り、別々に紙に包みて、別々に名をかきしるし、これにて思ひ残す
と無しとて、いと落着きて斬られたり。

乙若の傳原後藤次龜若の傳吉田次郎鶴若の傳佐野源八、天王の傳内記平
太も、こゝまで従ひて來りしが、主の死を見て、悲みに堪へず、共に冥途までと
て、みなその場にて自殺せり。日頃事へたりし二人の武士も、刺しちがへて
死せり。

母が八幡へ詣でしも、夫や子供の無事を祈らむとてなるを、夫は既に斬ら
れ、子はみな殺されたりと聞いて、悲歎やる方なく、今は生きて、何かせむとて、
桂川に身を投じて死せり。侍女一人あを追ひて同じく死せり。主従男
女十二人朝に舟岡山の露と消え、夕に桂川の水泡と失す。悲惨なる哉。

一五

翻つて天皇の味方を見るに、關白忠通は、もとの如く、氏の長者となれり。
清盛は、安藝守より播磨守となれり。義朝は、下野守より左馬權頭になれり。

されど、義朝はこれでは賞が功に酬いずと不足をいふ。さらばとて、左馬頭に進めらる。とかく源氏の人は、野性を免れず。百官ひそかに爪弾きせり。

一六

さるにても、大立物の爲朝は、如何にかしつる。爲朝は、身の長七尺、左手は右手より四寸ばかり長く、魁岸奇偉、意氣豪逸、齊力人に過ぎ、弓矢取りては天下敵する者なし。十五歳にして早や九州を征服せり。保元の戦には、寡兵を以て能く戦ひたり。かばかりの豪傑も、敗軍を如何ともする無く、父と共に走る。父は降らむとす。諸兄も降りて命を全うせむとす。ひとり爲朝のみは、驚るゝまでは戦はむとす。近江の輪田といふ處に潜み、機を見て九州に下らむとしけるが、病起れり。入浴中、三十騎に圍まれ、終に生捕られたり。時に保元元年九月二日也。

爲朝も必ず殺さるべしと思ひの外、命は助けられて、流罪に處せられたり。そは何故ぞといふに、爲朝は稀代の勇者なれば、之をむざ／＼殺すは、惜し、

との事也。武勇を重く見て、其罪を軽く見る、さすがに日本は尙武の國なる哉。

かくて、爲朝は、伊豆の大島へ流されたるが、肘をば抜かれたり。即ち肩の力がひをはづされたる也。それにて、力は少し弱りたれど、手が長くなりたれば、弓を引くことは昔に劣らざりき。爲朝の一身すべてこれ氣と膽と也。空しく孤島に兩日月を送るべくもわらず。大島は更なり、伊豆七島をすべて征服し、なほ遙々進んで琉球にいたり、そこに將種を留めたり。舜天王、これ也。その後、大島にありけるに、官兵五百騎二十餘艘にて押寄す。爲朝射てその一船を沈め、今は多く人を殺すも益なしとて、自から腹を屠りて、惜しや、保元の大立物、孤島の露と消えぬ。その兵船を沈めたるは、船体を射たるにはわからず、帆網を射切りたるならむとの説あるが、余も然るべしと思ふ也。

一七

保元の亂は、崇徳上皇が御弟の皇位を奪はむとし給ひ、頼長が兄の關白を

奪はむとせるより起りたるにて、もし順逆を云はゞ、天皇が順にして、上皇が逆也。逆の上皇の敗れ給ひたるは、所謂自業自得と申すもの也。さるに、亂後の朝廷の處置は、當を得たりとは云ふべからず。後白河天皇が弟の身を以て御兄を流し給へるは、後世陪臣の北條氏が三上皇を流しまつるの備を作し給へる也。頼長の墓を發きて、その儘にしたるも、暴も亦甚しといふべし。清盛が叔父を殺せるも、倫常に非ず。義朝をして其親を殺し、悉くその弟を殺さしめ給ふに至りては、實に敗倫の極、古今未曾有の一大汚點を歴史に印せるもの也。思ふに、通憲の計らひにて、清盛の陰毒も加はれるなるべし。上皇方の頼長、天皇方の通憲、官に懸隔はわれど、實權を握りしは一也。而かも同じ型の人也。共に涙の無き鬼也。もし勝敗處を異にすれば、頼長が殘酷なる刑罰を用ひしこと、必ずや、通憲の如くなりしなるべし。

第九章 平治の亂

二條天皇……後白河上皇の院政……藤原忠通の誤降……阿白基其清盛の娘を娶る……藤原通經の事業……藤原信賴と通憲……源義朝と通憲……義朝と清盛……信賴天皇上皇を幽す……通憲の死……清盛將野詣より歸る……源義平の策……信賴の暴惡……硬骨漢の光賴……惟方天皇を擁して六波羅に投ず……伊通の駄洒落……源平大に戦ふ……信賴の腹痛……義平と重盛の格闘……頼盛の名刀……源氏の大敗……信賴の死……義朝の死……長田忠致の末路……鎌田政家の二子……義經の四天王……義平の死……經房雷に撃たる……頼朝の御流……夜叉御前……常盤御前の三子……義朝の十子……常盤の是非……義朝と頼政との罵合ひ。

一

保元の亂より三年目、即ち平治元年に、平治の亂起りぬ。後白河天皇は、御在位わづかに三年にして、位を皇子の二條天皇に譲り、白河、鳥羽二法皇の例に倣ひて、院政を執り給ふ。さきに後白河天皇立ち給ふと共に、保元の亂起りけるが、今、二條天皇立ち給ひし年に、平治の亂起れり。保元の亂は、事後、白河天皇に關したるが、平治の亂は、全く二條天皇に關せず。

藤原忠通は、二條天皇立ち續ふと共に關白を辭して、隱居の身となれり。時に年六十三。のち五年の間、詩歌自から娛み、六十八歳にして世を去れり。忠通は、好人物也。政治家たらむには、餘りに俗氣無かりき。

忠通關白を辭すると共に、長男の基實之に代れり。されど、年を問へば、わづか十六歳也。父の年あまりにふけて、子の年あまりに若し。忠通如何に好人物なりとも、後日清盛が藤原氏に代らむことを知らば、斯く早くは隱居せざりしなるべけれども、保元平治の際には神ならぬ身の夢想だも及ばざりしなるべし。

この基實が長生したれば、まだしも父より三年おくれて、年わづかに二十四歳にして世を去れり。その子基通なほ幼也。藤原氏は益開黒也。而して平氏に取りて、大に利なるは、清盛の娘が基實の妻となれること也。基通は其出にあらざれども、ともかくも子也。清盛は藤原氏の嫡流の外祖也。而して、院政を執り給へる後白河帝は、一寸氣が利きて大に問の抜け給ふ暗

主也。天下清盛の手に歸するも、亦怪しむに足らざる也。

二

保元平治の際、實權を握りしものは、藤原通憲也。通憲は博學宏才、典故に諳練し、佛敎天文にも通じ、よく人相をも見、歌舞にも長ぜり。彼の白拍子といふものは、通憲が磯禪師といふ女に舞を授けて創めたるもの也。著はせる書物も少なからず。さすがの頼長も、通憲には一目置きたり。鳥羽法皇會て熊野に御幸ありて、宋の僧淡海を召見し給ふ。言語通ぜず。然るに通憲は之と對談して、言語流るゝが如し。而かも内外古今の事、一も通ぜずといふこと無し。淡海曰く、君は支那に學びしことあるか、抑も支那の人かと。通憲曰く、外國に使うることあるかも知れずと思ひて、外國語にも通ぜるなりと。淡海舌を捲いて驚歎し、われ生身の觀音を拜まむと天の示現のまゝに、こゝまで來りたるに、君は實に生身の觀音なり。わが願空しからずと云へりとかや。通憲は才の人也。その才は非凡なるが器は小也。術數と刑

名とを喜ぶ。かゝる人を生佛と拜む支那の僧は憐むべき哉。鳥羽崇徳近衛三朝に事へて、正五位下に叙し、日向守に任ぜられたるだけにて、藤原は藤原なるが嫡流に遠かりければ、官は榮達せざりき。一日髪を梳り、水にうつれる我顔を見るに、劍難の相あり。大に氣をもむ。後相者に見てもらひしに、また同じく其事を云ふ。如何にすれば、之を免るべきかと問ふに、僧とならば免れむ。然れども七十歳以後の事は知らずといふ。よりて僧とならむとす。されど、以爲へらく、官、日向守に過ぎず。僧となりて、たゞ日向入道と言はれむは、残念なり。一つ願官に上りて、然る後に僧とならむと。それが、そもく、劍難の基也。形は僧になれども、心は僧になれぬ人也。慈悲を解せざる人也、よしや、頭を圓くするとも、通憲は到底劍難を免るゝ能はざるべき也。

通憲は僧となりたきにつけて、少納言にならむことを鳥羽法皇に乞ひしに、許し給はず。これ通憲の才を愛み給へる也。官をあげてやるは、よけれ

と、僧となりて隠居しては、朝廷の用缺くるを以て也。また暫くして僧とならむことを乞ふ。法皇これを前の中納言藤原願信に問ひ給ふ。對へて曰く、通憲は天下の才子、人また其右に出づるものなし。許し給ふべからずと。願信も、心は法皇と同じく、通憲の才を愛める也。然るに、法皇は、終に其乞を納れて、少納言に任じ給ふ。やがて、剃髮して、名を圓空と改め、又信西と改めたり。されど、頭は剃りても、俗氣は抜けず、僧となりても、なほ其才をふりまはさずには居られず。當時の迷信とは云へ、頭だけ圓くして、それで劍難が抜けたりと思ふは、今から見れば、滑稽千萬也。かくて保元の亂の頃は、少納言信西入道にて、世に通じし也。

保元の亂後、某々は某々國として、かくれたる者を欺き、いよくあらわれ來れば、死刑に處したるは、みなこの心は鬼なる信西入道が爲せるわざ也。右大臣藤原雅定、大納言藤原伊通などは、大に其非を論じたれども、聰明ならぬ後白河天皇、信西の言に肯従し給ひしぞ、是非もなき。

後白河天皇立ち給ひてより、信西始めて大に意を得たり。紀伊二位と云へるは、天皇の御乳母也。信西は天皇に對して傅也。されば、いたく天皇に親任せられて、天下の事預り聞かざるは無かりき。平安朝の末には、皇威日に傾くと共に、朝廷の儀式すたれ、皇居あれたり。忠通緒治の志ありしが、鳥羽帝撥費を慮りて許し給はざりき。信西意を得るに及んでは、自から奏して之に着手し、皇居新に出來たり。朝會内宴も、其觀を改めたり。これ信西の敏腕を待ら始めて出來る事也。されど、信西は、刑罰と皇居の壯とを以て、皇威を保たんとす。畢竟するに、枝葉の小刀細工に過ぎず。保元の亂に、一の頼長斃れて、更に他の頼長が、出で來りたる也。

三

信西は、大器にあらざれども、其才は用ゐるべし。後白河天皇が之を親信し給ひたるは、その親信の程度にもよれど、必ずしも御遇とは申すべからず。さるに、天皇は、たゞ人の才を見給ふだけの明ありて、人の智を見給ふの明な

く、藤原信賴として、何の役にも立たぬ小人を親愛し給へり。

信賴は、人となり庸闇、才能は何も無し。體は豊大にして、口先は達者に、目の前の小才だけ利く人也。されど、後白河天皇の御寵愛のおかげにて、保元三年には、參議に任じ、右衛門督を兼ね、權中納言正三位に進み、檢非違使別當となれり。これ既に過分也。されど、小人、身の程を知らず、つけあがりて、欲に限り無し。天皇の寵を待みて驕り高ぶり、とても角力にはならぬ。信西と權力を争ひ、實力では敵する能はざれば、刃を以て之を倒さむと、胸に噴患の火をもやす。大將たらむと欲し、天皇に乞ふ。天皇許し給はむとせしが、信西かたく諫むるに因りて、事止みたり。信賴益恨む。小人の常態、自暴になりて朝せず。中納言源師仲と同氣相結び、其家に就いて、日夜武藝を習へり。さるにても、事を擧ぐるには、武家の力を借らざるを得ず。清盛は、信西と婚嫁を通ぜり。殊に榮達して、少しも不平は無し。さらば、義朝をとて、義朝を誘うて、こゝに有力なる味方を得たり。信賴は、なほ權大納言藤原經宗、右

近衛中將藤原成親、檢非違使別當藤原惟方等とも結托せり。

四

源義朝は爲義の長男にして、源氏の嫡流也。保元の亂に、第一の戦功を立て、昇殿するの榮を得たり。これ源氏に取りては、無上の光榮なれども、上を見れば、限りなし。東國にありてこそ大將なれ、朝班に入りては、さつぱり幅が利かず。勅命に止むを得ず、親を殺し、諸弟を殺して、一門更に振はず。心は偏に朝榮を期す。而して、朝廷にて羽振りのよきは、信西入道也。その子は、憲に娘を嫁せむとせしが、信西は許さず。我子は學生也、卿の婿となるべきに非ずと、鼻先であしらふ。義朝癪にさはらざるを得ず。一方には、信西はその子成憲に、清盛の娘を娶れり。平氏は女にて出世し、之に反して、源氏は却つて女にてしくじれり。

源平は武門として、兩立したれども、保元の亂までは、まだ相敵視せざりき。亂の後には、さまで功の無き清盛が、父祖の餘蔭に因りて、宮中に榮進せるに、義

朝は孤立して、心平なからず。義朝の事なれば、清盛を羨み、そねむの心は有りしなるべけれど、清盛を倒したりとて、それで朝榮が得らるゝわけにも非ず。唯朝榮が得たさばかりに、信賴を利用せむとし、かねて信西に對して、婚姻拒絶の意趣返しをなさむとせる也。平家と戦はざるべからざるほどの恨もなかりしかと、兵を擧げたる結果、自然に敵となりたる也。

平治の亂は、信賴と義朝とが、信西を敵として、兵をあげたる也。而して一は小才一方の人、一は武勇一方の人、それで天下が取れる程に、天下は無造作なるものに非ず。二人は機の到るを待つ。知らず、機は如何にしてか、到る。山雨來らむと欲して、風樓に滿つ。冬にとざされし平安城、百花の爛熳たるに先だちて、血の雨降らむとする也。

五

平治元年十二月四日、平清盛は、熊野參詣にとて、子の重盛始め、五十人ばかりつれて、都を出でたり。鬼の來ぬ間の沈瀆兵を擧ぐるの機は、いよく到

れり。

後白河上皇は、位を二條天皇に譲り給ひて、三條殿におはしけるが、九日の夜子の刻ばかりに、信賴は義朝を大將とし、五百騎にて、三條殿を圍み、まづ上皇を御車に入れ、二人等これを擁して皇居に伴ひ、一本御所に幽し、重成、季實をして守護せしむ。かくて三條殿を焼き拂ひ、公卿殿上人、女官など、手當り次第に殺戮す。信西の一門は一人も残さじと思へる也。

丑の刻には、信西の邸宅なる姉小路西洞院へ押し寄せて之を焼く。にげ出づるものは、女童せむらひにいたるまで、悉く之を殺す。もしや、信西が服を變じて逃げ出づるかと思へば也。

かく、一夜の中に、仙洞と信西の邸とを焼き、信賴義朝、今や天皇と上皇とを擁して、皇居に據る。

六

當の敵と目ざされたる信西入道は、焼き殺されたるか。否々、この日午ひるごの

の刻、信西は白虹日を買くを見て、以爲へらく、今夜、御所に夜撃入るべしと。此事申上げむとて、上皇の宮に至りたるに、遊宴正に盛也。折角の御輿をさますも如何がとて、宮女に言ひ置き、邸に歸り、其妻に向ひて、變ある事を語り、子供にも知らせよ、われは、思ふ所ありて、奈良の方へ行くなりといふ。共にと乞へど許さず。侍士四人に、舍人の成澤といふものをつれて、馬に乗りてゆく。宇治より路を轉じて、その所領なる田原の奥、大道寺さして行きけるが、星文に變あり。之を見て、以爲へらく、臣奢つて君弱く、忠臣君に代はる、即ちわが事なるべしと。

翌日の朝、侍士の成景をして、都の様子をさぐらしむ。途中、木幡峠にて、舍人の武澤の都より來るに逢ひて、都の變を知る。其舍人には、わざと、うそを云ひて、入道は今春日山の奥に在りと教へ、己れは都へゆくとして、別れて、田原に歸り、信西に都の變を告ぐ。果して、わが思ひつる通りなり。われは君に代りて死せむ。されど、息のある間は、佛の御名を唱へむとて、地に穴を掘り、

四方に板を立てしめて、信西其内に入り、上に土を覆ひ、唯大なる竹筒を入れ、て、信西の口にあて、息の出来るやうにせしむ。四人の侍士は、泣く／＼都にかへりぬ。舍人の成澤も、都へとて木幡山まで来りしが、運悪く、出雲前司光保が五十餘騎を率ゐて来るに逢ふ。信西の在所を問はれて、始めは知らずとのみ言ひしが、終に有のまゝに白状す。光保その舍人を前に立て、ゆき、敷ふるまゝに掘りおこせば、信西あらはる。まだ目は働き、息も通へり。斬つて、首を持して都にかへる。あはれや、信西入道とう／＼劔難にかゝりたる也。

信頼報を得て、如何にか喜びけむ、十四日、惟方と共に、光保の宿所なる神樂岡に行きて、之を實檢し、翌日、大路を渡して、然る後に獄門に懸けむとす。信頼、義朝は、その日、車を立て、見物す。午の刻の事なるに、晴れたる空俄にくもりて、星出でたり。これさへ怪しさに、信西の首、信頼、義朝の車の前を通る時には、生きたるが如くに、打領く。さきに保元の亂に、刑を嚴にせし報は、競

面、わづか三年たつかた、ぬに、自から死刑に處せらる。されど、信西は、なほ朝敵なればといふ道理をもてり。信頼には何等の道理も無し。たゞ小人の根性をさらけ出して、私怨を露すに過ぎず。さば云へ、信頼がこゝまでに至りたるも、つまり信西が先例をひらきしにもとづく。信西は、山上の巖をつきおとしたるもの也。巖は下るに従ひて、勢を増す。信西の獄門は、その巖が谷底に落ちたる也。

信西の子十七人、中十一人は僧也。父の事に坐して、配流せられしが、後みな召しかへされたり。清盛の聲となりし成憲は、いたく櫻花を愛し、邸宅の四周に、吉野山の櫻を植ゑて、世に櫻町中納言と云はれたる人也。

七

熊野參詣に出掛けたる清盛は、切目といふ處まで行きたるに、圖らずも、都よりの急報に接す。直に引きかへすべきか。こゝまで来りて、參詣せざるも残念なり。如何にすべきといふに、重盛曰く、熊野參詣も、現當安穩の祈禱

に外ならず。君は今逆臣に取籠めらる。武士たるもの、一日も早く救ひまつらではあるべき。神は非禮をうけず。これより直に歸り給ふべきなりと。清盛さらばとて、歸ることに決しけるが、さるにても、甲冑なくてはと、弱音を吐けば、それは、用意してありとて、家臣平家貞、かつがせ來りし長櫃の中より、一同の甲冑を取り出す。心掛のよき人なる哉と、一同感歎せり。

途中、悪源太義平が三千騎にて安部野に待ちかまふと聞き、清盛驚くこと一方ならず、四國へわたり、兵を集めて、後日都に上らむかと云ふ。重盛肯んぜずして、それも、さることなれども、事延引せば、當家追討の詔出でむも知るべからず。無勢が多勢に負けたりとて、弓矢の疵には非ず。此ま、馳せ向ひて、深く討死せむこそ、武士の本懐なれ。何とか思ふ家貞と云へば、さればなり、都の御一門は、如何にか待びわび給ふらむ。唯急ぎ給へといふに、清盛も成る程と都へかへりけるが、義平の要撃は、たゞ噂のみにて、案ずるよりは生むが易しとやら、途に何等のさはりもあらざりき。信頼、義朝は少しも清

盛には備へざりし也。

八

義平要撃の噂は、全く根の無き事にもあらず。義平は、義朝の長男なり。武藏にて、叔父の義賢と戦ひけるが、義賢討死しければ、これより義平は、悪源太と云はるゝに至れり。義賢は、木曾義仲の父也。義朝は、事をあげむと決心せし時、義平を呼び寄せしなるべし。その上落せしは、信頼、義朝が、仙洞と西洞院とを焼き拂ひて、間もなく、直に除目を行へる時也。信頼は、自から大巨大將となれり。義朝は、播磨守となれり。以下、差あり。信頼は、義平の來れるを見て、大に喜び、官位は、思ひのまゝに取らすべし。合戦も、よく仕れと云へば、保元に、叔父の爲朝は、藏人に成されたるを辭したりき。唯義平に軍勢を給はれ。安部野に待ちうけて、清盛を殺し、然る後、官を拜しもこそすべけれ。今は、たゞ呼びつけられたるまゝに、悪源太にてあらむといふ。保元に頼長が、爲朝の言を用ゐざりし如くに、信頼も、義平の言を用ゐざりき。左

大臣の伊通は、洒落滑稽の人なるが、武士は内裏に仕出したる事もなきに唯多く人を殺したればとて、官位を受く。人を殺して官位をうくるものなら、武士よりも三條殿の井戸が受くべきなりとて笑ふ。さきに三條殿の焼かれし時、宮人井戸に投じて死するもの多かりし也。滑稽と云へば、滑稽なれども、武士を輕んずるは、自から輕んずる所以也。太平の懶眠は、なほ保元の戦にも覺めざるものと見えたり。

九

天皇は黒戸御所に、上皇は一本御所に幽しまつりて、信賴自からは、天皇のかはすべき朝餉あさぐしに居り、百官の上に立ちて機務を專斷す。百官未だ面めんと向つて、反抗する者こそあらざれ、心には、服せざるもの多く、自から大臣大將になりたれど、誰も大臣大將とは思はず、罵りて、悪右衛門督と云ひあへり。

茲に一人の硬骨男子あり。藤原光賴といふ。信賴の母方の叔父にて、官は左衛門督たり。一日、信賴のぶ會議ありとて、百官を呼ぶ。光賴も至る。信賴

百官の上に座しけるが、本當の官と云へば、信賴は右衛門督、光賴は左衛門督、光賴が上なり。光賴進んで、信賴の上に座す。大力の剛の人也。信賴恐れ、うつむく。百官はあきれて物も言はず。やゝありて、光賴、信賴に向ひ、今日參らざらむ者は、死罪に行はるべしとやらむ承りて參りぬ。抑も何事の御會議ぞと問へども、信賴は答へず。百官一言もいはず。御會議なければ、罷らむとて立ち去る。小氣味よき振舞まわかなと、人々ほめそやす。

光賴の弟惟方は、信賴に黨しけるが、光賴去るに臨み、惟方を人なき處に呼びて、之を責め、且つ勵ます所ありけるに、惟方、忽ち心を亂せり。その他、信賴に嫌きららざるもの多くなりたり。清盛も、名簿を信賴に入れて、他意なきを示し、而して、暗に天皇を出しまつらむことを圖る。さるに、信賴なほ悟らず、意滿ち、氣驕り、醉倒して日を送る。暴惡此上もなきが、其身は、彼の來ぬ間の沙上の假屋に安眠して、その危きを知らぬさま也。

一〇

信頼が事を舉げてより十七日目、即ち平治元年十二月二十六日の夜、惟方は、經宗と謀り、神器を擁し、天皇には女装せさせまつり、中宮と共に御車にのせまつりて、藻壁門より出づ。金子、平山こゝをかためたるが、怪みて、いかなる御車ぞと問ふ。惟方答へて、上臈女房たちの出で給ふなり。惟方があるぞ別の仔細あるまじと云へど、なほ怪みて弓にて、簾まきあげ、松明入れて見るに、主上御年若く、御容顔美麗におはす上に、女装せられければ、まことの官女と思ひて通しまゐらせたり。かくて、天皇は、六波羅なる清盛の邸に入らせ給ふ。今の大佛のあるあたりが、古の六波羅也。

上皇の方へは、藏人右少辨成頼参り、天皇には、既に行幸あらせられたり。急ぎいづかたへなりとも出でさせ給へと申すに、いたく驚かせ給ひ、殿上人の姿にやつして、恐び出で給ふ。月卿雲客一人も従へるもの無し。如何に御心細く、かばし給ひけむ。かくて、上皇は、御弟の法親王をたよりて、仁和寺に入らせ給ふ。三年前、崇徳上皇もこゝに落ちさせ給ひき。昨日は人の身

の上、今日は我が身の上、御兄弟とも万乗の御身を以て、而かも、同じ寺に落ちゆかざるを得給はざるは、さても如何なる御因縁にや。惟方は信頼と親しき仲なりしかど、兄の言に勵まされてより、心を翻し、天皇を出しまつるに最も苦心したる人也。身体小にして、官は檢非違使別當なれば、人呼んで、小別當と云へり。然るに、天皇を出しまつる中、媒を爲したればとて、人之を中小別當と云ひけるが、例の馱洒落に長じたる伊通、その中小別當の中は、中媒の中にはあらで、忠義の忠なるべし。一旦賊にくみしたるも、過を悔めて、忠義をつくしたればなりといふ。これはちと苦しき洒落也。信頼は惟方を信任して、天皇を守らせ、己れは前後も知らず、醉倒したりしに、ゆり起されて、ねむき目をこすり、く、天皇あらず、上皇もあらずと知り、こはそも如何にと、地圓太踏みて、くやしがりたれど、今更何の甲斐もなし。義朝も聞いて、大に驚き、俄に騒ぎ立ちて、其兵を檢するに、二千餘騎あり。いつ來襲するかも知れずとて、宮門をかため、備を嚴にす。されど天子なき皇宮は、もぬけの殻也。

信頼に與せしばかりに、源氏は今や朝敵となりける也。殊に一族の頼政などは、天皇おはさすなりて、早や異心をいだけり。

之に反して清盛の邸宅は、皇居となりぬ。天皇いまずと聞きて、關白、太政大臣、左右大臣、公卿、殿上人、われもくくと集り來り、内裏へゆかむとせし兵士も、それと聞いて歩を轉じて來るもの多く、清盛喜ぶこと、一方ならず。

一一

明くれば二十七日、清盛は留りて天皇を守護し、重盛、頼盛、教盛の三將三千餘騎を三手にわけて、進んで内裏に通る。内裏に在るものが賊軍にして、内裏を攻むる者が官軍なりといふ奇なる現象起れり。源氏の兵は二千餘騎、南西北三方の門を閉ぢ、東方の陽明、待賢、都芳の三門を開きて、敵を待ちうく。さきに保元の戦には、紅白の旗、兩方にまじりしが、今や判然相わかれて、内には、二十旒の白旗翻り、外には、三十旒の赤旗翻る。

義朝は、さきに諸弟を殺しつくしたり。今や一門の大將株は、たゞ十九歳

の義平、十六歳の朝長、十三歳の頼朝の三子あるのみ。義朝は、最も頼朝を愛せり。之に源家秘藏の重寶なる源太の産衣といふ鎧を着せたり。十三歳の小童ながらも、桎櫃は二葉よりかんばんし。攻守未だ定まらざる際、父に向ひて、何んぞ進んで平氏の邸を撃ち破り給はざると云ひけるは、さすがに、後日天下を掌握するの人也。

之に反して謀判の張本人なる信頼は、身体ばかりは肥大なれど、敵の鬨の聲を聞いて、今迄の空威張は何處へやら、顔色忽ち青ざめ、階を下らむとするに、膝ふるひて下りかねたり。馬に乘らむとするに、逸り切つたる逸物なれば、信頼乗る能はず、七八人にて馬を抱へ、二人して信頼を押し上ぐるに、その力餘りて、信頼は弓手の方へ乗り越して地に落ち、顔に紗ひしとつき、鼻血出づと、平治物語には、かきしるせり。弓手とは、左手也。今は馬に乗るに、洋式に據りて馬の左より乗れども、我國にては、左手に、弓をもつを以て、馬手即ち右手にて馬の鬣をとりて、馬の右より乗りたる也。

今迄は、信頼の舞臺なりしが、これからは義朝也。義朝日頃は、大将として、信頼を恐けるが、この様を見て、信頼といふ不覺人は、臆したりなるとはたと睨みて、郁芳門に向ふ。信頼はぶる／＼待賢門に向へり。

待賢門に向ひたるは、清盛の嫡男、平重盛也。未だ戦はざるに、信頼先づにげ隠る。義朝大に怒り、義平をして之に代らしむ。鎌田政家、佐々木秀義、三浦義澄、齋藤實盛、熊谷直實、平山季重、金子家忠等、一騎當千の十七騎之に従ふ。重盛は千騎の中、先づ五百騎だけ率ゐて門に入る。義平は、はじめ源氏の兵、みな重盛を目がけて戦ふ。義平は重盛を追うて、左近の櫻右近の橋を七たびめぐれり。重盛出で、再び新手の五百騎を率ゐて入る。義平之と接戦す。重盛走る。義平之を追ふ。義平には政家一人従ひ、重盛には景安、家泰の二人従へり。政家、重盛に通る。景安遮りて、政家と組む。義平は、重盛と組まむとせしが、先づ政家をすくはむとて、政家を助けて、景安を殺す。景安うたせてはとて、重盛は義平と組まむとせしが、家泰制して、自から義平と組む。政

家は重盛と組まむとせしが、先づ我君をすくはむとて、義平を助けて、家泰を殺す。おはれ、兩方の主従、武勇も武勇なるが、情けも情け、重盛は二士を失うて、漸く免れたり。

郁芳門へは、頼盛押寄す。義朝よく戦ひ、出で、追ふ。頼盛走る。政家の部下に八町次郎といふ者あり。よく走る。熊手を以て、頼盛の兜へうちかけて引く。頼盛刀を抜いて、その熊手の柄を切り、熊手を兜にかけたるまゝ、泰然として走る。その刀は、抜丸といふ平家の寶刀也。刀も刀、切りも切つたり。頼盛は清盛の弟なるが、異腹にて、後妻の子也。父忠盛、頼盛を愛して、抜丸を傳ふ。清盛爲に、頼盛に快よからざりき。

源氏今や、皇居を空にして、平氏の軍を撃つ。これは、平氏の計略にて、新築の皇居を、兵燹にかゝらしめざるやうに、計らへとの勅命ありければ、斯くは、源氏の軍を誘ひ出せる也。

源軍の進撃するや、信頼は先づ北をさして、落ちゆけり。平氏の軍は、みな

六波羅にひきかへす。源氏の軍進んで六波羅を攻む。清盛鯨波の聲を聞き、いざとて兜を逆様にかぶる。侍士之を注意しけるに、主上後に在れば背くべからずといふ。必ずしも周章たるにもあらざるかも知れされど、深沈大度の人とは云ふべからず。自から北臺に上りて指揮す。重盛は五百騎を率ゐて出づ。源頼政は三百騎を以て六條河原に陣し、形勢を觀望す。血氣の義平先づ之を衝く。頼政走つて六波羅に入る。こは、むしろ、その儘におくべかりし也。

いよく源軍は六波羅に押しよせ、大に戦つて引退く。せめて六波羅の門内に入らむとて、義平は決死の士五十騎を率ゐて、死物狂ひに戦ひて門内に突貫したるが、兼房敵せず。今はこれ迄なりとて、西をさして敗走す。義朝も今はこれ迄なりと死を決して進まむとしけるが、政家にとりめられ、北をさして敗走す。

これにて源氏敗れ、平氏勝ちて平治の亂も一段落つきたり。

一一

さきに北をさして逃げたる信頼は、たゞ命が惜しさに逃げたれど、何處といふあても無し。八瀬の松原にて、義朝のにぐるに逢ひ、我をすてゝにぐるかやと云へば、今更何の面目ありてか來りて我を見んとて、弓にて信頼の頬をうち、顧みずして去る。その時、信頼には、まだ五十騎ばかり従ひしが、あまりの不甲斐なさに、みな散りゆきて、たゞ乳兄弟の式部大輔のみ残る。夜、遠臺野を過ぐ。僧兵かぎつけて來りしが、たゞ二人の甲冑を剃ぎ取りて走る。僧兵は賊兵也。たゞ甲冑を取らむとする也。信頼は、後白河上皇のおはせる仁和寺にゆきて泣いて、哀を乞ふ。上皇は許し給ひたれど、天皇許し給はず。平氏の方にて、あれ程の恩物、いかして置きたりとて、何事も無しと、重盛は許さむとしけるが、清盛聽かず。終に斬罪に處せらる。死に臨みても、なほ恩痴をこぼして止まず、起きつ、伏しつ、刀を當てむやうもなし。止むを得ず押へて首を掻く。世にも見苦しき最期也。

義朝も比叡山の麓にて例の甲冑を取らむとする二三百の僧兵に要撃せらる。主従わづか三十餘騎也。齋藤實盛の計らひにて先づ冑一つ投ぐれば、怒に迷ひ、我も我もと先を争ふにつけ込み、蹴散して過ぐ。龍華越にて、又も四五百の僧兵に逢ふ。義隆は義家の子にして源氏第一の故老なるが、弓に當りて死す。朝長も股に矢創を負へり。三十餘人ばかり討たれたるに、僧兵は臆して引き退き、義朝漸く免るゝを得たり。

かくて、義朝は堅田まで落ちのびけるが、同勢多くては、却つて便宜悪しとて、三浦義澄、齋藤實盛、熊谷直實、平山季重など二十餘人を諭して、各散じて國にかへらしめ、義平、朝長、頼朝、重成、義信、政家、金王丸のみをつれて落つ。途にて最愛の頼朝を見失へり。美濃青墓の長者の家に、ひと先づ落ちつゝ、義平をやりて、兵を東山道に募らしむ。朝長を信濃甲斐にやらむとせしが、創の爲めに行く能はず、とゞまらば、敵に死耻さらさむとて、義朝之を刺殺せり。

二三百人ばかり押寄せ。重成自から義朝と稱して討死す。その隙に、義朝は免れ出で、義信をして國にかへらしめ、政家、金王丸、玄光の三人をつれて、尾張さして落ちゆく。玄光は青墓の長者の弟にて、このあたりに隠れなき剛の者也。

かくて、義朝は、尾張知多郡の内海にゆきて、長田忠致に依る。これ義朝譜代の家臣にして、政家の舅也。然るに、忠致は不義非道の賊子也。うはへには、喜びてもてなす様にして、陰に義朝を殺むむとし、義朝に浴を進む。義朝浴す。金王丸之に侍す。義朝衣を呼ぶ。至らず。金王丸取りにゆく。恐び入りたる橘七五郎つと出で、義朝に組む。義朝心得たりと組み伏す。彌七兵衛、濱田三郎右左より脇の下を二刀づゝ刺す。さすがの猛將も、敢なく息絶えたり。爲朝と云ひ、義朝と云ひ、のちの頼家と云ひ、いづれも同じく浴室に要撃せられたるが、これ一面には、源氏の諸將の猛烈を證す。刀をもたぬ丸裸の時ならでは、手出しする能はざる也。

政家は、正に忠致と對酌す。變を聞いて立たむとす。酌する男、刀を抜いて斬りかゝる。政家之を刺す。忠致の子景致後より政家を斬り殺す。政家の妻となれる忠致の女は、かけつけて、政家の刀にて自害す。あゝ、この父にして、この娘もある哉。義朝も、政家も、年同じく三十八歳也。

金王丸浴室にもどれば、義朝は既に殺されたり。立るに三人を湯室の口に斬り殺す。玄光も出で來り、共に長田父子を撃たむとすれど、戸締堅くして入る能はず、止むを得ず、馬屋より馬ひき出し、打乗りて去れり。忠致、景致は、義朝、政家の首を持ちて京に上る。首は獄門にかけられたり。忠致は壹岐守に、景致は兵衛尉に拜せらる。長田父子少し當がはづれて、播磨の國を賜はり、左馬頭になさるゝか、さもなくば美濃尾張を賜はりてこそ勲賞なれど、不足をいふに、清盛始め憎まぬものなく、うか／＼して居れば、身も危さうなれば、骨折損の草臥儲け、逆賊の名のみ麻ち得て、空しく歸りぬ。

頼朝起るや、長田父子は、ず／＼しくも來り投ず。頼朝うはべに之を容

れて、さん／＼西國に働かせ、いざ褒美にとて、父の墓前にて、なぶり殺しにせり。頼朝は、恐ぶ人にて、よく骨肉を食みたるが、唯この長田父子に報いたる一事は、げにさもあるべしと、千古の下なは痛快に思はるゝ也。

政家は、保元の戰に、爲朝の^手首を射たるほどの剛の者なるが、むざ／＼酒座に殺されたるは、舅家と思ひて、油断したれば也。二子あり。長を盛政と云ひ、次を光政と云ふ。二人とも、義經に事へ、佐藤繼信、その弟忠信と共に、義經の四天王と稱せられたるが、盛政は一谷に討死し、光政は、繼信と同じく屋島に討死せり。

一四

悪源太、義平は、青墓にて、父と手を分ち、飛彈にいたりて、兵を募るに、應ずる者多し。さるに、義朝死せりと聞きて、みな散じ去る。義平自殺せむと思ひしが、深仇あり、大丈夫安りに死すべけむやとて、勇を鼓して、ひとり京師に上り、平氏を伺ふ。志内景澄といふ者、源氏の臣なりしが、人質を平氏に委ねて

平氏に事へ時變を待つ。たま／＼義平に逢ひて大に喜び、伴ひかへりて己れの奴となし、平氏の邸に出入す。宿の主人、義平の容貌の非凡なるを怪しく思ひ、食する毎に、人に見せざるを益怪しく思ひて、そつとのぞきしに餌を取りかへて食ふ。主人驚いて之を平氏に告ぐ。清盛、難波經房をして三百の兵を率ゐて、其舎を圍ましむ。義平刀を抜き、躍り出で、立るに數人を斬りて、屋上に登るよと見えしが、早や、姿は見えずなりけり。景澄のみを捕ふ。清盛見て、その二心を懐けるを罵る。景澄曰く、我れ世々源氏に事へたり。たゞ假に汝に事へて、源氏興隆の時をこそ待て。眞に汝に事ふるものならむや。それを悟らざりしは、間が抜けたる也。われを嘲るは、そこがましきも、亦甚しと。清盛怒つて、之を斬れり。

義平、一旦は重圍の中より脱したるが、逢坂まで來り、山中に困臥しけるに、經房五十騎を率ゐて來るに逢ふ。『これやこの行くもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關』と、蟬丸は咏じけむ。義平にとりては、敵に逢ふの讎

なりける。蹶起して奮闘したるが、經房に腕を射られて、刀を揮ふ能はず、殊に一人に五十人、さすがの義平も如何ともする能はずして、終に縛に就けり。六波羅につれゆかれて、麻の下に座らせらるゝに、われ命窮すといへども、何ぞこのやうな處に在らむやとて、自から起ちて座に上る。清盛出で、之に面し、御身さきに三百騎に脱したるに、今、五十騎に捕へられたるは如何にぞと曰へば、義平笑つて、命也。御身も命がつくれば、またこのやうになるべし。今は何をか言はむ。たゞ早く我を斬れといふ。清盛經房をして六條河原に斬らしむ。義平大に罵つて、保元中多く武士を斬りたるが、すべて夜に於てしたりき。今、白晝我を斬るは、何等の無禮ぞ。平家には物のわけがわかりしもの一人も無し。さきに、信賴我計を用ゐて、安部野に要撃したらむには、平氏は遺類なかりけむものといふ。それは、今更何の役にも立たぬ後言にあらずやと云へば、よく言たり。まことに、われには後言なり。やれ、汝は義平の首打たむほどの者か。よく斬れ。悪く斬らば、しや面に喰

いつかひするぞといふ。我が手にかけて首がいかでか我面に喰ひつかるべきと云へば、唯今の事には非ず。後日雷となりて蹴殺さむするぞといふ。經房刀を抜いて後にまはれば、よく斬れとにらみたる眼さしげに、常人にはあらざりけり。義平時に年二十。

仁安三年七月七日清盛始め、平家の主従、往いて攝津の布引瀧を見物す。興正に耐なるに、一天俄にかきくもりて雷大に鳴る。經房も従ひけるが、あれ見られよ、手鞠はどのものが飛び来るは、義平の靈魂ぞとて、刀を抜く間もなく、霹靂一聲、黒雲、經房の身を蔽ふよと見えしが、忽ち微塵になりて死にたり。當時の人は、之を義平の祟となせり。されど、今日の知識より見れば、經房の死に、何も不思議は無し。義平の祟がなくとも、經房は、必ず雷に打たるべかりし也。何となれば、刀を抜きたれば也。その刀を抜きたることが祟と云へば、祟也。金屬が電氣の善導體なることは、今日は、三尺の童子も、之を知る。平治物語にも、經房の刀は、抜きたるまゝに、鐸本つばもとまで反り返りたり

とあり。愈以て經房の抜きたる刀の電氣を導きしことがわかる也。

一五

頼朝は父兄と共に夜を冒して、ちちゆきけるが、年はまだ十三歳、殊に今朝よりの戦に、いたく疲れたれば、馬上にて眠るほどに、ひとりおくれたり。森山の驛をすぐるに、驛の者ども、馬蹄の音をきゝつけ、多勢出で来て、捕へむとす。頼朝一刀にて先づ進める源内兵衛真弘ひなやまを斬り、つづいて進める者をも斬る。衆辟易す。かくて、漸く虎口を脱したり。義朝は頼朝の在らざるに氣付きて、政家をして還りさがさしむ。途に相逢ひて、つれ来る。事の由を聞きて、あつばれ出かしたりとて、愁の中にも、いたく喜べり。

鏡の驛を過ぎ、小野より東海道を右にして行くに、雪甚し。馬を棄て、歩す。頼朝再びおくれたり。義朝また政家をしてさがさしめたれども、さがすに由なくして、空しく歸る。ささの喜に引かへて、義朝の悲や如何なりけむ。されど、頼朝は、命冥加の人也。大夫屬定家といふ土家の情にて、寺にか

くれ、ついで其家にかくれたり。あくる年になりて、青幕の長者ちやうじやの家にゆき、やがて東國さして下る。關ヶ原にて平頼盛の部將平宗清が尾張より上洛せるに逢ひ、藪の中にひそみしが、見出されて捕はれたり。途に青幕の長者の家に宿して、京につれゆく。長者の娘は延壽と云ひけるが、頼朝には異母妹なる娘一人あり。夜叉御前とて、年十一也。兄の捕はれてゆくを見て、悲に堪へず、ひそかに家を出で、株瀬川の水泡と消えぬ。

頼朝今は祖上の魚也。宗清預りてありけるが、命を助かりたくは無きかと問へば、今度の合戦に父撃たれ、兄弟みな失せぬれば、僧となりて、父祖の後世を弔ひたくて、命が惜しきなりといふ。宗清之を憐む。宗清の事ふる頼盛の母即ち清盛の繼母は、池禪尼とて慈悲ぶかき人也。頼朝の事を聞きて之を憐む。早世せる子の家盛に似たりと聞きて、益之を憐む。頼朝、一日小刀と木片とを乞ふ。こは、何たる御遊戯ぞ。御父も御兄も失せ給ひつるに、御經みよつねを遊ばさでと云へば、天下に我ればかり憂苦の深きものはあらし。去

年三月には、母に死別れ、今は父も兄も撃たれたり。殊に父の四十九日も程近し。供佛施僧の儀は、叶はずとも、せめて卒都婆そとばなりとも作りたくて、小刀と木片とを乞ふなりといふ。宗清覺えず、感涙をおとす。池禪師いけのぜんしはなほ更泣く。命ばかりは助け給へと、切に重盛に乞ひ、清盛に乞ふ。清盛止むを得ず、許して、之を伊豆に流す。途に見るもの、これ虎を放つが如しと云ひあへりとかや。

一六

なほ義朝の子、常盤御前の腹に、三子あり。長は今若とて八歳なり。次は乙若とて六歳なり。末は牛若とて二歳なり。あくる年の二月十日、母子四人を出で、常盤の伯母の伏見に住めるを尋ねゆけば、昨日にかはる人心避けて逢はず。牛若を懐に入れ、今若、乙若の手をとりてはるく、大和宇陀郡龍門なる伯父の家へとて、たどりゆく。

雪壓笠端風捲袂。 瓠々覓乳若爲情。 他年鐵拐峰頭險。

叱咤三軍是此聲。

と梁川星巖の咏ぜしはこの際の事也。かくて伯父の家にありけるが平家にては常盤の母を搦へ三兒のありかを白状せよと拷問烈しき由をき、三兒をつれて六波羅にいたり自からと三兒とを以て母の命に代らむことを哀願す。清盛その美なるを喜びわれに事へよ母と三兒とを助けむといふ。事ふれば女の操を破る。事へざれば親と子とが殺さる。あゝ如何にかすべし。常盤は終に清盛に従ひぬ。

今若は全成と改む。僧となりて醍醐に居たりしがその性慥悍人之を醍醐の悪禪師と呼べり。後頼朝に従ふ。遠江の河野に住みけるが建仁中叛せりと聞きて頼家武田信光をして之と捕へしめて常陸に放ち終に入田知家をして殺さしめたり。

乙若は義圓と改む。剃髮して圓慧法親王の坊官となりしがのち頼朝に従ひ叔父行家と共に平氏と尾張の洲股川に戦ひし時夜獨り進みて殺され

たり。

牛若は九郎判官源義經の事也。鞍馬寺に置かれ名を遮那王と改む。十一歳の時諸家の系圖を閲して慨然として奮起し晝は書を読み夜は武技を習へり。鞍馬寺の僧覺日剃度せむとすれど肯んぜず。往いて陸奥の藤原秀衡に依らむと欲す。金商の吉次といふもの陸奥に往來しけるがたまたま鞍馬に來りければ之に其志を語る。つれ申さば寺僧怒らむと云へばわれ亂暴にして寺にてはもてあまして居れば結句喜ぶなりといふ。さればとて深巢頼重と圖りて陸奥に同行す。秀衡喜んで之を迎ふ。秀衡は後三年の役義家に屬したる清衡の孫にして基衡の子也。この三代の間奥羽二大州を占有して極北に一種の獨立國をつくれり。その榮華の俤は今もなほ陸中の中尊寺の光堂に残る。

常盤の生める三子は、いづれも源氏の血を傳へたる豪傑也。

義朝の子十人、義平、朝長、頼朝、全成、義圓、義經の事は既に書きしるせり。義門は夭折せり。希義は頼義の同母弟なるが、平治の亂後、土佐に流さる。頼朝の兵を起すや、平氏國人蓮池家綱をして之を殺さしむ。家綱之を告ぐ。希義曰く、我れ亡父の爲めに、毎日法華經を誦す。今日未だ課を終へず。汝しばらく待てと。家綱之を諾す。希義徐に法華經二卷を誦し、終つて自殺せり。源氏の子たるに負かず。

範頼は、蒲冠者と稱す。幼にして藤原範季に養はれしを以て、難を免るゝを得たり。のちに、義經と共に平氏を討ちたる大將也。

第十子の知家は、外曾祖の八田宗綱にかくまはれて、難を免れ、のち頼朝に大に重く用ゐられたり。

一八

かくて源氏は一時全滅せり。支族の頼政と同じく頼光の血をひける多田源氏とあれども、勢微也。平氏の一部將と伍をなすくらゐのものにて、到

底平氏と對抗すべくもあらざる也。

常盤に就いては、古來是とするものもあれば、非とするものもあり。朝には源氏の妾となり、夕に其敵平氏の妾となるといふ事は、千年間一たび起るか起らぬかの異例なれば、もとより常道を以て論ずべからず。母と子との命を助け、源氏の爲めに其血を存したりといふの美事は、單に女の操をたもつといふの一事には換ふべからず。常盤は清盛に事へて一女を生みけるが、清盛の寵衰へて出で、大藏卿藤原長成に嫁せり。常盤の人となりと想像するに、必ずや、多血質の女なるべし。氣も利く。口も上手。悲む時は、非常に悲むかと思へば、直ぐに笑ひ出すといふ風にて、所謂浮氣者也。藝者や女郎に適する性格也。母の捕れたるを聞き、三兒をつれて六波羅に行きたるは、子に殘酷なるやうなれど、實は然らず。龍門の伯父も、よい顔はせざりしなるべく、又潜伏しからすといふ事は、萬中一あるを保せず。どうせ捕へらるゝならば、自首して出た方が罪がいくらか軽くなるわけ也。

平治の亂を起したる信頼は、よつほどの恐物也。之を寵愛し給ひたる後白河天皇は、不明と云はざるべからず。之に與みしたる義朝は賢と云ふべからず。頼政が裏切せし時、義朝罵りて、源氏にあるまじき卑劣の舉動と云へば、信頼の如き不覺人に與みする恐物を出せるは、源氏の耻辱なりと、頼政は罵りかへしたるが、全くその通り也。

天子の有無に由りて向背を決したる頼政は、なほ可也。裏切りして、天子を擁して出でたる惟方經宗は、この亂に於ける第一の姦物也。而して最も馬鹿を見たるは、義頼也。次に馬鹿を見たるは、信頼也。

第十章 平氏の榮華

信西入道、後白河帝を讓る……院政の三代目……清盛太政大臣となる……清盛天子の祖となる……平氏一門の官職領地……二位尼……美福門院と二條帝……二代后……古都の月……清盛漁夫の利を占む……平氏榮達の原因……六條天皇の御早世……平氏の公達の美觀……小督局……仕丁風流……女の哭聲……高倉天皇は仁君也。

後白河天皇の傳たりし信西入道は、天皇を讓りて曰く、叛臣側にわれども、知り給はず。人之を言ふも、誓ひ給はず。不明なるも甚し。然れども強記人に過ぐ。聞かれし事は、歲月を経るとも、忘れ給はず。興建せむとおぼさば、意を決して施行して、故常に拘はり給はずと。その子、俊憲も亦曰く、帝は全く晋の惠王也。八王權を争ふこと遠からざるべしと。げにや、賣家と唐様で書く三代目、院政は、白河帝に始まり、鳥羽帝を経て、三代目の後白河帝にいたりて亡びたり。而して鎌倉幕府起れり。

この間、平氏の勃興ありと雖も、こは唯平家が藤原氏に代りしまで也。而

して藤原氏に無き兵力を有せしだけ藤原氏よりも一層猛烈なりき。清盛はたゞ藤原氏を真似したり。頼朝に至りて幕府といふものを始めて、わが國の政治に空前の大變化を來たせり。

茲に三院の間の天皇を數へむに、白河御院政の時に堀河天皇あり。鳥羽御院政の時に近衛崇徳二天皇あり。後白河御院政の時に二條六條高倉安德後鳥羽の五天皇あり。院を合せて都合十一天皇なれども、實は三天皇也。この間源氏は義家が武門第一の隆盛を極めしが、其後衰へ平治に至りて滅亡し、平氏は頭を出しかけて、終に清盛に至りて、隆盛の極に達し、清盛死して間もなく平氏亡び、源氏大に榮えたり。實に院政の間は源平二氏の興亡盛衰の最も烈しかりし時代也。而して、我國政治に空前の變化ありし時代也。國は敵あるに亡びず。而して實に敵なきに亡ぶ。藤原氏は平安朝に至りて、他の諸族を壓して、ひとり隆盛を極めたり。その隆盛の極に達したる時は、即ち藤原氏の敵なきの時也。倒したるは、文の敵也。而して誰か知ら

むや、地下人といやしめたる源氏や平氏やなどが、武を以て我敵とならむとは。太平の懶眠は、天慶の亂にも覺めず。忠常の亂にも覺めず。前九年の役にも覺めず。義親の亂にも覺めず。保元の亂にも覺めず。平治の亂に覺むるも、時既にふそし。頼義、義家は、官こそ、まだ低かりけれ、實力に於て、既に鎌倉將軍の前身なりき。これが最も恐しき敵なれども、藤原氏は悟らず。平氏は忠盛猫をかぶりて、元來の武門が半ば文になりたり。その文いよいよ進み、清盛に至りては、文にても、既に藤原氏の敵となるに足る。加ふるに、藤原氏に無き武を以てす。これ平氏が藤原氏に勝ちたる所以也。文一方は半文半武に如かず。半文半武も武一方に如かず。これ終に源氏が平氏を倒したる所以也。

平治の亂を平げたるは、全く清盛一門の功也。天皇を始めまつり、關白以下、の諸公卿、清盛の宅に投じて、漸く安堵することを得たり。而してその清盛は、恩物にはあらぬ英雄也。藤原氏は自然に平氏に對して、頭があがらざ

るべき筈也。

二

平治の亂平らぎて清盛始め、一門の子第それく賞あり。永曆元年即ち平治の亂の翌年、清盛は正三位に叙し、ついで參議に任ず。ついで權大納言となり、仁安元年には正二位に叙し、内大臣に拜す。其翌年、從一位太政大臣にのぼる。こゝに至りて位人臣を極めたり。これ平治の亂よりわづか八年目の事也。その後四年、娘の徳子女御となり、間もなく立ちて中宮となる。健禮門院これ也。其後六年、子の重盛、宗盛相並びて、左右近衛大將たり。その翌年、中宮皇子を生じ、入内してより七年目也。其後三年、中宮生める所の皇子位に即き給ふ。是に於て、清盛は天子の外祖となれり。これ實に平治の亂より二十二年目の事也。先には藤原氏の一門ならでは、殿上人以上になるを得ざりしが、今は平氏の縁故ある者にあらざれば、官職を望むを得ず。平氏の一門にして公卿たるもの十六人、殿上人三十餘人、その他京官に就き、

若しくは諸國に守たるもの六十餘人、所領三十餘國、莊園五百箇所の多きに及ぶ。これ藤原氏よりもなほ一層上にのぼりたる也。

平時忠廣言を吐いて曰く、方今平氏にあらざる者は、人に非ずと。この時忠は高棟王の子孫也。其弟高見王が清盛の祖先也。而して清盛の後妻は、この時忠の妹也。時子といふ。二位尼これ也。宗盛、知盛、重衡は、その生める所也。嫡孫の維盛が清盛の後をつがずして、宗盛がつぎたるにても、時子の勢力想ふべし。時忠の今一人の妹、即ち時子の妹、滋子は、後白河帝の皇后にして、高倉天皇は、其生み給へる所也。建春門院と稱す。時忠の得意や如何なりけむ。されど、これ竟に虎の威を假る狐のみ。

三

二條天皇は、後白河帝の御長子也。院政百七年の間、院政に敵せしは、唯この天皇ばかり也。幼にして敏慧、仁和寺の覺性法親王に就いて學び、はゞ俱舎の大義に通じ給へり。このまゝ僧となり給ふべき處、後白河帝が思ひも

かけず位に即き給ひければ、寺より出で、立ちて皇太子となり給へり。

後白河帝は美福門院の立て給ふ所也。二條帝は早くより御母に死別れて、門院に養はれ給へり。寺より出で、皇太子となり給ひしも、門院の議に出でたる也。門院は、崇徳上皇を悪みて、その皇子を立つるが、御いやさに後白河帝よりは、二條帝を可愛くおぼし給ひしなるべし。後白河帝は門院に對しては、頭があがり給はず。御在位わづかに三年にして、位を二條天皇に譲り給ふ。二條天皇時に御年十六。さるに、門院は、その翌年に薨じ給ふ。門院にありては、二條帝は第二の近衛天皇也。さるに、その御生先を見給はで、而かも四十四歳の壯齡を以て薨じ給ひしは、如何に殘惜しくおぼされけむ。二條帝も如何に悲み給ひけむ。廢朝三日に及べり。

史に稱す、二條帝は沈重にして移らずと。我儘に育ちて、強情甚し。近衛皇后の美なるを聞き召し、之を宮に納れ給ふ。御白河上皇大に反對し給へり。淫風の圓熟したりし平安朝にありても、さすがに百官みな驚く。され

と天子に父母なしとして、頑として動き給はず。二度皇后となり給ふことは、今古唯この皇后のみ也。當時世人は二代后といへり。右大臣藤原公能の御娘也。皇后は、いなみ給ひたれども、世の中に何よりも重き勅命也。殊に父の公能、外戚の威をふるはむとて、父の權力を以て、從へと強ふ。皇后泣いて、君と父とに身を任せ給ひし御心の中や如何なりけむ。

この二代后、近衛帝にも數年にして死別れ給ひけるが、二條帝にも數年にして死別れ給へり。平氏が一時都を福原に移しける時、御同胞の後徳大寺實定、清盛に暇乞ひて、今は故國となれる都に上り、この後の宮に參る。いろ／＼御話ありて、實定は福原の住みうき事を云ひて泣き、后は都の荒れ行くこと仰せられて泣き給ふ。后は琵琶、待宵待從は琴、實定は笛にて合奏しけるが、

古き都を來て見れば、
浅茅が原とぞ成りにける。

月の光は隈なくて、
秋風のみぞ身には浸む。

と、實定の詠じけるに、后を始め、女房たち皆袖をしぼらぬは無かりき。

四

天子に父母なしと宣給ひし御一言にても、他は推して知るべし。美福門院の意は、われにありて、上皇にあらざるをも御承知ありて、御父を侮り給ふ。されど、上皇は位は譲り給ひても、白河院の例にならひて、院政を執り給はむとす。一大衝突茲に宮中に起れり。蚌鶴相争うて、漁夫の利となるとかや。清盛はやがて其漁夫の利を占めたるもの也。

二條帝あまりに親を親とも思ひ給はぬに、何が憎く、て、こゝに至れるぞと、後白河上皇は泣かせ給ひしことあり。察しまつるに、上皇は後年、清盛に苦しめられ給ひ、義仲に苦しめられ給ひ、なほいろく苦しめられしこと、極めて多かりしかと、最も苦まれしは、この天皇なるべし。時の人、二條帝は政事には長じ給ひたれど、不孝の御子なりと云へり。帝は自から政を行はむとて、藤原經宗、藤原惟方を信任し給ふ。上皇は院政を執り給はむとて、益重く清

盛を用ゐて、この二人を排斥し給へり。御在位七年にして早世し給ふ。御年わづかに二十三。

五

清盛の一女が、關白基實の妻となれることは、前既に之を言へり。二條天皇位に即き給ひて、基實は右大臣にして、忠通に代りて關白となれり。太政大臣宗輔、左大臣伊通、内大臣兼左近衛大將藤原公教、權大納言兼右衛門大將藤原公能、この役割はもとのまゝにして、これが當時第一流の高官也。平治の亂後、宗輔やめて伊通太政大臣となる。その伊通も、やがて永萬元年に死せり。天皇の崩御と同じ年也。その翌年には、基實死し、又その翌年に、清盛太政大臣となれり。

清盛が榮達の早かりし所以を、こゝに總括して見むに、父の餘蔭一也。保元平治の戦功二也。藤原になき半文半武三也。藤原氏に人なきこと四也。二條天皇と御白河上皇との軋轢甚しかりしこと五也。女縁の勢力六也。

源氏倒れしこと七也。院政の關係八也。子に重盛ありしこと九也。今一の第十として、清盛が一代の偉人たりしことは言ふまでもなきこと也。

六

六條天皇、二條天皇について立ち給ふ。御年わづかに二歳、二條天皇の第二子におはす。間もなく、高倉天皇皇太子となり給ふ。後白河天皇の第四子にして、六條天皇の叔父に當る。而かも御年五歳。天皇が二歳にして、皇太子が五歳、而かも叔父なりといふの異例起れり。是れも天皇と上皇と軋轢の結果、天皇崩御に臨みて、位を皇子に譲り給ひ、崩御の後、上皇は直にわが皇子を皇太子とし給へり。六條天皇は御在位わづかに三年にして、位を譲り給ひ、のち八年、御年十三にして崩御す。世にも果敢なき御一期なりき。

七

高倉天皇も、御年二十一にして早世し給へり。天皇の御位に即き給し頃は、清盛既に太政大臣を辭したり。攝政基房、左大臣兼左近衛大將藤原經宗、

右大臣藤原兼實、内大臣兼右近衛大將藤原忠雅といふ役割也。基房は、實基の弟也。

建禮門院右京大夫集一部群書類從の中に在り。その名の示すが如く、建禮門院に事へたる右京大夫といふ才女の歌集なるが、歌よりも寧ろ序書の文章が美なる一種無類の歌集也。右京大夫は、重盛の次男資盛と契りたる美人にて、多くの平家の公達に關する風流韻事を歌へり。清盛既に美男也。この歌集にては、維盛を當時第一の美男とせり。資盛も美也、重衡も美也。高倉帝も美にして、建禮門院も美也。右京大夫は、天皇と中宮と並び給ひし様の目もあやに見ゆることを記して、

雲の上に斯る月日のひかり見る

身の契りさへうれしとぞ思ふ

高倉帝は、建禮門院よりも小督局を愛し給へり。局は、櫻町中納言成憲の娘にて、即ち信西入道の孫女也。中納言は、屋敷のぐるりに吉野山の山櫻を

植ゑたる風流人なるが家の中には、櫻にもまさる解語の名花咲き出でたる也。中宮の寵局に移りければ、清盛怒ること甚し。かくては、君の御爲め悪しかりなむとて、宮を出で、嵯峨野に隠る。帝御歎一方ならず、夜となく盡となく、涙に沈ませ給ふ。清盛益怒り、中宮をわが邸に引取る。侍臣宮女みな清盛を憚りて、伺候するものも無し。ある夜、仲國召に應じて出づれば、小督局をさがし出して來よと宣給ふ。寮の御馬賜はりて、明月に鞭をあげ、嵯峨野の奥、聞くも憐れなる想夫憐の一曲、琴の爪音をしるべに、漸くそれと在所を知りしは、如何にうれしかりけむ。しばし、局を宮にかくまひ給ひしが、それも終にあらはれ、追はれて、局は清閑寺にて、緑の黒髪削りおとす。その後間もなく、帝は崩御あらせ給ひけるが、朕を小督が剃髪せし清閑寺の側に葬れとは、世にも果敢なき御遺詔なる哉。

高倉天皇は、賢明にして仁孝、愷色にあらはれず。清原頼業に就いて學び給ひけるが、才藻英發詩を善くし、音樂をよくし、殊に笛に妙を得給へり。御

幼時、楓を献ずる者あり、大に之を愛し、藤原信成をして守らしめ給ふ。一日、信成の留守に、仕丁ども、その枝を折り、焚いて酒を煖む。信成歸りて、大に驚き、仕丁を縛す。恰も天皇より、楓を上つれとの勅ありければ、有のまゝの事を奏し、叩頭して罪を乞ふ。帝從容として、白樂天の詩に『林間煖酒燒紅葉、石上題詩拂青苔』の句あり。風流の趣を得たる仕丁なりとのみにて、罪を問ひ給はざりき。或夜遙に女の哭聲を聞き、その追剝に逢ひしことを知り給ひて、中宮の衣を賜はりしこともありき。平家の暴威益つゆのり、法皇は幽せられ、御母はみまかり給ひ、最愛の小督は尼となるなど、むらがり重る愁雲は、この仁君の御命を縮めけむ。後白河法皇は更なり、朝野悉く哀惜せり。院政百七年の間、聖徳の仰ぐに足るべきは、獨り高倉天皇ありしのみ也。

第十一章 鹿谷の會合

經宗惟方流さる……重盛宗盛の左右大將……實定殿に詣つ……平氏と藤島嗣……燈籠大臣……妓土……佛師
前……實定左大將となる……有子の入水……瓶子倒る……行綱の裏切り……西光の白狀……重盛父を護む……
成親等流さる……安徳天皇生る……有王俊寛を尋ね

一

平治の亂の後、間もなく、經宗は阿波に、惟方は長門に流されたり。之が局に當りたる者は、清盛なれども、清盛は直接の敵には非ず。二條天皇と後白河上皇とが御不和にして、この二人は、天皇を輔けたれば、上皇清盛の力を假りて、之を排除し給へる也。後、經宗は應保二年召し還され、長寛二年官爵を復せられたり。惟方はもつとかくれて、仁安元年に赦されて都に歸れり。後、白河上皇は、清盛の力を假りて、天皇を抑へ給へり。されど、その代りに、清盛が威張り出したり。こゝに始めて清盛を厭ひ給ふも、時既にふそし。下にも平氏に快からざるもの多し。藤原成親の如き、其尤なる者也。

成親は平氏の近き親類也。即ち成親の子なる成經の妻は平教盛の女也。成親の妹は重盛の妻也。娘は重盛の嫡男維盛の妻也。即ち六代丸の母也。成親は、後白河上皇の寵あり。平治の亂信賴に興みして殺さるべかりしを、上皇と重盛との情によりて、漸く免れたり。さるに治承元年、重盛は右近衛大將より左近衛大將に轉じ、その弟宗盛、權中納言にして右近衛大將を兼ねたるは、不次の甚しき昇進也。建禮門院の右京大夫は、兄弟が並びて左右の大將となれるを祝ふとて、

いとしく咲きそふ花の梢かな

三笠の山に枝をつらねて

とこそ歌ひたれ。滿朝みな目をそばだつ。殊に八人の大納言、二人の中納言は、宗盛に官を越えられて、憤懣一方ならず。實定は大納言の筆頭也。成親は權大納言也。二人の不平最も甚し。而して、實定は巧にして其志を遂げ、成親は拙にして其身を亡せり。

二

實定は大納言を辭して山に入り、前中納言顯長に寄すとて、
夜半に吹く嵐につけて思ふかな

都もかくや秋はさびしき

顯長の返し、

世の中にあきはてぬれば都にも

今はあらしの音のみぞする

かくて、實定は僧とならむとす。その臣、佐藤近宗之を諫め、且つ策を進めて曰く、宜しく平氏の崇敬せる嚴島祠に祈り給ふべしと。實定げにもとて、心を翻して嚴島祠に參詣す。

三

藤原氏は春日神社を氏神にひかへたり。その側に興福寺といふ檀那寺をも有せり。清盛はすべての僧兵を敵としたり。せめて氏神に拜すべきも

のなかるべからず。清盛安藝守たりし時、既に靈夢に感じ、嚴島祠を改築して、其觀を改めたり。榮達して後は、崇敬ますくわつし。内侍とて、美女を多く集めて神に事へしむ。一方には、重盛は邸内に佛堂を設け、四十八佛を安置し、一佛毎に毎夜燈籠を點じ、一燈籠毎に一美女を配し、都合四十八美人を集め、自から堂の中央に坐し、美人をして、盛粧して念佛唱へつゝ廻らしめ、次に六人づゝ番を結びて、鼓銅鈸子に合せて、

心の闇の深さをば 燈籠の火こそ照すなれ

彌陀の誓を憑ひ身は 照さぬ所なかりけり

といふ今様のみをくりかへしく歌はしむ。如何に美觀なりけむ。世人、重盛を燈籠大臣と云へり。

四

かく、平氏は美人をして神にも、佛にも事へしめけるくらゐなれば、清盛の邸内に美人の満ちたりしは、云ふまでも無きこと也。清盛は、妓王といふ白

拍子びょうしを寵愛せり。その妹妓女も亦白拍子にして、共に當時第一流の白拍子也。然るに佛御前といふ白拍子の上手あらはれたり。年わづかに十六。絶世の妙舞一たび平相國のお目に入れればやとて、清盛の邸に推參す。清盛その無禮を怒りて、入れず。同情に富める祇王之をなだむるに、清盛色解けて之を入れ、舞を演ぜしむ。

君を始めて見る時は 千秋も経ぬべし姫小松

御前の池の龜岡に 鶴こそ群れ居て遊ぶなれ

と歌ふ聲もよし、舞は上手也、殊に絶世の美人也。

よしさらば思ひのまゝにつらかれよ

さなきは人の忘れ難きに

と歌ふに至りて、清盛益威に堪へず。強ひて佛御前を入れて、妓王を追ひ出す。妓王去るに臨み障子に泣く／＼書きつく。

萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草

いづれか秋にあはで果つべき

その後清盛は、妓王の許もとに使をやりて、いかに妓王、その後は何事かある。佛御前がさびしく見るに、出で、妓を演ぜよといふ。餘りの事に、妓王返事はせず、涙を袖に伏し沈む。清盛再び召す。母恐れて強ひて行かしむ。その時歌へる今様に、

佛も昔は凡夫なり

我等も終には佛なり

いづれも佛性具せる身を 隔つるみこそ悲しけれ

都に在らば、また如何なる耻をも憂目をも見るらむとて、妓主は妓女と共に、嵯峨野の奥に菴を結びて髪を剃る。妓王時に年二十一、妓女は十九。母も來りて髪を剃る、年四十五。秋風早や佛御前の身にも吹きけむ。妓王の菴を尋ね來り、泣く／＼謝して、厄となりたき由をいふに、昔の怨も忘れ、之を許して同じく住む。佛御前は、時に年十七也。妓王にも、佛にも、子なし。嚴島の内侍の腹に、清盛の子一人あり。女なり。後白河院の女房となれり。